

2019 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2019)

目次

1. 各科目についての報告.....	2
2. 2019年度 Placement Test実施報告.....	117
3. 2019年度日本語相談室実施報告.....	121
4. 2019年度立教大学漢字検定試験実施報告.....	128
5. 2019年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告.....	129
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告.....	131
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告.....	131
8. 日本語教育センターニュースレター発行報告.....	132
9. 短期日本語プログラム報告（A）	132
10. 短期日本語プログラム報告（B）	151
11. センター員活動報告.....	153
12. 2019年度FD記録.....	158

2019年度日本語教育センター運営体制

2019年度日本語教育センター会議開催記録

1. 各科目についての報告

2019 年度 J0 授業記録

コース概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜春学期＞a クラス：藤田恵、三浦綾乃

b クラス：開めぐみ、東平福美、山内薫

＜秋学期＞a クラス：武田聡子、藤田恵

b クラス：開めぐみ、布村猛、三浦綾乃

c クラス：嶋原耕一、小林友美、藤田恵

授業コマ数：週 3 コマ

履修者数：春学期 a クラス 11 名、b クラス 8 名

秋学期 a クラス 14 名、b クラス 15 名、c クラス 13 名

使用教材：独自教材

目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/（私は）～です/～人です/専門は～です/どうぞよろしく/～ さんは～ですか？/はい、いいえ/～さんは？/お仕事は？/お住まいは？/お

	国は？/N が好きです、好きじゃありません
場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが…
買い物	～ありますか/いくらですか/～円です/～ください
レストラン	～、お願いします/N で
許可を得る	N でいいですか/V てもいいですか
依頼する	V てください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/V ます・ました/何をしますか・何をしましたか/V たいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

春学期の J0-a クラスは、11 名が履修登録し、うち 10 名が学期の最後までクラスに参加した。J0 の目標となっているひらがな、カタカナの習得も学生の学習進度に合っていて、順調に進めることができ、サバイバルの日本語会話も教室外で使ってみようという意識が高かった。全体的に日本語学習の意欲が学期の最後まで継続し、学期最後のスピーチ活動では、全員が目標を十分に達成することができた。J0 では「Activity」として日本文化の体験の活動を行っているが、この日に合わせて欠席をする学生がいたことが非常に残念であった。また、今学期より授業時間が 100 分になったために、授業時間が残ってしまうことがあった。100 分授業の時間を有効に活用できるように、授業計画を改めていきたい。

(b クラス)

春学期の J0-b クラスは、8 名の履修登録者のうち、7 名が学期の最後までクラスに参加した。全体的に日本語学習の意欲が高く、授業態度も熱心であり、日本留學生活の中で運用している表現をクラスの中で報告してくれる場面もあった。また、文字学習が順調に進み、ローマ字表記から、ひらがな、カタカナ表記への移行がスムーズに行え、短文作成などのドリルにチャレンジする機会を設けることができた。一方で、学期が進むにつれ、クラス内に多少のレベル差が生まれてしまい、特に表現練習で一部の学生が消化できていない様子が見られた。さらに、全体的に静かな雰囲気の中で、学期の最後まであまり積極的な発言や質問が出てこなかった。レベル差への対応と、発話のしやすいクラス作りを今後の課題としたい。

＜秋学期＞

秋学期の J0 クラスは、2 クラス体制でスタートしたが、履修者が 40 名を超えたため、初めて 3 クラス体制となり、各クラス 13～15 名のサイズで授業を行った。

(a クラス)

秋学期の J0-a クラスは、14 名が履修した。全体的には、授業活動に参加し、積極的に質問が出た。文字学習もおおむね順調に進み、学期中に 3 回実施した「かなテスト」の結果も J0 の目標を達成していることが確認できた。しかし、学期途中から私語が多くなり、その私語が他の学生の迷惑となる場面が増えていき、個々の学習姿勢や学習態度に差が見られた。さらに、学期後半は欠席や遅刻が目立ったことは残念だった。J0 クラスでは、学習動機と授業参加度が学期途中から緩んでしまうことがある。今期の a クラスはその場面が多く、教師として課題が残った。今後は、日本語学習の場、そして大学の授業であることを履修者に自覚させ、学期の最後まで学習環境が整うように進めていきたい。

(b クラス)

秋学期の J0-b クラスは、15 名が履修した。積極的な発言をすることがあまりない静かなクラスであったが、言語と文化双方に関心の高い学生が多く、クラス運営は問題なく行えた。かな学習は順調に進み、文作成などでは早い段階からローマ字の使用が減り、かなを書く履修者が多かった。その結果、最終スピーチでは、字形の美しい原稿を作成することができた。一方で、学期の中盤から後半にかけて、出席率が低くなり、かな学習をはじめ、表現の学習に後れをとる履修者が目立ってきてしまった。また、J0 クラスでは、会話練習を多く取り入れるが、履修者の性格からか、活発に会話練習に取り組ませることが困難な場面が多々あった。履修者はそれぞれ好みの学習スタイルがあると思うが、複数名での会話練習にも積極的に参加するように、工夫して進めていきたい。

(c クラス)

秋学期の J0-c クラスは、13 名が履修登録し、うち 1 名が学期途中で履修を取りやめたため、12 名でクラスを進めた。履修者全員の反応がよく、それぞれの課題、アクティビティに丁寧に取り組んでいた。また、早い段階から協力的な雰囲気ができ、教師として非常にクラス運営がしやすいクラスであった。一部の日本語既習者や、理解の早い履修者が、パターンプラクティスやリピート練習をやや退屈に感じている場面が見られた。今後は、繰り返しの練習は重要であると伝えつつ、学生の理解度、進度に合わせて、難度が高い練習を取り入れるなど、柔軟に対応していきたい。

2019 年度 J1 授業記録

コース概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞富倉教子（文法 1）、小柳津成訓（文法 2）、布村猛（聴解会話）、
小林友美（読解・作文）、小林友美（総合スキル）
＜秋学期＞小林友美（文法 1）、小柳津成訓（文法 2）、東平福美（聴解会話）、
三浦綾乃（読解・作文）、神元愛美子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期 16 名、秋学期 11 名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的

な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って
400～600

字程度の作文を書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型

があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレッスン	• Exchanging greetings • Learning some survival expressions • Learning the writing system of Japanese language • Learning basic numbers • Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) • Learning basic words(Date、 Time expressions)

1	• Noun sentence ～は～です • Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど • Noun modification(kinking nouns) ～の • Particle “also、 too” ～も • Particle(question marker) ～か • Interrogatives なに・だれ・どこ • Pronominal “one” ～の • ”please give me ---“ ～をください • Counterword ① ～円、個、才、ひとつ • Sentence ending particles ～よ、ね
2	• Polite speech and casual speech • い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう
3	• Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 • Adverbs indicating ‘degree’ • Explaining reasons ので、から
4	• Verb groups、 dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating、 drinking
5	• Giving and receiving something ① • ～は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ～てください／～ないてください • の : Noun equivalent marker • V て、V て、V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない

	• Mimetic words ② Watching, seeing, speaking
6	• ～は Object に V sentence • Topic は V(Intransitive verbs) • Particle に(Time marker) • ～から～まで • Duration on time ～間 • Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい • Time expressions まえに、あとで、これから • ～と思う • ～だろう／だろうと思う • Mimetic words ③ Condition of the body
7	• Sentence of existence and locatives いる、ある • Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 • だけ／しか • N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both, neither) • N1 は A、N2 は B(Contrast は) • Noun と／や、Noun/adjective/verb て form、V-たり V-たり Adjective/verb し • ～かもしれない
8	• V-ている(Continuous action, state) • Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する • が used to describe a condition、 scene before one's eyes • ～中(during、 while、 through) • もう／まだ • ～ませんか、～ましょう • Questions word + か／も • ～んです ①
9	• Giving advice ～たほうがいい • Particle に(amount of frequency per time unit) • Adverbial usage of adjectives • Noun になる • Conditional ① : と • Chang of state、 condition(adjective + なる) • Mimetic words ④ Pain
10	• に(final destination)／を(point of departure) • V-たことがある(experience)

	• Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain • Third person's emotion/feeling/pain/desire • Conditional ②：たら • Even if ～ても
--	--

授業の方法

J1 は週 5 日のコースであり、文法 1、聴解会話、文法 2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法 2：文法 1 で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：当初より日本語習熟度に多少差はあったものの、学期が進むにつれ、その差が顕著になり、比較的人数も多かったせいか、二極化が目立ってしまっていた。語彙のレベルでつまづいてしまう学生も少なくない一方で、応用を効かした練習を無理なくこなしている学生も複数見受けられた。様々な背景、レベルの学生にどのように対応していくかが今後の課題である。

しかし、個々の学習者はそれぞれ参加意欲を見せ、授業内外（宿題やクイズなど）で学ぶ姿勢を見せてくれていた。全体的に皆まじめに取り組み、授業や活動に参加し、質問も積極的に行っていた。

文法 2：予習復習を授業外とする学生が少なく、全体的に学生の日本語のレベルが低めであった。授業内の学習と練習が日本語を学ぶチャンスとなっているからか、例年に比べ進行ペースはゆっくりであった。今学期より 10 分時間の余裕ができたため、授業開始時に宿題を提出、クイズを実施中に教員が提出をチェックしてその後もう一度学

生に宿題を見直させることで文法 1 の授業ではわからなかったところを意識させ、その後、理解が足りないと学生が感じたところを中心に書く技能を中心としたタスクなどで文法の定着を試みた。授業内のタスク練習ではどの学生もきちんと取り組んでいたため質問も多くあり、学生にとってよい学びの時間となっていたようだ。しかしながら、課も中盤にさしかかるところになるとまず語彙自体を覚えていない学生が多く目立つようになり、ターゲットになっている文法の練習の土台に到達することさえ困難な学生が目立ち、授業の進行が紛糾することも多くなり、課をカバーすることが難しくなっていた。また、受講者数が 15 人以上と多いクラスであるため、机間指導ではフォローも難しく、レベルが低めの学生にとってもレベルが高めの学生にとっても十分な支援ができなかったと教師が感じることも多々あった。宿題であるコンプリヘンションチェックも含め、木曜日では受講者数が一定の数を超えるとワークロードが重めのため学生を支援する時間を捻出することに困難を感じることもあった。今後、受講者数の増加を見据え、学生たちにどのようなことを授業外で準備させておくか、教師が授業内で最大限に学生を支援するための新たな工夫を凝らす必要性を感じる学期となった。

聴解会話：本クラスは、文法 1 で学習した文型を聴解・会話という活動を通して定着させることを目的として行った。序盤は、それぞれの文型が実際に使われる場面にどのようなものがあるか、そしてそこで学習した文型がどのように実現しているかを紹介しながら、聴解・会話活動を行うことに重きをおく、やや応用的な活動を中心に行った。しかし、導入される文法事項が多いことから基本的な事項がカバーしきれず遅れをとる学生が増えてきたので、中盤以降は応用的な活動を行うことよりも、基礎的な活動を行うことに重きをおいた。今回は基礎的な活動に重きをおくのが遅くなってしまったことで、遅れを取り戻すことができず最後まで理解が十分でないまま期末試験に臨むことになってしまった学生がいたことが大きな反省点である。初級の入り口の段階であるこのレベルでは今後、早い段階から学生のレベルを見ながら基礎を確認する活動を重視していくようにしたい。

読解作文：宿題の未提出の学生が数名いたものの、比較的出席率、宿題提出率はよかった。

作文は、クラスのほぼ全員がひらがなカタカナ講習を受講していたこともあり、短い文を書くのがやっとだったが、最後の授業、全員が 600 字以上、書けるようになった。既習文型や未習の語彙を調べて、自分の言いたいことを表現しようと努力して作文を書いてきた学生がいた半面、モデル文と似たような作文を提出する学生もいた。そのため、その都度、個別にフィードバックをしたり、意識づけをした。時間を調整し、作文をクラス全体で共有する機会を持つ活動等もできたらよかったと思う。読解は、理解が速い学生、分からない表現があると、なかなか読み進められない学生がおり、読む力に大きなレベル差があった。そのため、ペア活動などを取り入れるなどした。ペア活動は熱心に取り組み、活発にやりとりをしていた。しかしながら、宿題や

テストになると、本文をそのまま抜き出したり、質問に対応した形で答えられなかったりしていたため、答え方の正確性に関しては今後の課題となった。

総合スキル：授業で学習した項目を着実に習得する学生と、なかなか定着に至らない学生が混在しているクラスであった。それが、クイズやテストの結果に顕著に表れたように思う。ビジターセッションやスピーチ活動では、各自よく準備をし、学習した項目を使って、ディスカッション、発表をすることができ、有益な活動となった。授業では、下のレベルに考慮して学習項目の確認と基本的な練習に時間を割いた。繰り返し練習することでいい復習になったと思う。その反面、応用練習をする時間が短くなってしまったり、産出に時間がかかる学生が多く、1つの課題に予想以上に時間がかかったりすることもあった。そのため、実力のある学生にとっては、少々ストレスを感じる授業活動になることもあったように感じる。そこで、レベル差のある大人数のクラスでの授業運営の仕方が課題となった。今後は、理解の早い学生とそうではない学生への対応をバランスよく行っていけるよう工夫していきたい。

<秋学期>

文法1：明るく、クラス仲が良好なクラスだったため、授業の進行がしやすかった。学期前半は、出席率、課題の提出率がよく、授業にも熱心に取り組んでいた。ペア、グループワークの際は、指示された活動を終わると、自主的に発展した内容で活動を進めていたことも印象的だった。しかし、学期後半になると、モチベーションが下降気味になり、授業中、集中力が散漫になる学生が出てきた。また、後半の課になると、一度に導入される学習項目が増えたこともあり、既習項目が抜けたり、活用形、接続形の定着がなかなか進まなかったりした。そのため、授業で繰り返し強調するなどした。今後も、文法のポイント、正確性に注意が向くような指導方法を考えていきたい。

文法2：全体的に出席率もよく、宿題だけでなく授業中のタスクや練習にも積極的に取り組んでいる熱心な学生が多かった。また、この時間では週の前半で学んだ文法や言葉を復習する時間にもなっており、授業の流れとしては、学生から質問のある文法を全体で確認し、重要なポイントを共有してから教材を使って理解度を確認するために書く練習をおこなった。学生達にとっても良い復習の時間になっていたようである。一方で、冬休みを挟んだことが影響したのか学習意欲がやや低下したと思われる学生がいたためモチベーションへの支援を試みたが、あまり効果は高くなかったようであったため、このような状況である学生への支援の仕方についての工夫は今後の課題としたい。

聴解会話：J1では1回の授業で多くの文法を学ぶため、習った項目が定着しないままに聴解会話を行うことが多く、簡単に文法の復習をしてから会話を行い、最後に聴解の問題で既習事項の最終確認をするという流れで授業を進めた。明るいクラスで話したがる学生が多かったので、文法の復習と会話に時間を割いた結果、聴解を行う時間が減ってしまい、一度で聞き取る練習が減ってしまったことは反省点である。今後の課題

としては、文法の復習と聴解と会話のバランスをうまく工夫して授業を行いたい。

読解作文：読解は、学期前半は問題なく読めていたが、後半になるにつれて文章が長くなり読むスピードに個人差が出てきた。一文一文の文構造が理解できないと先に進めない学生や、ひらがな・カタカナの定着が弱い学生、分からない語彙があるとそこで止まってしまう学生などがいた。時間を区切ってその時間内で文章を読み切る練習や、語彙の意味を推測しながら読む練習を今後は考えたい。作文は、段落構成の確認とそれに使える表現の説明、作文の内容を練るところまでクラスで行い、実際に作文を書いてくるのは宿題になることが多かった。期末試験では、ほとんどの学生が段落構成がしっかりした作文を書けるようになった。毎回個別に時間をとってフィードバックすることができたのは良かったが、そのフィードバックを活かした作文のリライトの機会を設けられなかったのが残念である。また、学生によっては 400 字を書くのがやっとだったので、早い時期から文字数を意識させて作文を書く練習をする必要があったと感じた。

総合スキル：このクラスは日本語の運用能力の向上を目標とし、既習項目を使用したロールプレイを中心に、スピーチや日本人学生と実際に話す活動を実施した。また、その週に導入した文法が定着していない場合は適宜復習も行った。このクラスは雰囲気がよく、学生たちは熱心に活動に参加していた。特に日本人学生との交流と日本文化に関連したタスクは好評で、学生たちが自主的に自身のことや文化を紹介しようとチャレンジする姿が見られた。ただ、日本人学生との活動は比較的早い時期だったので、話すことが限られ、相手の言っていることを理解するのが大変そうだった。プレッシャーになって話せない学生もいたので、できればもう少し文型を導入した学期後半で実施してもいいかもしれない。

2019 年度 J1S 授業記録

コース概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞浅野有里、森井あずさ、金庭久美子

＜秋学期＞長谷川孝子、森井あずさ

授業コマ数：週 3 コマ（文法、聴解・会話、読解・作文）

受講者数：春学期 12 名、秋学期 11 名

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

J1S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

学習意欲の高い学生と、ついていくのがやっとの学生が混在しているクラスであった。期末試験の結果や最終評価を見てもそれが顕著であった。やる気のある学生はどんどん実力をつけていった。そのような学生は、遅れてもきちんと課題を提出していた。学生同士助け合う様子も見られ、クラス運営としてはやりやすかった。一方、途中であきらめてしまった学生がいた。また聴解はなかなか聞き取れず最後まで苦戦した者もいた。このような学生が出ないようにするために、J1S は J1 よりも進度が速く厳しいクラスであることをより周知していくことの必要性を感じた。J1 の内容を週 3 日で効率的に行うために、今後は内容を取捨選択し、進度を考えてみたい。

<秋学期>

語学学習に適応のある学生もそうでない学生もそれぞれのペースで日本語を楽しんでい

る様子が見られた。自宅でも宿題や復習などをきちんとやり、コツコツ努力していた学習者は、着実に日本語力を上げることができた。一方、覚えるべき語彙や文型が多いので、なかなか定着まで結びつかない学習者もいた。このような学生は、例年の J1S の学生に比べると、定着が悪かったようである。おそらくクラスの外で日本語を使う機会が少ないのだと思われる。そのため、あまり積極的に日本語を使おうとせず、欠席も見られた。今後の課題は、遅れがちな学生に、語彙や文型を覚えることの重要性を理解させ、自宅学習を促すことではないかと思われる。また、授業においても重要な語彙や文型をある程度絞って練習し、学習意欲に結び付けることも重要だと思われる。

2019 年度 J2 授業記録

コース概要

J2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。週 5 日、毎日スキル別（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法 1 で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：＜春学期＞富倉教子（文法 1）、小柳津成訓（文法 2）、森井あずさ（聴解会話）、
嶋原耕一（読解作文）、三浦綾乃（総合スキル）
＜秋学期＞浅野有里（文法 1）、小柳津成訓（文法 2）、森井あずさ（聴解会話）、
嶋原耕一（読解作文）、武田聡子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）

履修者数：春学期 15 名、秋学期 8 名

使用教材：独自教材

目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については 1000 を目標に増やす。

文法 1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法 2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせる基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解作文：文法 2 で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」 4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、Even though *Review のに、が／けど、ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	1. V-方 How to V 2. V ながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、possession、own ~がある 4. Obligation: Must / Have to ~なくてははいけない／なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ~ ~なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	1. When~: ~とき~ 2. Noun が要る・役に立つ

	3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・～の なかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	1. Try doing something and see: ～てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers 名詞修飾 4. Mimetic words ⑧ Nature
6	1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. V て ある 3. Intransitive V ている vs Transitive V である 4. Mimetic words⑨ : Sleeping 5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	1. V て おく 2. ～が V みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favors, some acts) ～てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: V てほしい・もらいたい・いただきたい 5. ～が・けど (けれども) 6. Imitative words : Caught a Cold ?
8	1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る 3. い-adjectives derived from verbs Vにくい／Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose 6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける
9	1. 伝聞 Hearsay, Conveying information getting from another person, media ～そうだ・ということだ・とのことだ 2. V てしまう 3. Review: V ている、V である、V てみる、V おく、V てしまう 4. [Question words] か / ～かどうか 5. V1 ないで V2 without doing V1、 do V2 6. Imitative words : Hitting、 Breaking 7. Compound Verbs ③ Vなおす・Vかえす
10	1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ 2. Decisions: ～ことにする・～ことになる

3.	Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている
4.	比喩の表現 Expressing Resemblance、 Figurative expressions ～ようだ・ みたいだ
5.	V-て いく・くる do V and come/go
6.	Imitative words : Animals、 Birds

授業の方法

読解作文（月）、文法 1（火）、聴解会話（水）、文法 2（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行われた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズ I」を行った。また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シート I」を宿題にした。

文法 2：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズ 2」を行った。また、新出文法の理解度を確認するために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。また、毎回、各課の代表的な文型を使った文章のディクテーションを実施した。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シート II」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカッションを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロールプレイ、スピーチ等を行った。また、毎回授業のはじめに、新出文法を理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：一貫してまとまったクラスで、誰かが質問をするとそれに対して別の学生が意見を言ったり、またそれに関連して反応したりと内容が展開していくようなとても積極的に学習意欲の高いクラスであった。質問も適宜出てくることが多く、同時にクラス

全体で再確認を行いながら授業を進めることができた。内容的には微妙なニュアンスや、また母語／自国の文化的背景の影響などもあってか、なかなか理解しにくいところもあったようで、初級前半とは違った難しさを感じていたようである。それらを導入の段階でどのように理解しやすく提供していくかが今後の課題である。

文法 2：文法 2 では文法 1 で学んだ文型などをもういちど復習することで学んだことをリマインドさせ、書く技能を中心としたタスク練習によりさらなる文法の理解を深め、さらに運用力へと導くことを目的としている。今学期から 10 分授業時間に余裕ができたため、先回にくらべて、学生から提出された文法理解シートを教師が添削するまえにもう一度学生たちが自分で振り返り、文法 1 で見落とした疑問点をふくめ、自分が現段階でなにを理解して、何がわからないのかをリフレクションする時間を数分作った。それにより、質問タイムでは学生から具体的にどこがわかって、どこがわからないのかを質問させ、それを学生全体で共有することができた。今学期の学生たちも非常に協力的であり、また熱心であったため、この振り返りの時間と質問タイムは学期最後までうまく作用していたように考える。それにより、学生たちがどこで躓いているのかがよくわかったため、全体でのタスク練習時間でもどこにウェイトをおくべきかが教師も把握しやすく、結果的に時間を有効につかって復習を促すことができた。しかしながら、受講者数が多かったため、全体練習での机間指導だけでは十分に学生をフォローできないこともあり、大人数でどのように学生たちの疑問にすべて答え、かつ適切なフィードバックをするべきなのかを教師が検討する必要もあると感じる学期であった。

聴解会話：前日に初めて導入された文法の復習を少ししてから、その課の新しい文法項目を使った会話をし、市販の聴解問題を解く、という活動を行った。レベル差もあったが、学生同士助け合いながら活動を続けていくうちに、全体のレベルも徐々に上がっていったように思う。また、今学期から授業時間が 10 分長くなったため、毎回ディクテーションも行えるようになった。最初はなかなか正しく書けなかったが、学期の最後のほうではかなり細かい表現も正しく聞き取れるようになった学生が多く、成長を実感した。これからも習った項目を使って日本人とコミュニケーションを取ってほしいと思う。

読解作文：春学期は理解度が高い学生が多く、その学生らがクラスを引っ張ってくれたことが印象的だった。読解も作文も、例年に比べて熟達しており、相互に学び合う姿勢が見られた。ただ 15 名という人数に加えて、そのようにできる学生が目立っていたからこそ、理解度が低い学生を見つけるのが遅くなったことが反省点である。ペアワークやグループワークでは理解できていると思われた学生の何名かが、中間・期末テストで予想以上に点数を落とすことがあり、もっと一人一人注意深く見る必要性を感じた。今後は読解及び作文の活動において、ペアワークとグループワークだけではなく、一人で読み進める時間もバランスよく取り入れていきたい。

総合スキル：このクラスは、勉強した文法項目や語彙の復習と定着を目的とし、会話練習やスピーチなどの総合的な活動を行った。スピーチは2回行った。人前で話すことを不安に思う学生もいたが、最終的に全員が立派なスピーチを見せてくれた。スピーチ後の質疑応答も質問が絶えず、学生が互いの日本語をよく聞いて理解できている様子がかがえた。また、今学期は学生ボランティアとのインタビュー形式の会話活動を2回行うことができた。日本人の話すスピードや語彙の難しさについていけず、ときどき英語の力を借りながらではあったが、日本語で質問したり、自分の国や自分の経験について積極的に話したりする姿が見られた。日本人と日本語で話すことは、学生にとっていい刺激になったようである。今学期のJ2はまじめで明るい学生が多く非常にいい雰囲気での授業が進んだ。ときどき文法の復習に重点を置きすぎてしまい、総合的な発展練習という意味ではやや物足りない点があったことを反省している。また、今学期はロールプレイの会話練習があまり多くできなかったのも今後は様々なバリエーションのロールプレイの会話練習を増やしていきたいと考えている。

＜秋学期＞

文法1：クラスの課題には熱心に取り組んでいたが、日本語に自信が持てないからか、授業内での反応は薄く、全体的に静かなクラスであった。毎週かなりの量の新しい文法項目や語彙が導入されるため、学生も学習のペースを掴むのに苦労していたが、後半は少し慣れてきて質問や発話もみられるようになった。テキストには英語の説明があるので、クラスでの導入は、なるべく明示的な説明を避け、場面や話者の意図が分かるような例文を提示して理解を図ったが、J2以前の語彙が定着しておらず、なかなか理解につながらなかったように思う。文法項目の理解も重要であるが、課ごとの新出語彙と合わせ、どのように新旧の語彙を定着させていくかも今後の課題であると思われる。

文法2：学期初めの頃は全体的におとなしい雰囲気のクラスであり、学習姿勢もやや受け身である様子であったが、次第に学生同士が打ち解け合い、学期半ばの頃にはお互いに助け合うとてもよい雰囲気に変容していった。そのためか、学習態度もより積極的になり、授業の練習や課題にも熱心に取り組むようになる学生が多かった。一方で、初級文法の基礎が定着していない学生もいたため、目標となる文法や文型をするまえに、J1レベルである基本的なフォームなどの確認を挟んだところ、日本語の弱い学生も練習に取り組みやすくなったようである。今学期は学生の日本語力の差が大きかったため、授業内のタスクや練習の到達速度に大きな違いがあったが、今回は人数も少なかったため、余裕のある学生には追加の自由度の高い練習を提示して、あとは個別に机間巡回で個別対応を行うことができたので、とくに大きな問題はなかった。

聴解会話：能力は高いのに日本語力に自信が持てず、結果的に消極的になりがちなクラスであったが、学習が進むにつれてだんだん自信が持てる場面も増えてきて、習った文型を使って日本語で積極的に話せるようになっていったように思う。なるべくいろいろ

なペアで話す練習をしたので、クラス全体が仲良く、いい雰囲気になっていったと思う。また、聴解問題の速さについていけない人も多く見られた当初から比べれば、学期後半ではかなり自然なスピードの日本語の聞き取りにも慣れてきたように思う。今後の課題としては、さらに文法を定着させ、自発的に会話ができるようになることである。今後も自然な会話ができるようになることを目指してクラスを作っていきたい。

読解作文：読解については、「語彙が分からなくとも推測しながら一度読み進めてみる」という習慣がなかなか身につかなかったことが、課題である。辞書を使わずに読む練習も多く実施したが、推測しながら読み進める不安感は、低くならなかったようである。色々な読み方を明示的に説明して、自分に合った読み方を探させるような試みをしてよかったかもしれない。また J2 以前の基本的な語彙が身につけていない学生も多く、教科書の読みに苦戦している様子も見られた。作文についても、語彙の少なさが目立つことが多かった。学習した文型を作文の中で使おうとする真面目な学生が多かったが、学生によっては、最後まで語彙の少なさが解消されなかった。文型にばかり目がいきがちになる中で、文を作る上で欠かせない語彙学習についても、促していけばよかったと思う。

総合スキル：このクラスでは、総合的な日本語コミュニケーション活動ができるようにした。その週に学んだ文型や表現はもちろん、それ以前に学んだことを応用し、未修の語彙は積極的に取り入れた。今学期は 2 回、日本人ボランティアの学生を招き、1 回目は、自己紹介や趣味の話など、初めて出会った者同士が意思疎通をはかるための会話活動を行い、日本人学生と日本語で話をし、通じる喜びと自信を付けてもらうことを目的とした。2 回目は留学生の国または町に関するスピーチ発表会を実施し、ボランティア学生にはそのスピーチを聞いて質問したり、コメントを言ってもらったりした。その後、グループに分かれてスピーチに関連する話題を広げて、ボランティア学生の住んでいる町の話などをしてもらい、さらに自由に会話を広げてもらった。またこの授業では、会話活動に限らず、読解を通して総合スキルが身に付けられるように、皆で楽しんで読める内容の読み物も用意した。その読解の中では、既習の文型が使われており、学んだ文法が意識付けられるように工夫した。今後の課題としては、より多くの語彙を覚えてもらい、日本語でさらにうまく自己表現ができるよう努力してもらいたい。

2019 年度 J2S 授業記録

コースの概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日で進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞開めぐみ、布村毅、金庭久美子

＜秋学期＞開めぐみ、布村毅、神元愛美子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、聴解会話、読解作文）

履修者数：春学期 14 名、秋学期 7 名

使用教材：独自教材（J2 と同じもの）

目標

接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1000 に増やすことを目指す。また、J2 で習う文法項目を理解すると同時に、実際のコミュニケーション場面を意識し、運用能力の向上をはかることも目指す。

授業の方法

語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使えるようにするための練習を行った。具体的には、文法テキストの各課を 2 回のクラスで学習するペースで進めた。まず、1 回目のクラスでは、パターンプラクティスを中心とした口頭練習を行い、2 回目には聴解練習、会話練習、短文作成などを行った。文法項目が多い課は 3 回に分け授業を行った。読解作文については、J2 と同様、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、適宜、授業では扱わなかったジャンルの読み物を宿題とした。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

＜春学期＞

全体的に静かなクラスであったが、どの学生も不明なところがあれば質問をし、毎回熱心に授業に取り組んだ。J2S は 1 日で導入する文法項目が多いため、文法項目の理解を優先し、各課で導入する語彙を可能な限り授業内で扱うように努めた。しかしながら、短文作成、会話練習、聴解練習に対し十分な時間をとることができず、定着が不十分な学生が見られた。練習不足を補うための方策として、ウォームアップで復習を兼ねて既習語彙・文法項目を含む「質問バンク」を使いペアで質問し合う練習（5 分）をしたり、聴解の指導時に聴解の内容に関連付けた会話を行う活動を行ったりした。その結果、自発的な会話が見られ、CD で聞いたネイティブライクなイントネーションを意識する様子も見られた。今後も授業内容をより充実させ、かつ効果的になるよう工夫していきたい。

＜秋学期＞

少人数で真面目で比較的静かなクラスだった。クラス活動はきちんと行い、個人作業は得意で黙々と取り組むのだが、レベル以上のことに挑戦する姿勢や自発的な質問・発言があま

り見られなかった。文法の時間内だけでは導入した文法の十分な練習ができなかったため、未消化のまま次の課に進むという悪循環に陥り、学習意欲の低下につながったのではないかと思う。結果として、最後まで英語の使用が目立った。その一方で、上達した学生もいた。学期始めに動詞の活用を知らなかった学生が学期を通して努力した結果、その頑張りが成績に反映された。また、聴解も練習を重ね、苦手意識を克服し力をつけた学生がいた。作文授業でも限られた語彙・文法を使いながらも、自分が本当に書きたいことを書こうとする姿勢を貫く学生がおり、結果的に内容的に面白いものが書けていた。今後の課題としては、文法定着のための練習に積極的に取り組んでもらえるよう工夫する必要がある。また、聴解練習の方法を検討する必要がある。今期は選択問題をしようした聴解練習が多く、聞いて書くといった応用練習はなかなかできなかった。期末テストの対策も兼ねて JLPT 形式の聴解(記述)をもう少し早い段階から練習すればよいと思われる。

2019 年度 J3 授業記録

コース概要

J3 は日本語の基礎を習得している者(1,00 語程度の語彙及び初級前半の文法等)、日常生活の基本的活動(買い物や依頼など)が日本語でできる者を対象とした初級後半のコースである。週 5 日授業が展開され、スキル別(文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル)に学習を行う。

担当者名：＜春学期＞小林友美（文法）、東平福美（聴解会話）、沢野美由紀（読解）、
山内薫（作文）、長谷川孝子（総合スキル）
＜秋学期＞小林友美（文法）、東平福美（聴解会話）、小林友美（読解）、
三浦綾乃（作文）、三浦綾乃（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）

受講者数：春学期 12 名、秋学期 12 名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

聴解会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようにする 3. V-ようとしたができなかった、V-ようにしてもできない 4. Fraction 三分の一、五分の一 5. Review : 条件 Conditional
5	1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ 2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture 3. ～の多く 4. ～以外、以内、以上、以下 5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて 6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに
6	1. 受身 Passive Verbs 2. Direct Passive Sentences 直接受身

	3. Indirect Passive Sentences 間接受身 4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence 5. Compound Particle ② ～によって 6. Sentence ending particles 終助詞
7	1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない 2. Imperative form Command、Prohibition 命令形、命令、禁止 3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む 4. Review : Expression for Cause、Reason 5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて
8	1. 使役 : Causative Sentences 2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる 3. ～のは～です (emphasizing)
9	1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらう／くれる／あげる 3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる 4. ～ことに one's feeling、emotion 5. Noun のこと VS Noun
10	1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる 2. Introduction to 敬語 (Honorific、humble expressions)

授業の方法

J3 は週 5 日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合スキルの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 : 文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話 : 聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解 : 様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文 : 文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した (希望制)。

総合スキル : 文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法：授業態度が良好で、熱心に取り組む学生が多かった。授業中、反応もよく、積極的に質問も出

るクラスであった。1 課に導入される文法項目が多かったため、ポイントを絞って練習をした。

はじめは予習をしてくる学生が少なかったが、授業が進むにつれ、少しずつ予習も徹底され、学

習のペースがつかめてきたようだった。しかしながら、学期後半になると、院生を含むが数名の

学生の欠席が目立ち、授業もモチベーションも下降気味になったように感じた。また、授業中の

反応はいいものの、勘違いや正確性の問題で、宿題やクイズで点数を落としてしまう学生がおり、なかなか改善されなかった。そのため、学習項目を導入、練習するだけでなく、学習方法についても授業で紹介したり、動機づけをする必要性を感じた。

聴解会話：学生は皆積極的に参加しており、学期を通して非常に活気あるクラスだった。良かった点

としては、聴解と会話のバランスを考えて一方に偏らないようにしたこと、また、学生が楽しく

勉強できるようにゲームを取り入れたり、生の教材をなるべく使いながら文法を教えたことが挙げ

られる。一方、改善点としては、毎回ディクテーションをおこなったが、聞き取った言葉を書

き起こすところはできても、それを英語に翻訳させると、授受動詞、受身や使役などの助動詞の間

違いが見られ、内容理解までに至っていないことがわかった。また、基本的なカタカナ表記の間違

いなども全体的に多く見られた。したがって、ディクテーションを行う際には、時間の関係で書

かせて終わりにになりがちだが、きちんと内容理解の確認まで行うように丁寧に行っていきたい。

読解：今回のクラスは素直で学習意欲がある学生たちが多かった。このうち約 3 分の 1 は、比較的ス

ムーズに文の内容を把握し、読むことができていたが、1) おおまかな内容把握はできるが、細か

い部分の理解が難しい、2) まとまった長さになると読むのに非常に時間がかかる、3)

まず文の

すべての語彙を一語一語確認してから読む、といった学生がいた。当初は時間を決めて読むよう

にしていたが、この方法では全員に対応できず、解決策として、扱う問題や質問を絞り、グルー

プで読み進めることにした。3～4 人のグループで読み、最後に全員で内容を確認するようにし

たことで、学生から活発に質問が出るようになり、ディスカッションをしながら読む作業が楽し

いという声も聞かれるようになった。主体的に読むということ、語彙や文の構造を確認し合うだ

けでなく、さまざまな読み方や物事の捉え方があるということを各々が気づくきっかけにもなったように思われる。グループのメンバーもできるだけ変更するようにした。今後は、読解についてどのような学習スタイルを持っているか、そもそも各学生が読解をどのように捉えているかということを考えながら進めることを課題としたい。

作文：クラス全体の雰囲気がよく、授業態度もよいクラスであった。その一方で、旅行などの理由で

欠席する学生が毎週おり、全員がそろうことが少なかった。作文の提出においては、旅行の学生

は期日前に、また遅延した学生の多くは次の週までに提出があった。また、多くの学生が、各週

で学習した文法や読解などを十分に活用し、作文に生かすことができていた。一方で、J3 のレ

ベルについていくことに困難を伴う学生も数名おり、新学期には作文がほぼひらがなという状態

であった。だが、少しずつではあるが、徐々に漢字を用いようとするなど、日本語学習に励んで

いる様子が見られた。作文の添削においては、すべての箇所修正案を記すのではなく、学生自

身で修正できる可能性の高い箇所は下線のみを引き、フィードバックの時間によく考えてもら

うようにした。また、各学生のコメント欄に、作文の書き方、あるいは文法・文型・語彙の誤用に

ついて、毎回 1～2 点のみ、注意点を記し、次回の作文に反映するように促した。その結果、各

学生において、作文の力に大きな向上が見られた。今後の課題としては、学生の学習・

生活スタ

イルを考慮し、どのようなフィードバックの方法が学生の作文力の向上につながるのかについ

て、考えていきたい。

総合スキル：今期はもともと会話力がある学習者が多かった。日本人学生との会話やスピーチなどに

も積極的に取り組み、楽しみながら日本語力を上げることができたと思う。授業では、会話で使

われる表現や日本特有の会話の流れなどを繰り返し練習することで、日本語での会話が上達して

いく様子が見られた。一週間の目標である文型や語彙が非常に多く、学習者が学習内容を消化し

きれていない様子も見られたが、何度も繰り返した内容は定着していった。今後も、日本語を実

際に使うことを目標に、様々な練習を取り入れていきたい。

<秋学期>

文法：出席率、宿題の提出率も高く、授業態度が良好で終始真面目に授業活動に取り組んでいた。本

科目は、毎回導入する学習項目が多いため、毎学期、苦勞する学生が多いのであるが、モチベー

ションも落とすことなく、熱心に取り組み、着実に力を付けている様子が窺えた。しかしなが

ら、途中、クラスについていくのが難しいように思われた学生もいた。そのため、学習項目を導

入、練習するだけでなく、学習方法についても授業で紹介したり、動機づけをするよう心掛け

た。今後も、学生のレベルに合わせた学習方法の提案や指導法について検討していきたい。

聴解会話：比較的大人しいクラスであったが、毎回皆大変真面目に授業に参加していたので授業をス

ムーズに進めることができた。聴解では一度聞いて答える練習を繰り返し、その都度答え合わせ

をするようにした結果、時間を有意義に使って教えることができた。また、学生の理解を促すた

めにスクリプトを効果的に使用したり、ディクテーションをしたり、一語一句丁寧に聞く練習も

並行して行った。会話では学生をペアやグループにして課題を与えると、皆既習の語彙や文法を用いて自由に発話していた。全体的に聴解に重きを置いてしまい、あまり会話に時間を割けなかった。今後の課題としてはもう少し会話を行えるようにしたい。

読解：非常に熱心に取り組む学生が多く、学期始めから最後まで、真面目に取り組んでいた。

大人しめの学生が多く、授業内の積極性に欠けたのは残念であった。また、理解が速い学生と分からない表現があると、なかなか読み進められない学生がおり、読解力にレベル差があった。そのため、グループディスカッションに時間を割いたり、ピアリーディングを取り入れたりした。協調性があるクラスだったこともあり、学期後半は、和やかな雰囲気の中で、協力して活動が展開されたように感じる。しかしながら、宿題やテストになると、本文をそのまま抜き出したり、設問の意図が分からず、逆に難しく考えてしまう学生もおり、宿題やクイズで点数を落としてしまう学生もいた。今後は、設問の意図を理解させ、深く読み進める力を育成できるよう指導法を検討していきたい。

作文：クラスでは作文のテーマについての話し合いや構成を練るのに時間をかけた。テキストのモデ

ル作文を読んで、構成とそこで使われている接続詞や表現に注目させた。その結果、学期末には

J3 で勉強した文型を使って 800～1000 字程度で、段落構成がわかりやすく、内容もしっかりし

た作文が書けるようになった。しかし、1200 字まで書ける学生はなかなかいなかった。

特に制限時間のあるテストでは、時間内に必要な文字数を書くことは大変難しいようであった。そのため、クラス内で時間を決めて与えられたテーマについて作文を書く練習を何回か行えば良かったと反省している。また、宿題の作文を提出する日に前回の作文の返却とフィードバックを行って

いたため、フィードバックの内容がすぐに学生の作文に反映できなかった。なので、今後はフィードバックをクラスの初めに行い、それをもとにその日提出する作文に修正を加えてから提出させようと思う。また、今学期は書いてきた作文のピアリーディングとリライトの活動が一度しかできなかった。今後そういった活動も増やしていきたい。

総合スキル：このクラスは、日本語の運用能力の向上を目標とし、既習項目を使用したロールプレイやスピーチ、日本人学生とのビジターセッションを取り入れた。特にビジターセッションでは会話活動に加えて、自分の文化をクイズ形式で紹介する活動をしたが、日本語で自分の文化について話せたことが自信や日本語学習のモチベーションの向上に繋がったと思われる。しかしその反面、ロールプレイや会話活動では文法や語彙の不正確な部分が目立った。頭では理解しているも、いざ話すと上手く動詞を活用・接続できなかったり、時制やスタイルが滅茶苦茶になってしまった。また、口が重く回らない学生が多かった。ロールプレイの練習時間を十分に取れなかったことも反省点としてあげられるが、それ以外に、今後は短い会話のシャドーイングなども取り入れて、新しい文型や表現の定着や自動化を目指すような活動を考えたい。

2019 年度 J3S 授業記録

コース概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞浅野有里、三浦綾乃

＜秋学期＞神元愛美子、藤田恵、長谷川孝子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、運用練習、読解・作文）

受講者数：春学期 11 名、秋学期 15 名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

J3S は週 3 日のコースであり、J3 で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J3S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、4 コマで 1 課の場合は (9 課以降)、文法の時間を 2 コマに増やした。

1. 文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを中心とした練習を行った。
2. 運用練習：文法で扱った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。
3. 読解・作文：読解では、様々な長さやジャンルの文章を読み、内容理解のほか、自分の意見を述べ合う練習を行った。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200 字程度の作文を書く練習を行った。また、2 課に 1 度のペースで漢字クイズを実施した (希望制)。

結果と課題

<春学期>

春学期の J3S クラスは、研究者 1 名を含む 11 名が履修し、うち 10 名が学期の最後までクラスに参加した。参加した学生は、授業内容や課題に熱心に取り組んでおり、クラスメートとの教え合いの場面も多くみられた。個々の日本語能力の伸びが見られた一方で、J3S 以前の表現の誤用が最後まで修正されず、特に読解と聴解の活動で苦勞することが多かった。読解は、読むスピードと正確な内容理解の向上が見られず、授業内でも語彙の手当て、ピアリーディング、文章の構成の把握などいろいろなアプローチを試みたが、期待したほどの効果が見られなかった。同様に作文例の読解が上手いかわず、構成が整っていないものを書くことがあった。聴解では、各課のターゲットとなっている文法表現の練習ができるような教材を使用した。が、まとまった内容を聞いて、解答するタイプの問題の練習が少なかったため、期末テストでよい結果が得られなかったようである。今後は、週 3 回の S クラスにおける読解と聴解の指導方法について、担当者間で課題を共有しながら、改善していきたい。

<秋学期>

秋学期の J3S クラスは、15 名が履修登録をし、うち 1 名が学期途中で履修を取りやめたため、14 名でクラスを進めた。学期の初めから、クラスに協力的な雰囲気ができており、履修者の学習意欲も高かった。一部の履修者にとって、J3S の学習項目は既習であるように感じられる場面もあったが、運用できるレベルには達していなかったため、復習をしながら、ややチャレンジングな活動も取り入れ、誤りなく産出ができるように、練習をしていった。J3S の学習項目で毎学期履修者が苦戦する、受身、使役、使役受身、授受表現の表現も既習の履修者がいたが、そのような履修者も正確さに欠けていた。繰り返し練習を行い、整理をしていった結果、学期の最後には、会話や作文の中で使えるようになった。期末テストの結果から、どの履修者も J3S の学習項目を理解し、学習目標が達成できていることが確認できた。今学期は、履修者の学習スタイルと授業活動が合致し、非常にいい結果が得られた。今学期の結果を生かし、今後も履修者が順調に次のレベルに進めるように、授業を進めていきたい。

2019 年度 J4 授業記録

コースの概要

J4 は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の 4 クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせ使用できるようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

<J4 文法・文型>

担当者名：<春学期> 金庭久美子 <秋学期> 浅野有里

授業コマ数：週 1 コマ
受講者数：春学期 9 名、秋学期 10 名
使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

表 J4 文法で扱った文法項目

課	Part1	Part2
1	・ 受身 ・ 自発	・ ～は～つつある ・ ～は～（で／に）さえ～ ・ Vさえすれば／Aさえあ（い）れば／Nさえ～ば～ ・ ～とすれば、～（こと）になる ・ （たとえ／仮に／もし）～としても～
2	・ 使役 ・ 使役受身	・ ～にもまして～ ・ （たとえ／仮に）～にしても～ ・ いくら～にしても～
3	・ 尊敬語	・ （Vた／A／Nの）まま、～ ・ Vつつ～ ・ ～はVなり～
4	・ 謙譲語	・ Vことにしている／Vことになっている ・ ～は～ことから～ ・ ～は～こととなると～ ・ ～は～ことなく～
5	・ ～ようにV ・ ～ようにする ・ ～ようになっている	・ ～して、（考えさ／思い知ら）せられた ・ （無生物主語）が～を～させる ・ ～は～だけではなく、～の問題だ
6	・ Vたばかり／Vばかり／Vてばかりいる ・ Nばかり／Aばかり ・ Number ばかり	・ ～からといって、～が必ずしも～わけではない ・ ～ずに～ ・ ～のか（どうか）については～
7	・ ～が限られている／～を～に限っている ・ 限りがある／ない ・ V（ない）限り／Nの限り ・ V（た）限りでは／Nの限りで	・ ～原因は～ことにある／～のは～からだ ・ ～と～では～が異なるので～ ・ ～や～は～のだから、たとえ～ても～ことはない ・ ～や～は～のだから、もし～たら～

	は	
	・ Nに限って（はずがない） ・ Nに限り ・ V（ない）／Nに限る ・ Nに限らず	・ ～は～ので、～ても、どうしても～てしまう ・ ～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ・ （無生物主語）が～に～を生じさせる ・ ～たり～たりするだけでは～ ・ ～は～が～であることを利用して～
8	・ Vよう（か） ・ Vようと思う／Vようとする ・ Vようがない ・ Vようとしている ・ Vようとしない	・ ～時に、～と／ても～ ・ 私は～て、～ことに気が付いた ・ ～（こと）は～（のだ）から、もし～なら～
9	・ N（clause）というN ・ NというN／Number というNumber	・ ～すると、～は～が～は～ ・ ～する時に重要なことは、～か（どうか）ということ （よりは／ことではなく）、～か（どうか）という （点／こと）である ・ ～ものとして（しまう）

授業の方法

<春学期>

授業は1回に1課のペースで進行した。Part Iとして学期の前半は、学生たちが苦手とする「受身」「使役」「使役受身」「敬語」を中心に、複合文型を用いて復習を行った。学期の後半は「ように」「ばかり」「かぎり（かぎる）」「意向形を使った表現」「というN」などの中級文型の練習を行った。さらに、意欲のある学生のためにPart IIとして、中級向けの表現を用意した。

授業では、ターゲットとなる文型・文法項目を説明後、テキストの練習以外に、文を完成させる練習プリントを用意し、文型・文法項目が理解でき運用できるか確認した。また、各課のComprehension checkと学習した文型・文法を用いた短文作成を毎回宿題にした。

<秋学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業ではパワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明を行った。導入する文型は、イラストや写真を使って、場面や話者の意図が理解しやすくなるよう心掛けた。また、テキストの例文に出てくるその他の文型・文法、新旧の語彙もできるだけ確認、説明を行い、ゆっくり丁寧に進めるようにした。授業内では、選択問題や前件・後件の文作成で練習し、全文を作る文作成は宿題とした。

結果と課題

<春学期>

全体的に出席率・宿題の提出率がよく授業中も真面目に取り組んではいた。前半に学習し

た「使役」「受身」「使役受身」では、主語・述語の関係を見ながら重点的に練習をした結果、文脈の中での理解ができるようになったと思う。後半の「ように」「ばかり」「かぎり（かぎる）」「意向形を使った表現」「という N」では、類似の文型があり、用法を確認しつつ進めたが、宿題を見ると、違いが理解できていないことがわかり、次の授業でフィードバックを行うこともあった。Part II の追加教材を用意していたが十分な時間がとれなかった。学習者のレベルによるものだと思われるが、Part I の理解を優先させた方がいいと考えている。文法クラスは、今回はペアワークが苦手な学生がいて、教師主導型になってしまったが、もう少し学生主導型になる工夫をしていきたい。

<秋学期>

熱心な学生が多く、授業中、いつも学生から質問や確認が出てくる積極的なクラスであった。前半の初級文法の復習では、導入では理解できるものの、複文や新出語彙が出てくると理解が難しくなってしまうため、常に基本に戻り丁寧に解説するようにした。その結果、何人かの学生は、自分で文を理解する手順を獲得していたように思う。後半の中級文法でも、ゆっくり丁寧に進めることを心掛けていたが、やむを得ない事情で欠席してしまった学生がおり、それが期末テストの結果にも表れてしまっていた。今後は開講時だけでなく、学期を通して出席の重要性を学生に伝えていくようにしたい。

<J4 読解>

担当者名：<春学期> 山内薫、<秋学期> 高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 8 名、秋学期 12 名

使用教材：独自教材

目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

<春学期>

プレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を、毎週 1 課のペースで授業を進めた。L9 と L11 を除く課では、毎週、次週の読解の予習（語彙調べと設問）を課し、教室では、グループワーク（3 名程度）での読解の確認、全体で筆者の意図や要点、詳細な箇所の理解を確認した。また、L9 から L11 は速読を行い、授業中に配布し、初見での読解を行った。その際、前週に読解内容の語彙調べを宿題とした。速読では、まず、各学生で語彙や内容を文脈の中で推測しながら読解をした後で、グループで既知の語彙を

共有した。その上で、全体での確認を行った。

授業開始時には、前週の読解で扱った語彙のクイズを行い、授業の終わりには、語彙クイズに関わる語彙が盛り込まれた文章をペアになって読み合うというクロスリーディングを行った。さらに宿題として、毎週、読解の教材で学習した語彙から、自分が特に覚えたいと思う語彙を5つ選択し、短文を作成させた。

<秋学期>

以下の流れで授業を進めた。まず授業開始時に前回の読解で用いた語彙についてクイズを実施し、重要な単語の確認をした。そのあとに、まず前活動として各課の読解文に関連するディスカッション・トピックを提示し、クラスメイト同士で話し合ってもらった。そして、読解文内における重要語句を確認していった。次に、本作業として本文を読み、答えをペアで共有後、全体で内容を確認するという流れで行った。授業の最後には、当該課に登場した重要語句を確認するため、ペアで穴埋めするクロスリーディングを行った。

結果と課題

<春学期>

特外の学生5名、学部生3名（学期途中で1名休学）のクラスであった。学部生のうち2名はJLPTのN1保有者で、他の学生のレベルとは合わなかった。しかし、クラスの雰囲気は大変良く、グループワークでは協働的に進めることができていた。新学期には語彙的に厳しい状態であった特外の学生も、徐々に語彙力も読解力も伸びていく様子が窺えた。予習においても、学んだ語彙の短文作成の宿題においても、ほとんどの全員がしっかりと、また意欲的に取り組んでできていた。学生の中で1名、他の学生とのグループワークへの参加を望まない学生がおり、グループワークの際は、個別に対応した。当該学生は、当初より、コーディネーターの先生から他のクラスでの状況を伺っており、学期にわたり、注意して様子を見ていたが、全体での活動時には授業態度はよく、熱心に聞いている様子であり、また宿題の提出も遅延することなくあったため、大きな問題とはならなかった。

昨年度は、クロスリーディングにおいて、漢字に振り仮名がなかったことが、特外の学生にとって難易度を上げる要因となり、コーディネーターの先生と振り仮名を振るという対応を行ったが、今年度の学生においては、逆に、全部には振り仮名を入れず、いくつかの漢字のみに限定されていたほうが勉強になるという意見が出てきた。今後は、学生の語彙力や漢字の能力、また学習意欲などに応じて変えるなど、適宜対応するようにしていきたい。

<秋学期>

授業当初は、スマートフォンの辞書アプリを手放さずにはいられない学生が多々いた。授業の中盤ごろからは、語彙が広がったり、文脈から推測できたりするようになっており、読解ストラテジーを身につける様子が窺われた。また、授業前後の活動でも活発にクラスメートと意見交換していたのも、非常によかった。

一方で、毎回のクイズでは、語句の復習をしている学生と、していない学生で差が出ていた。読解では、文法や語彙力などの総合的なスキルが必要となるため、意識化してもらうような工夫を今後はしていきたい。

＜J4 作文＞

担当者名： ＜春学期＞浅野有里 ＜秋学期＞武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 11 名、秋学期 11 名

使用教材：独自教材

目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけではなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400 字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

＜春学期＞

授業はテキストに沿って、1 コマ 1 課のペースで進めた。授業前半は例文を用いて 2～3 の新出文型を導入、テキストの例文確認、文作成を行い、後半は構成に注目して例文を読んだ後、課題に沿ったパラグラフ作成を行った。少人数クラスであったため、授業では下書きを書いた後、個別のフィードバックを行い、翌週に清書を提出してもらった。また、授業の冒頭では前週に導入した文型で短文作成をするクイズを行った。

＜秋学期＞

毎週オリジナル教材に沿って 1 課ずつ授業を進めた。テキストとは別に用意されたワークシートを使用し、補助教材として PPT を使いながら、ターゲットとなる文法・文型の例を音読し、意味を理解した後、例文を各自で考えてもらい発表しながらクラス全体で授業を進めていった。指定の文型練習が終わった後で、各課の作文のテーマに沿って文章を書き、終わらなかった人は宿題として仕上げ翌週の授業で提出した。添削を行った後、書き直しの必要がある人には再度書き直しを提出させた。

表 J4 作文の授業内容

pre-Lesson	初級文型確認の短文完成問題。
Lesson 1 定義	①留学 <u>とは</u> 、一定期間外国へ行き、その国の学校などで学ぶ <u>ことだ</u> 。 ②私が会社を辞めた <u>ことで</u> 、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は人 <u>を</u> 人間的に成長 <u>させる</u> 。
Lesson 2	①最近、日本の大学生を見ていて <u>気づいたことがある</u> 。

意見①	②日本の経済が悪くなったのは、日本の政治家が無能だからだ。 ③両親の「成績が一番」という考え方が、子供を非行に走らせたのだろう。
Lesson 3 分類	①私は、医者という職業を目指している人は、その目的の点から2つのグループに分類されると思う。 ②この薬には麻薬のような成分が含まれているため、服用すると眠くなる。 ③留学という貴重な経験を<u>その後の人生に役立てたい</u>と思う。
Lesson 4 比較・対照 ①	①日本とタイとはどちらも米を食べる国だが、日本とタイとは、その食べ方や食べている種類が大変に異なっている。 ②日本とタイはどちらも米を食べる国だ。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類において対照的である。 ③東京の生活は便利だがストレスが多い。一方、地方の生活は東京ほど便利ではないが、ストレスは少ない。
Lesson 5 根拠・判断 ①	①日本人は、間違った平等主義の方向に進もうとしている。 ②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった経済的な問題に取り組んでいる。 ③自分の能力や適性がいかせるなら、転職してもいいと思う。
Lesson 6 定義②	①運動をせずに、食べてばかりいると、太りますよ。 ②もしあなたが、自分さえよければいいと考えているとするなら、それはとてもいけないことだ。 ③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かうことこそ、弁護士の役割である。
Lesson 7 比較・対照 ②	①速さという点では、飛行機は船とは比べものにならない。 ②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。 ③現代人の生活にとって、クレジットカードは必要不可欠なものである。
Lesson 8 意見②	①その会社は給料がいい。しかも、残業がほとんどない。そのため、その会社で働きたい若者は多い。 ②私は、親が子どもをしつけるのは当然だと思う。 ③両親や先生とよく相談した上で、日本への留学を決めた。
Lesson 9 換言・例示	「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」
Lesson 10 根拠・判断 ②	①私は、安定した給料よりも、むしろ自由な時間が多いほうがいい。 ②いつもは節約のために自炊しているが、時には外でおいしいものを食べることもある。 ③一度約束した以上、守らなければならない。

Lesson 11 ことわざの 説明	①そのニュースは、韓国をはじめ、アメリカやヨーロッパ諸国など、世界中に伝えられた。 ②お金がなくても、あなたさえいれば、私は幸せだ。 ③日本のことわざ
--------------------------	---

結果と課題

<春学期>

毎週ほぼ無遅刻無欠席で、課題の提出もきちんと守られていた。語彙、漢字を苦手とする学生が多かったため、テキストの短文、パラグラフの例文を読みこなすのに苦労はしたが、語彙レベルはテキストよりやや低くなるものの、学生それぞれのアイディアが盛り込まれた作文が書けていたと思う。また、このクラスには他の学生と交わることを非常に苦手とする学生が在籍しており、最後まで教員、クラスメイトとよい関係を築くことができなかった。個別指導を中心に進めたため、授業の進行に大きな影響はなかったが、作文の発表や書く前のディスカッションなど、学生同士の相互作用を導くような活動が十分に取り入れられなかったことが反省点である。

<秋学期>

授業中、学生は活発かつ積極的に例文や答えを発言し、あっというまに 100 分が終わる授業展開になった。その場で理解できないことはとことん質問して、それぞれが納得するまで質問や意見が出た。授業の最初に実施したクイズの成果には差が出たが、回数を重ねるごとにそれぞれが復習を十分にすることで点数が伸びていくのを実感したようだ。点数が思わしくなかった学生が次のクイズではよい点をとることができていた。宿題として提出する作文は、きちんと取り組まれており、宿題を提出しない学生はほぼいなかった。遅れても全ての宿題が提出された。添削した結果、修正・訂正があまりに多い場合には書き直しさせ再提出を促した。最後のテストでは、それぞれの成長がみられる結果となった。反省点としては、前に学習した文型の復習や、自分の書いた作文を見直して自分で間違いを見つけ、修正する力をもっとつける時間があればよかったとかもしれない。今後は、学習者の気づきを促す作文指導を行うように心掛けたい。

<J4 聴解・会話>

担当者名： <春学期>高嶋幸太 <秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 7 名 秋学期 14 名

使用教材：『新・毎日の聞き取り 50 日（上）（下）』凡人社、『ロールプレイで学ぶ 中級から上級への日本語会話』アルク

目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

本授業の基本的な流れは①スピーチ・発表、②会話、③聴解であった。①スピーチ・発表では、トピックに沿った内容を学生自身が決め、3回のスピーチ・発表を実施した。②会話では、場面状況を確認し、くじ引きでペアを決め、ロールプレイで会話練習をしてから、最後にクラス全体にフィードバックを提供した。③聴解では、扱うトピックについて導入してから、CD を聞き、問題に答えて内容を確認していくという流れであった。また、オンライン上の音声データを聞き、穴埋めをし、次の週に持ってくる宿題も原則として毎週行った。

<秋学期>

基本的に授業の最初に聞き取りのクイズを行い、その後、①スピーチ・発表（約 30 分）、②会話（40 分）、③聴解（30 分）という流れで進めていった。スピーチ・発表では、「最近の出来事」「インタビュー調査」「旅行の思い出」というトピックを扱った。会話では、場面別のロールプレイを実施した。聴解は、テキストをもとに各トピックを取り扱った。履修者も多いため、進度に遅れが出る可能性があるかと思われたが、シラバス通りに進められた。

結果と課題

<春学期>

クラスの雰囲気は和やかで、まじめに練習に取り組んでいた。時折欠席する学生も見られたが、ほぼ宿題も持ってきており、学習意欲は高かったように思われる。

スピーチでは、自身の発表日に合わせ、よく用意・準備したうえで発表できていた。ただし、学生の中にはあまり積極的に話そうとしない者もあり、学生の産出意欲を引き出すためのクラスマネージメントが課題になってくると感じられた。

<秋学期>

項目別に順に述べていく。①スピーチ・発表では、原稿から目を離さない学生がいたのだが、後半になるにつれ、アイコンタクトやジェスチャーなどにも意識が向けられていた。②会話では、文体の使い分け（敬体・常体）が不安定であったが、友達との場面などを多く練習するにしたがって、使い分けができるようになっていった。最後の③聴解では、問題を聞く回数が週を追うごとに減っており、理解するスピードも速まっていた。

課題としては、項目の時間配分である。スピーチ・発表などで時間が押したときは、ロールプレイのあとに、時間が足りずに簡単なフィードバックで終わってしまう週もあった。必要なフィードバックや丁寧なコメントを提供できるよう、今後はそれらの時間確保に留意

し進めていきたい。

2019 年度 「J5～J7 文法・文型」授業記録

概要

J5～J7 の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週 1 回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2 レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2、N1 レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7 のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験 N1 レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名：<春学期>a クラス：小森由里、b クラス：小林友美
<秋学期>クラス：長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 12 名、b クラス 11 名 秋学期 24 名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions

3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが（に）、やはり（やっぱり）、どうせ、つくづく	
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方	

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

授業は1回に1課のペースで進めた。各課で多数の文法項目・文型を扱うため、教科書以外に、形式・意味・運用上の注意点をまとめたハンドアウトを配布し、文型の意味や用法を説明した。さらに、教科書の例文を通して文型の運用方法を理解させた。毎回、復習として学習した文型を用いた短文を作成すること、予習として次の課の練習問題をすることを宿題にした。短文作成の宿題は個別にフィードバックし、間違いの多かった文型については、クラス全体で説明を補足してその用法を再確認させた。また、練習問題の宿題は、ペアで答えをチェックさせた後で、クラスで答え合わせをした。

(b クラス)

授業は1回に1課のペースで進め、毎回、翌週授業で扱う課を読むことを予習とした。教科書の例文で、文型の意味、接続、用法などについて、Q&Aをしながら、確認した。その後、教科書の問題以外に、教師作成の前件後件作りや簡単な文作成問題を実施した。適宜ペア、グループ活動も取り入れた。毎回の宿題では、その日に学習した文法、語彙を使用した短文作成を課した。

<秋学期>

毎回、翌週授業で扱う課を読んで、Comprehension check をやってくることを課題とした。授業は1回に1課のペースで進めた。まず文型の意味、使用場面、接続の形、注意点などを説明し、必要に応じて類似文型・表現との違いを説明した後、テキストの例文を読んで、意味を確認した。例文は、テキストの他に、そのときに話題になっているできごとや学生

の関心のあることなども使って提示した。その後、学習した文型を使って、簡単な文作成や文完成問題をした。毎回、学習した課の文型を使った短文作成や文完成問題を 10 程度宿題にし、翌週、全体と個別にフィードバックをした。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

12 名が履修登録をしていたが、一度も出席することのない学生が 1 名いたため、実際には 11 名のクラスで授業を行った。学生たちは非常に真面目で熱心であったため、文法のクラスといっても教師側からの説明だけではなく、学生からの質問も頻繁にあり、学生の理解度を確認しながらクラスを運営することができた。また、学生が指示にそって予習を行っていたため、スケジュール通りにクラスを進めることができた。ペアの活動を取り入れ練習問題をペアでチェックさせることで、学生同士がわからない点を教えあったり理解できない点を共有したりし、学生の主体的なやり取りを活性化できたと考えられる。中間テストの得点にはバラつきが見られたが、期末テストは総じて高得点だったことから、学生がそれぞれに努力したことが窺える。しかし、文法項目が理解できても運用できるまでになったかは疑問である。今後も、学習項目が確実に身につく実際の運用につながるよう指導方法を工夫していきたい。

(b クラス)

クラス仲が良好であり、協調性のあるクラスであった。ペアワークは活発で、学生同士助け合う様

子も見られた。また、出席率、課題の提出もよく、授業にも熱心に取り組んでいた。宿題の文作もよく考えられたものが多く、個性溢れる文を作ることができた。文型を使って、言いたいことを表現する力が身についたと思われる。その反面、用法を取り違えて、誤った文を作ってくる学生もいた。誤用が多かった文法については、クラス全体で取り扱ったり、添削やコメントをつけてフィードバックをしたものの、時間の関係で、定着を確認する機会が取れなかったことが悔やまれる。時間に余裕があれば、文を再度作成させ、理解を確認する活動を取り入れるなど工夫をしていきたい。

<秋学期>

まじめに授業に取り組んでいた。体調不良等で欠席した学生はいたものの、出席状況も宿題の提出状況も良好だった。明るく活発なクラスで、グループワークも円滑に進めていた。質問も多かった。何名かの学生はコースの最後まで予習をきちんとしており、宿題でもよく考えて文を作成していることが窺えた。今学期は、期末テストの結果を見ると、助詞相当語、形式名詞、副詞に関する問題に間違いが多く見られた。今後はこれらを正しく理解し使えるよう、授業を工夫したい。

＜J6 文法・文型＞

担当者名：＜春学期＞小林友美

＜秋学期＞長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 32 名 秋学期 23 名

使用教材：独自教材

目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型の理解を目的とする。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由の表現」 ために、ばかりに、からといって／だからといって、あまり 「目的の表現」 V んがため (に)、V-Volitional と
2	「感情・心情・評価の文型」 ～てしようがない／～てしかたがない／～てならない、～てたまらない、～限りだ、～と いったらない (～ったらない)、～ずにはいられない／～ないではいられない、～ずには おかない／～ないではおかない、～てやまない、～極まる／～極まりない／～の極みだ、 ～の至りだ 「評価の文型」 ～だけに、～だけあって、～にしては／それにしては、～のわりに (は) ／～わりに (は) ／そのわりに (は)
3	「不快を表す文型」 ～だらけ、～まみれ、～がましい、～たらしい (～ったらしい)、～にもほどがある、～ にたえない 「非難・軽蔑を表す文型」 ～ぶる、～じみた、～っぽい、～くせに (くせして)、～なんか／～なんて、～ごとき、 ～ときたら、～にひきかえ／それにひきかえ、じゃあるまいし (ではあるまいし)、Noun +に (として) あるまじき+Noun
4	「判断を表す文型」 ～までもない／までのこともない、～には及ばない、～にはあたらない、～ほどのこと (もの) ではない、～かねる、～っこない、～にすぎない、～ないことはない、～までだ ／までのことだ、～如何だ／～如何で・によって V、～次第だ／～次第で V、

	「理性的評価を表す文型」 ～に足る／値する、～に恥じない
5	「推察・推量を表す文型」 ～にほかならない／～にほかならぬ+Noun (人)、～にかたくない、～がたい、～かねない、～恐れがある、～ないとも限らない、～まい、～と見える、～げ
6	「人や物の状態・性質を表す文型」 ～のきらいがある、～がちだ、～気味だ、～つつある、～たてだ、～かけだ、～っぱなし、～まま、A かわら B、A がてら B、A かがた B、A ついでに B
7	「人や物の状態・性質を表す文型 2」 ～向きな、～向けな、～ごろ、～盛り、～めく、～つく、～たつ、～放題、～なり、～さ、～み
8	「義務・当然を表す文型」 ～べきだ、～べきだった／～べきではなかった、～べく～、～べくして～、～てしかるべきだ、～（ない）わけにはいかない、～しかない、～（より）ほか（は）ない／～（より）ほか～ない、～ざるをえない、～ないではすまない／～ずにはすまない／～なしにはすまない～を余儀なくされる／余儀なくさせる
9	「その他の文型 1」 ～かいがある／～がい、～きっての、～ぐるみ、～こそ、～からこそ／～ばこそ ～んです、～てこそ、～こそすれ、～ずじまい、～たりとも～ない／～な（禁止）、～ふりをする、～たことにする／～たことになる
10	「その他の文型 2」 ～だに～ない、A くらいならむしろ B 方がいい／方がましだ／～なさい、A（という）よりむしろ B、せめて～だけでも（いいから）～、～つ～つ、～つける、～こなす、～慣れる、～抜く、～通す、～切る、～尽くす、～終わる、～終える、～やむ、～始める、～出す

授業の方法

<春学期>

授業は1回に1課のペースで進め、毎回、翌週授業で扱う課を読むことを予習とした。教科書の例文で、文型の意味、接続、用法などについて、Q&Aをしながら、確認した。その後、教科書の問題以外に、教師作成の前件後件作りや簡単な文作成問題を実施した。適宜ペア、グループ活動も取り入れた。毎回の宿題では、その日に学習した文法、語彙を使用した短文作成を課した。

<秋学期>

授業はテキストに沿って1回に1課のペースで進めた。授業では文型の意味、接続の形、注意点、類似文型・表現との違いなどを説明した後、テキストの例文を語彙の意味や読み方

を確認しながら読んでいった。例文は、類義表現が多く出てくる課では、その違いがわかるような例文も提示した。その後、学習した文型を使って簡単な文完成問題の練習をした。毎回、学習した文型を使った短文作成や文完成問題を 10 文程度宿題にし、翌週フィードバックを全体及び個別に行った。

結果と課題

<春学期>

1 クラス 32 名という大きなクラスであった。また、レベル差、理解度にもあったため、
レベル差

のある大人数のクラスでの授業運営の仕方が課題になっていた。授業態度は全体的によく、熱心に取り組む学生が多かったが、1 課に導入される文法項目の数が多いためか、その量に圧倒され、学習意欲にも影響がみられる学生もいた。また、難易度が高い書き言葉の文法や、意味、用法が類似している表現については、どこでどのように使用するのかを問われることもあった。そのため、授業ではポイントを絞って練習したり、学生が遭遇しやすい場面で設問を作成し、ペアで考えてもらうなどした。今後も、学生が実際に使える場面を想定し、学習した表現を運用できるような効果的な指導法を模索していきたい。

<秋学期>

履修登録者は 23 名だったが、実際に履修したのは 8 名だった。この 8 名はまじめに勉強に取り組んでいた。宿題の提出が遅れ気味の学生もいたが、ほとんどの学生の提出状況は非常に良好だった。まじめに取り組んだ成果は徐々に現れ、コース後半では宿題の文の間違いが減り、内容もよく考えたことが窺える文を作るようになっていった。しかし一方でテンス・アスペクトの間違いは最後まで散見した。今後は学習項目の定着とともに、テンス・アスペクトなども理解し正しく使えるよう、授業を工夫したい。

<J7 文法・文型>

担当者名： <春学期>井上玲子

<秋学期>数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：<春学期>15 名 <秋学期>25 名

使用教材：独自教材

目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	①名詞＋ながら ②～ながら （逆説） ③～まま ④～つつ ⑤～つつある。
2	意向形 ①～（よ） うか～まいか ②～（よ） うが／～（よ） うと／～かろうが／～かろうと ③～（よ） うが～まいが／～（よ） うが～まいと 語彙とニュアンスの似ている表現 迂闊な、機嫌、体裁
3	「ところ」 ①～どころか／～どころではない ②～ところだった ③～ところに／～ところを ④～ところによると／～ところによれば／～ところでは ⑤～ところまで来る／～ところまで行く 語彙とニュアンスの似ている表現 苦情／不平不満／文句／クレーム／愚痴
4	「まで」 ①～まで／～までに／～までになる ②～まで／～までして／～てまで ③～までだ／～までのことだ ④～までもない とりたての助詞 こそ、も、とか
5	「時」を表す文型 1 ①～そばから ②～が早いか ③～や否や／～や 似ている意味の使い分け 空き／空（から）、あたたかも／いかにも 色々な意味を持つ動詞

6	「時」を表す文型 2 ①～か～ない（かの）うちに ②～なり ③～たとたん（に）／～た矢先に ④～た弾みに／～た拍子に まとまりで覚えたほうがいい表現 ①～ても～よりほかに～はない ②～と、～ばかりでなく、ひいては～につながる ③～ので／～ば、～ないで／～ずに 済む ④～たら、～でも／だって、～たくもなる／たくなる ⑤～だけど／だが、どんな（に）～でも、ないよりは（ずっと）まだ ⑥～は～の現れだと解釈できる／受け取れる／思う／思われる／理解できる
7	「時」を表す文型 3 ①～次第 ②～度に ③～につけ／～につけても ④～につけ～につけ ⑤～折に ⑥～際に／～節に 覚えたほうがいい表現 ①～もしない＋名詞／で／くせに ②少しでも＋意向形＋ものなら、すぐに ③～も考えようによっては ④～（である）ことは、誰の目にも明らかだ ⑤～をもてあます
8	「時」を表す文型 4 ①～かけだ／～かける／～かけの ②～しなに／～がけに ③～際／～間際 覚えたほうがいい表現 ①～に越したことはない ②～のをいいことに ③～は～を物語っている
9	複合動詞 ①～損なう／～損ねる／～損ずる ②～違える

	③～過ぎる／～過ごす ④～まくる 覚えたほうがいい表現 ①～かと思いきや ②～とあれば／～とあっては ③～を皮切りに（して）／～を皮切りとして ④～に至るまで ⑤～を限りに／～を潮に ⑥～をもって／～をもってすれば／～をもってしても
10	副詞の呼応 ①たとえ／いくら～ても ／ どんなに～ても ②～たら～で／～ば～で／～なら～で ③～であれ／～であろうと ④～ならいざ知らず／～ならともかく ⑤～ならまだしも／～からまだしも 覚えたほうがいい文型 ①～はおろか／～は言うまでもなく／～は言うに及ばず ②～もさることながら ③～と相まって ④～を踏まえて ⑤～始末だ

授業の方法

<春学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。毎回、翌週扱う課を読んでくこととし、授業では、まずペアまたはグループで文型の意味、接続、用法の確認をし、練習問題をしてもらった。次に、全体で文法・文型の説明を行い、練習問題を全体で確認した。文法・文型の補足説明ではパワーポイントを使用した。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。文型・表現の用法や例文を確認した後、短文作成や空欄補充の問題で文型ごとに練習し、最後にその日に学習した内容をすべて練習した。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行い、翌週フィードバックをした。

結果と課題

<春学期>

特外外国人学生とビジネスデザイン研究科の大学院生が在籍するクラスであり、履修登録 15 名のうち、12 名の学生が出席した。この 12 名の学生は非常に学習意欲が高く、毎回課した短文作成の宿題も欠席で遅れ提出はあったものの、一度も欠かすことはなかった。授業内においてもペアやグループで 1 つの文法・文型について納得するまで話し合う場面も見受けられた。しかし、一方で課題もいくつかあった。学期の前半は家で予習をして授業に臨んでいたが、中盤からは予習をして来ない学生が多くなり、クラス内で文法・文型の確認作業を行ってから練習問題をしていく形になっていった。

J7 の文法・文法は普段聞きなれない文型も多く、生活の中やアカデミックな場面で使われない文法・文型について、学生の興味・関心が薄れているように感じた。そこで、学生たちが実際に文型を運用できるように、グループでミニ小説を書く時間を設けてみたものの、その活動に意義を見出していない学生が何人かいたようである。また、中盤からは文型練習で時間を使ってしまったため、小説作成活動の時間を取ることができず、中途半端に終わってしまった。しかし、学生の実際の生活に直結させて文型の例を出すと、非常に興味を引いたようで、熱心にメモを取ったり、質問が多く出たりして、授業が活発になった。J7 の文法・文型は文学作品の中で見られるものが多いが、いかに学生たちの興味を引くように文型を扱っていくか、それを今後の課題としたい。

<秋学期>

「大学生の日本語 D7 (済理)」と併置のコースで正規学部生 6 名も履修していたが、それ以外の大部分は特別外国人学生であった。今年度から授業時間が伸びて 100 分授業になったため、それぞれの文型に費やす練習の時間を増やすようにした。各課の宿題 (短文作成) は添削して翌週返却し、間違いやすいポイントをフィードバックするとともに、よく書けていた学生の例文を共有した。登録はしたものの長期欠席で不合格となる学生もいたが、それ以外の学生は出席率も宿題の提出状況もよく、学習した文型や表現を身につけ、テストでも良い成績を収めた。ただ、こちらから指名しないと、発言はほとんどなく、やや単調な授業になりがちだったので、クラス運営の方法は今後の課題としたい。

2019 年度 「J5～J7 読解」授業記録

コースの概要

J5～J7 の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5、J6 では説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの文章を取り上げ、読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、要約やディスカッションを行なう。J7 では、より長い文章を読み、内容理解をした上で要約したりレジュメを作成したりすることを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

＜J5 読解＞

担当者名：＜春学期＞神元愛美子 ＜秋学期＞武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 17 名、秋学期 14 名

使用教材：独自教材

目標

様々な分野の読解教材を数多く読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。また、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに様々な読むスキルを学ぶ。

授業の方法

＜春学期＞

授業では説明文、手紙文、新聞記事、小説等様々な種類のテキストを扱った。基本的には予習を宿題とし本文理解のためのリーディングワークシートを配布した。そして授業では内容確認を行なった。その際、まず、ペアでワークシートと本文の不明点を確認してから全体で内容確認を行なった。時間があれば、内容に沿ったディスカッションやリーダーズシアター等のアクティビティーも取り入れた。また、目的に応じた読み方ができるようにスキミングや速読等のリーディングストラテジーも導入した。更に語彙力強化のために、授業開始時に語彙クイズを実施した。

＜秋学期＞

スケジュールに沿って、各回テーマを意識した授業を心掛けた。読解文は音読し、漢字の読み方は音読時に確認した。基本的には予習を前提とし、語彙の意味調べを「リーディングチューター」を使って行ってもらった。翌週は前週に扱った読解文から漢字の語彙クイズを実施した。授業では他の学生との交流も重視し、ペアやグループ活動を積極的に取り入れた。

結果と課題

＜春学期＞

学生同士の仲が大変よく、ペアから学ぶことができた。漢字圏の学生が非漢字圏の学生に漢字や語彙の意味を教え、読解が得意な学生はペアにわかりやすく説明しており、互いに学ぶことができていた。そのため、ペアやグループアクティビティーを授業に組み込むこみ、様々な活動を通して、読む力と伝える力をつけることに成功した。授業最後のアンケートによると「語彙力がついた」「様々な読み物を読めるようになった」「速く読めるようになった」と力がついたことを実感していた。

今回の授業では読み方を学んだが、正確性を高めるにはまだまだ練習と語彙力が必要であ

る。今後も様々なテキストに触れて力をつけてもらいたい。

＜秋学期＞

全体的には熱心に取り組む学生ばかりだったが、4限目にも関わらず、毎回遅刻が数名いたのが気になった。宿題として、次回の授業で扱う読解の語彙や意味調べを熱心に行う学生がいる一方、漢字圏出身の学生の中には、意味がわかればそれでいいという傾向が見られ、実際の日本語での読み方を重視しない傾向が見られた。また非漢字圏出身の学生で漢字の意味や読み方を知らない度合いに個人差があり、一斉授業には向かないクラスだった。よって、読解をする時間を設ける際、クラスメートと協力して読解を進める者、一人で黙々と進めるというスタイルで読解に取り組んでいる者とに分かれていた。授業では、読解のテーマによって活動のスタイルを使い分け、全員グループで実施する場合と、スタイルを選んで実施する場合を選んだ。読解のトピックによっては、意見交換を行った。グループで話し合ったことを全体でシェアしていくようにした。読解の方法としては、知らない語彙や漢字は調べてもいいことを前提としたため、最後のテストのように辞書を使わず問いに答えるという練習は速読の練習のユニット以外ではほとんど実施してこなかった。本来、読解には推測力も必要であることから、辞書を使用せず、知らない語彙や漢字があっても読み進める練習をもっと取り入れることが今後の課題である。

＜J6 読解＞

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 15 名、秋学期 17 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

説明文、意見文、新聞記事、小説など、さまざまな読解教材を取り上げ、読解のストラテジーを意識して読む練習を行った。毎回一つ読み物を読んできると、指定した漢字語彙を覚えてくることを予習として課した。授業の冒頭に漢字語彙クイズを実施し、グループで読み物の内容確認やディスカッションを行った。また、同じテーマの読み物の速読も練習した。さらに、要約をしたり、「～によると、・・・という。」など、こちらで指定した表現を用いて読み物を引用して、それについて短い意見を書くという練習もした。学期に数回、分担読解も取り入れ、読んだ内容をクラスメートに伝える練習も行った。

結果と課題

＜春学期＞

昨年度に比べて漢字語彙クイズの成績があまりよくない学生がやや多かったが、読み物を読んでワークシートをするという宿題は皆しっかりやってきた。今年度から授業時間が100分になったので、リアクションペーパーを書く活動も取り入れた。読むスピードの速い学生の中にも正確に内容をまとめたり意見を述べたりすることのできない学生もいたのでよい練習になった。前の学期にJ5を修了した学生のなかに、漢字が苦手な読むことへの学習意欲が低下している学生がいて、動機付けをするのが難しかった。J6修了後には上級になるのでレベルを下げることはできないが、漢字への拒否感がなくなるよう指導を工夫していくことが課題である。

＜秋学期＞

秋学期は大学生の日本語C7（済理）と併置されていたため、学部の学生も受講した。春は欧米系の学生が大部分だったが、秋学期は逆転し、漢字圏の学生が大半を占めた。漢字圏の学生は読解力はあるものの、漢字の読み方は知らない学生もいたため、クラスではグループで声に出して読む活動も行った。また、学期のはじめは、内容理解はできてもその内容を口頭で説明したり意見を述べたりする力のない学生が多かったので、自分が担当した資料についてクラスメートに説明する分担読解の活動を多めに取り入れるなど、工夫した。非漢字圏の学生の中には漢字に苦勞している学生もいたが、最後まで努力して力をつけていった。春と秋で学生のバックグラウンドが異なり、読む力や話す力も違ったため、毎学期履修者を見て、授業活動を調整していくことが課題だと思われる。

＜J7 読解＞

担当者名：＜春学期＞浅野有里

＜秋学期＞aクラス：神元愛美子、bクラス：嶋原耕一

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期21名、秋学期aクラス17名、bクラス8名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

＜春学期＞

前半は、新聞記事や天声人語の内容理解と要約練習、中盤は論説文の内容理解とレジュメ作成、後半は小説の内容理解を中心に進めた。要約やレジュメの作成に既に慣れている学生とまだポイントが掴めない学生が混在していたため、段階的に少しずつ文字数を減らしながら、手本となる学生の文章のいい点を全体でシェアし、フィードバックを行った。後半の小説は学生から芥川龍之介、太宰治などの近代小説を読みたいという要望が多かったため、芥川、太宰、それから立教大学にゆかりのある江戸川乱歩の作品を、作家の作風や時代背景なども紹介しながら扱い、これまで学生が持っていた作家のイメージ等と比べながら、より作品の理解を深められるよう工夫した。

<秋学期>

(a クラス)

社会的、文化的背景が盛り込まれた長文のテキスト以外に、新聞記事、小説など、様々なスタイルの文章を扱った。教材は読解シートを宿題として基本的に事前に読んでくこととした。授業ではペアまたはグループで内容確認とワークシートの確認を行い、その後、全体確認をした。時間があれば、学生の国との比較やディスカッションを取り入れた。学期中盤では芥川龍之介の小説扱い、ゼミ型式で発表させた。また、要約の力を培うために天声人語も並行して扱った。天声人語は 100 字以内の要約を宿題とし、授業冒頭でピアチェックし、よいものを共有した。また、レジュメの作成も適宜実施した。

(b クラス)

春学期同様、序盤は新聞記事や天声人語の内容理解と要約練習、中盤は論説文の内容理解とレジュメ作成、終盤は小説の内容理解を中心に進めた。ただ要約練習は、中盤以降も適宜課題を出し、コースを通して継続して実施した。要約練習もレジュメ作成も、読解の素材をまとめる練習であるが、レジュメ作成の際にはピアに発表させるなどして、口頭でまとめる力の育成も意識した。小説の読解ではディスカッションも行い、読んだ内容に基づいて意見を伝えあう練習をした。

結果と課題

<春学期>

履修者数は 21 名であったが、実際に毎週授業に参加したのは 15 名であった。漢字圏 3 名、非漢字圏 12 名が出席し、授業内で読解を行うと、読むスピードに差が出てしまったが、内容理解そのものに大差はなく、ディスカッションなどの活動も対等に行っていた。スピードの差は、宿題として読んでくこと、語彙リストの配付、または授業内でプラスアルファの課題を用意することで調整した。前半に新聞記事を多く扱ったせいか、やや飽きてしまう様子も見られたため、前半にも超短編小説を入れるなど適宜予定を調節した。また、授業で扱った文章の内容と関係がある短い記事やコラムなども、授業のウォーミングアップとして扱ったが、やはり関連性の高い読み物には興味を示し、集中して読んでいたように思う。コース全体の中での教材の関連性や扱う順序など、今後検討していきたい。

＜秋学期＞

（a クラス）

授業開始当時は非漢字圏の学生たちが漢字に苦戦していたが、大変真面目な学生たちだったので、徐々に漢字、語彙力をつけていき、語彙や内容理解で困ることは少なくなった。また、授業内で初見の文章を扱った際には、漢字圏と非漢字圏の学生で差が見られたが、両者とも内容はきちんと把握できるようになった。そのため、後半は内容をまとめ、説明するトレーニングと意見を伝えることに力を入れた。アウトプットする機会は多かったが、自分の意見を口頭で伝えるより書くほうを好む学生もいたので、クラスディスカッションの際は発言に偏りが見られた。天声人語の要約は何度も繰り返し行い、比較的早い段階からポイントを絞り、要約できるようになった。ただ、学生からは、天声人語だけでなく、他の文章の要約練習もしたかったという声も出た。そのため教材選びを今後の課題の一つとした。

（b クラス）

個々の読解のレベルは高く、全員非常にまじめであり、課題をせずに授業に来ることもほとんどなかった。また、漢字圏の学生 4 名、非漢字圏の学生 4 名という構成だったが、非漢字圏の学生の理解度も高かったため、授業内で読み物を読ませる場合も、特別に対応する必要はほとんどなかった。まじめに取り組んだ分、読解の力はそれぞれついたように思う。ただ、学期を通して課題だったのが、クラスとしてのまとまりである。J7 であり、日常会話を日本語でするのは問題ない学生たちなので、教師側からはあまり学生間の交流を増やすための働きかけはしなかった。しかしその結果、ディスカッションやペアワークでは沈黙が目立ち、最後までクラスメイトの名前を知らない、という学生もいた。コース序盤で、多めにアイスブレイクの活動を取り入れてもよかったと思う。以上が教師としての反省点である。

2019 年度 「J5～J7 作文」授業記録

コースの概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

＜J5 作文＞

担当者名：＜春学期＞a クラス：長島明子、b クラス：数野恵理

＜秋学期＞a クラス：三浦綾乃、b クラス：金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：＜春学期＞a クラス 10 名、b クラス 11 名

＜秋学期＞a クラス 7 名、b クラス 5 名

目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

授業は毎回1課のペースで進めた。学期中、6つのテーマで800～1000字の作文を書いた。授業ではテキストに沿って、その課のポイントの説明、テキストの練習へと進めていた。課によっては練習の前にペアやグループで構成や内容について話し合った。構成メモは、初めは授業で書いて書き方や内容を教師が確認したが、コース後半では宿題にした。宿題の作文は提出前に友達のを読み、コメントし合った。フィードバックは、全体で複数の学生が間違ったところなどについて確認し、その後各自が返却された作文を読み直し、直された箇所を確認した。

(b クラス)

テキストに沿って、その課の表現を確認したり、読み物の内容を確認して要約の練習をしたり、そのトピックについてグループでディスカッションをしたりしてから、アウトラインを書いて作文を書かせた。作文を書いた後でクラスメートと交換して読み合う活動をしたこともあったが、教師のフィードバックをもとに書き直しをしてから交換して読み合う活動をしたこともあった。また、学期の後半は手書きではなく、パソコンでタイプして提出させたが、学期末はテストに備え、制限時間内に手書きで書く練習もした。

<秋学期>

(a クラス)

クラスは基本的に1回に1課のペースで進めた。テキストに沿ってその課のポイントを確認してから、テキストの練習や課題作文に進んだ。原稿用紙の使い方が定着していない学生もいたため、その指導も行った。課題作文は学期の前半は手書きで提出させていたが、後半はパソコンでタイプしたものも可とした。クラスでは課題作文のテーマについてクラスで話しあったり、作文の構成メモや書いてきた作文を互いに読み合ったりする活動も行い、学生同士で意見を交換する機会をできるだけ多く設けた。また、学期中に3回のリライトを行った。

(b クラス)

授業は10課から成るテキストに沿って、基本的に1回に1課のペースで進めた。授業でその課のポイントを説明し、テキストの練習に進んだ。課が終わるごとに、800～1000字の課題作文を宿題にした。その際に、作文の構成や内容を練るために学生同士で話し合うこ

ともあった。提出後は、多くの学生が間違えた文法や表現などはクラス内で全体に向けてフィードバックした。特に意見の引用をするときの文型表現、書き言葉、呼応の表現などを丁寧に扱った。また、課題作文を教師に提出する前に、学生同士で作文を読み合っただけでなくクラスメートの作文を直したり、コメントしたりするピアエディティングの活動も行った。学期中はリライトの作業を3回行った。また、学期中盤からは Word で作成した作文の提出も認めた。その際に、パソコンでの作文の書き方も指導した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

コース前半は、原稿用紙の使い方や構成メモの書き方がよくわからない学生もいたが、回が進むにつれて慣れていき、学期終了時には整った構成で、学習した表現を使って自分の意見を述べるできるようになった。要約に関しては、要約の方法をよく理解し、ポイントを押さえて制限字数内にうまく内容をまとめることができた。何人かの学生の作文に、語彙や表現の不適切な使用が散見されたが、これは辞書で調べた語彙をそのまま使ったためだと思われる。今後は、適切に使えるようになるための効果的な方法を検討したい。

(b クラス)

学生ごとに異なる課題があり、毎回の作文で個別にフィードバックをした。学期のはじめは漢字が苦手な学生がほとんど使わずに作文を書く学生、抽象的な漢語を多用するものの不正確な使い方であるためわかりにくくなってしまう学生、漢字圏の学生で漢語を使っているのになんとなくわかるものの文法が不正確だったり、構成に問題があったりする学生などがいた。このうち文法の不正確さはなかなか改善しなかったが、それ以外の問題は次第に改善されていった。残念なことに、学期の終わりに近い頃、社会問題について書く作文で、インターネットの資料をかなりの部分でコピーする学生がいた。大学では何か資料を読んだ場合にはしっかりと出典を明記して適切に引用しなければならないことを伝え、どのように書けば盗用・剽窃にならないかを指導した。アカデミック・ライティングでの引用は J6 レベルで扱うが、学生によっては J5 でも日本語の資料を容易に読めるため、J5 でも引用について少し説明をしておく必要があると感じた。これについては今後の課題とした。

<秋学期>

(a クラス)

初回の授業から一度も出席しなかった学生が2名いたものの、熱心な学生が多く、クラスの雰囲気はとても良かった。初めはテキストの読み物や課題作文のテーマが難しく、理解するのがやっとであったが、学期の終盤にはテーマをよく理解し、構成を考えながら適切な文型・表現を用いて自分の意見を作文に書けるようになった。ピアリーディングも回数を重ねるごとに具体的なコメントやアドバイスできるようになった。また、今学期はリライトが3

回できたことも、学生にとって良い振り返りになったと思う。しかし一方で、要約に関しては課題が残っている。文章中のキーワードを使ってまとめられない、自分の意見や解釈も交えてしまう、そもそもの文章の内容を正しく読み取れないという学生が多く見られた。テストでは限られた時間内で要約しなければならないためさらに難易度は上がる。今後は、時間を決めて文章を読み大意をつかむ練習や、キーワードを見つけてそれを短文に落とし込む練習を増やすことを検討したい。

(b クラス)

このクラスは 5 人であったが、最後まで協力的に進めることができ、特にピアエディティングが成功したクラスであった。ピアエディティング後は、少し遅れ気味だった 2 名が力を伸ばしたように思った。特に、クラスメートのよいサンプルに出会えたことと、読む人の立場になって、読みやすい文を書くという読み手への配慮を考えることができたことが理由ではないかと思う。授業開始時は 800 字を書くことに抵抗があったが、学期途中からは楽々 800 字以上書けるようになった。また、リライトを全く嫌がらなかったのも、練り直し、書き直すことでさらに上手になったのではないかと思う。人数が少なかったこともあり、個別指導が可能になり、予定回数よりも多くリライトを行うことができた。課題としては 1 コマの時間に対する教材の配分をどうするかということである。1 コマで指導するにはやや多いところと、教材が少なめで教師側が補充したところがあった。教材や指導内容を見直し、今後もよりより指導ができるように工夫していきたい。

<J6 作文>

担当者名：<春学期>a クラス：長島明子、b クラス：嶋原耕一

<秋学期>a クラス：小森由里、b クラス：金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 a クラス 20 名、b クラス 12 名

秋学期 a クラス 17 名、b クラス 7 名

使用教材：独自教材、『Master of Writing』（立教大学）

目標

レポートや作文の構成について学習し、毎回 800 字から 1200 字程度のレポートが書けるようにする。また、自分の意見の論拠となる資料やデータを読み取り、要約し、レポート中に正しく提示できるようにする。その際、きちんとした構成で文章が組み立てられるようにする。

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

テキストに沿って、2回で1課のペースで進め、学期中4つのテーマでレポートを書いた。授業では各課の学習項目を確認し、資料を読んで内容を確認した。その後、全体で構成について考えた。構成メモは宿題とし、次の授業時に、ペアで話し合った。引用のしかた、参考文献の書き方は毎回全体で確認し、間違えることが多い学生には個別に対応した。レポートは宿題とした。フィードバックでは、全体で間違いが多かったものを確認してから、個別にもフィードバックした。

(b クラス)

学期中に4本のレポート課題を課すペースで、授業を進めた。各課題については、図表の説明表現や引用表現の練習に加えて、読み物の読解、構成メモの作成、ディスカッションなどを実施した。4本中3本のレポートではリライトする時間も設けた。

<秋学期>

(a クラス)

授業は2回にテキスト1課のペースで進めた。各課のテーマに関連する資料やデータを提示し、それらを論拠として引用させてレポートを作成させた。そのために、資料を要約したり引用したりする練習や、参考文献リストを作成する練習を取り入れた。コースを通して、1200字程度のレポートを4本作成させたが、フィードバックのクラスも設け、第1稿の問題点を教師が指摘し、学生自身に修正させリライトさせた。

(b クラス)

J6 作文では、プレレッスンの後、4つのテーマを扱い、レポートを作成することを課題とした。授業では、独自教材のテキスト及び **Master of Writing** を用い、作文や論文におけるグラフの説明方法、引用方法、及び参考文献の書き方の指導を行った。特に引用してその例を挙げる、引用して意見を述べるなどの練習を行った。さらに引用する際、特に盗用・剽窃に対する注意喚起を行った。課題として、意見文を書くための構成メモ、並びにレポートを提出させた。レポートは **MS-Word** で作成し、基本的に **Blackboard** で提出を受け付け、担当教員が添削し、クラス全体と個人に対しフィードバックを行った。学期中に3回のフィードバックを行い、原稿用紙を用いた書き直しを授業時間内で行ったり、宿題にして **MS-Word** で提出させたりした。その際の作文においては、学生が自らで考え修正できるように、担当教員がアドバイスをを行った。学生が書き直したりリライトに対してさらに課題がある場合は、翌週に改めてフィードバックを行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

履修登録者は20名だったが、欠席者が多く、最後まで出席したのは10名だった。この10名は真面目に勉強に取り組んでいた。J6では引用のしかたや参考文献の書き方を学習するが、引用を用いたレポートを書くのは、ほとんどの学生にとって初めてだったと思われる。

そのためコース開始時は引用のしかたや参考文献の書き方の間違いや書き忘れが多かったが、回を重ねるにしたがって減っていき、最終的に基本的な引用方法と参考文献の書き方は身につけられたように思う。ただ、全体的に内容の要約や言い換えを必要とする間接引用はまだ苦手なようだった。今後は、間接引用もうまく使えるよう、授業を工夫したい。

(b クラス)

b クラスには、特別外国人学生とビジネスデザイン研究科の学生、計 12 名がプレイスされた。一部の学生は学期前半から欠席が続く結果となってしまったが、出席し続けた学生は課題にしっかり取り組み、着実に力を伸ばす様子が見られた。J6 作文の課題の一つである引用表現についても、その文末形式や括弧の種類など、ほとんどの学生が必要な項目に注意を向けられるようになったと感じた。ただ、和気あいあいとお互いにサポートしあう学生がいる一方で、自分のペースで黙々と作業を進めるタイプの学生もあり、どのようにクラスの一体感を出しながら学びあう雰囲気を作っていけるかを、今後の課題としたい。

<秋学期>

(a クラス)

17 名が履修登録をしていたが、一度も出席することのない学生、一度しか出席しない学生が 10 名いたため、実際には 7 名のクラスで授業を行った。7 名の学生たちは非常に真面目で、欠席がほとんどなく、提出物が期限に遅れることもなかった。レポートを書いたことのない学生がほとんどで、コース初めには 1200 字ものレポートが書けるかどうか不安そうだったが、テキストの課が進むにつれて、レポートの構成の仕方や内容の掘り下げ方を身に付けていき、まとまりのあるレポートが作成できるようになっていった。学生たちは、日本語力の高い者がほとんどで資料の読み取りや要約の練習などスムーズに進んだが、個人作業を好む傾向があった。そのため、ピア活動を導入しにくかった。レポートの構成メモについて意見交換したり、フィードバックのクラスでレポートの加筆修正の方向性を相談し合ったりなど、クラスメートとの活動を活発に行うことができると、学生たちの学びもより深いものになったのではないかと考えられる。ピア活動の効果的な取り入れ方を今後の課題としたい。

(b クラス)

このクラスは 7 名の学生が登録し、そのうち 4 名が非漢字圏の学生だった。課題文は全てふりがなのない文章のため、非漢字圏の学生にとってハードルが高いが、課題文をテキストファイルで与えたところ、web 上の学習サイトを利用するなどして、自分で読み方や意味を調べ、授業前に課題文を理解した上で授業に参加した。非漢字圏のうち 2 名はレポート提出日が遅れることもあったが、最後までがんばり、全てのレポートを提出することができた。ピア活動で構成メモを持ち寄って話し合いをする際には、お互いの意見交換が活発に行われ、レポートを書くための強い動機付けになったと思われる。特に漢字圏の学生であっても構成に課題があったが、ピア活動によって構成メモを練り直すことで次第に上手に書けるようになった。授業では定義、現状の提示、意見のサポートとして引用を用いる練習を

重点的に行った。レポートの中には練習したフレーズが上手く生かされていることが確認でき、効果があったと実感できた。今後の課題は教材として扱う資料である。現在使用している教材は新聞記事をもとにしたものが多いが、引用の仕方や参考文献の書き方の説明が複雑になることもある。次年度は一般書籍も資料にして、基本的な引用練習や参考文献の指導を行った上で、新聞記事の場合を行いたいと考えている。

<J7 作文>

担当者名：<春学期>a クラス：平山紫帆、b クラス：数野恵理

<秋学期>山内薫

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 a クラス 7 名、b クラス 8 名

秋学期 16 名

使用教材：独自教材、『Master of Writing』（立教大学）

目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

授業は 2 回に 1 課のペースで進めた。各課の前半はテキストの課題文を読み、内容について意見交換をした後、レポートの論点を考えていった。後半はレポート課題で使用する資料を受講者自身が準備し、それをもとに構成メモを作成、検討した。課題を提出した翌々週にはフィードバックの時間を設け、間違いやすい表現を確認したり、各自の提出課題へのフィードバックをもとにリライトを行ったりした。学期 4 本のレポート課題を課した。

(b クラス)

一学期に 4 種類のレポートを書き、レポート 1～3 についてはそれぞれ書き直しをした。導入の授業ではレポートの構成、レポートで使う表現、引用の仕方、参考文献の書き方などを学習し、その課のテーマとなる複数の資料を読んで引用の練習をしたりディスカッションをしたりした。次の授業では 2、3 人のグループになって、各自が探してきた資料を紹介し合ったり、レポートのアウトラインを説明したりした。また、今学期は少人数だったので皆の前でアウトラインを発表してクラスメートだけでなく教師からも質問・フィードバックを受ける機会を設けた。レポートを書いた後は、教師のフィードバックをもとに書き直しをさせた。アンケート調査の報告ではレポートに書いた内容について発表もした。学期末にはテストの準備として、短い新聞記事を読んで制限時間内に作文を書く練習もした。

<秋学期>

授業は 3 回に 1 課のペースで進め、学期中 4 本のレポート課題を課した。各課の前半はテキストの課題文を読み、「内容理解とテーマの整理」についてグループで意見交換をした後、構成メモを作成し、レポートの準備を行った。後半はレポート課題で使用する資料を受講者自身が準備し、それをもとに構成メモを再検討し、さらにグループで推敲をするようにした。レポートの内 1 回は、課題に基づいたアンケートを作成し、収集した後にレポート作成を行った。フィードバックは、学期中に 3 コマを使用し、各自の提出課題に対するフィードバックをもとにリライトをし、再提出を課した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

今学期は、7 名がプレイスされたが、途中でリタイアする学生が多く、少人数で授業を行うことが多かった。しかし、出席を続けた学生は非常に熱心に取り組み、着実にレポートを書く力を身に付けていった。特に、J7 作文はレポートでの適切な引用の仕方の習得に重点を置いているが、授業でくり返し練習した結果、学生たちは効果的に引用をしながら論を展開していけるようになっていった。

一方で課題もある。今学期は、少人数であった上に、他の学生とコミュニケーションを取らなければならない学生もいて、学生同士が活発なやり取りをしながら考えを深めていくということが十分にできないこともあった。学生の心的な負担も考慮しつつ、一人一人のクラスでの学びを深める方法を模索していきたい。

(b クラス)

今学期は少人数クラスだったため、グループの中だけではなく皆の前でアウトラインを発表したり、レポートで書いたことについて発表したりする時間も設けることができた。内容や構成に問題がありそうな場合にはそこで確認することができたこともあり、実際にレポートを書いた時に内容・構成面であまり大きな問題はなく、回を重ねるごとに良いレポートが書けるようになっていった。レポートの書き直しについて、このクラスでは教師の添削とフィードバックを受けて書き直すという方法だったが、J7 レベルの学生は日本語力もあり、お互いのレポートを読み合いコメントし合うこともできるレベルなので、今後は、初稿を書いた段階でピアエディティングをするというような活動も取り入れたい。

<秋学期>

16 名の履修生の内、6 名は初日より連続欠席、1 名は 2 回の出席の後に大学院の研究による多忙により受講を辞退した。そのため、定期的な出席者数は 9 名であった。受講生の内 1 名は、体調不良と国の卒業論文のために、課題の提出が毎回遅延したが、担当者との連絡は怠ることなく、学期末まで課題に一生懸命取り組んでいた。他の履修生においては、欠席

や遅刻する者が少なく、各回の課題もレポートも期日通りに提出された。

本クラスは、リライトの活動が非常に効果的に働いたクラスで、4本のレポート及び期末テストにおいて、リライトを行うごとに、各学生の作文の力が向上されていく様子が窺えた。また、授業中のグループ活動においても大変活発な意見交換や指摘を行なうことができおり、毎回、独自の意見が顕著に示された作文が提出された。今後は、学生がより熟考できるようなフィードバックの方法について考えていきたい。

2019 年度「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コースの概要

聴解・会話は、J5 は初中級、J6 は中級前半、J7 は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週 1 回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

<J5 聴解・会話>

担当者名：<春学期> a クラス：武田聡子、b クラス：小林友美

<秋学期> a クラス：小森由里、b クラス：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：<春学期>a クラス 12 名、b クラス 12 名 <秋学期>a クラス 11 名、b クラス 8 名

使用教材：梶本総子・宮谷敦美『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版、宮城幸枝他『毎日の聞き取り plus40』凡人社

目標

J5 は初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

毎回の授業ではまずディクテーションクイズを行い、スピーチ発表、聴解、聴解に関連した会話練習を行った。スピーチは全部で 2 回実施し、第 1 回目はグラフ説明を行い、第 2 回目は各自が興味ある時事問題について調べて発表した。各自テーマを決め、アウトラインを作成し、クラス全体で発表をした。教材の中から「勧誘」「許可」「提案」の機能を取り上げ、相手と場面に応じたスピーチスタイルを意識し、場面に合わせて様々な表現を使用できるように練習した。表現確認後にロールプレイ練習を行い、最後はミニドラマを作成し発表した。期末テストは聴解とロールプレイを実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

クラスの活動に積極的に参加し、まじめに取り組む学生が多かったが、若干名授業中に携帯を見て明らかに授業と関係のないことをする学生がいたのは残念だった。授業の最初の方では聴解で学んだ表現をロールプレイに生かすことが意識的にできず、ターゲットの文型をうまく使えないミニドラマになってしまう人がいたが、2回目からは、テキストで学んだ文型を生かしてミニドラマを作るよう指導し、発表にも改善が見られた。聴き取り能力と会話能力に差がある学生もあり、聴き取り能力を急激に伸ばすということは難しいが、会話表現や語彙は新たに学ぶことが多かったのではないかと思われる。ただどうしてもこれまでの自分のスタイルに固執気味で新たに学んだことを取り入れることが難しい学生もあり、そのような学生にどのように変わってもらおうかというのが今後の課題だと感じている。「通じればいい」というのではなく、よりよい表現を学んで成長していきたいといった向上心を持ってもらいたい。また発音やアクセントについては、個々の弱点をそれぞれが意識し、改善に取り組んでほしいと思い個々に伝えたつもりだが、地道な練習は本人の意識付けが何より重要だと感じた。

(b クラス)

出席率がよく、授業活動にも熱心に取り組むクラスであった。1名、学期途中で来なくなった院生がいたのは残念であった。ミニドラマでは、TVドラマや日本人の友人から聞いた表現を用いてペアで会話を考えたり、役になりきって発表したりするなど、楽しみながら会話練習をすることができた。そのような点に気を取られるからか、助詞、話体の表現など、細かい部分の誤用が見られることがあった。フィードバックは、教師が評価、個別にコメントをするだけでなく、発表後に、会話のスクリプトを OHC に映し出し、どのような点がよかったか、どのような表現にしたらよかったか等をクラス全体で確認した。しかしながら、発言する学生は決まっており、指名しても発言に困る学生が数名いた。そのため、客観的に自分たちの会話を振り返り、自己、他者の間違いに気づかせるような意識づけが必要だと感じた。また、フィードバックの仕方についても今後も引き続き工夫していきたい。

<秋学期>

(a クラス)

11名が履修登録をしていたが、一度も出席することのない学生が2名いたため、実際には9名のクラスで授業を行った。9名の学生たちは非常に真面目に活動に取り組んでいた。ディクテーションは、長音、促音、撥音など細部を正しく聞き取ることが難しかったが、回を重ねることによって正確に書き取れるようになっていった。スピーチとロールプレイも同様に、初回は緊張していたが、フィードバックした点に留意し、発表できるようになった。ロールプレイでは、学生にロールカードを自由に選択させたところ、カジュアルな場面での

会話ばかりが好まれ、フォーマルな場面が避けられる傾向がみられた。9名の小さいクラスだったので、両方の場面のロールプレイをさせ、異なるスタイルの表現を練習させることも可能だったかもしれない。また、期末テストでは聴解テストの結果が芳しくなかった。学生たちからも聴解テストが難しかったという声が聞かれた。聴解練習では、会話の内容よりも会話の中で使われる表現の聴き取りに比重を置いていたことが影響した可能性が考えられる。聴解の練習方法を工夫することを今後の課題としたい。

(b クラス)

非常に熱心な学生が多く、活発で明るい雰囲気クラスであった。聴解においては、比較的早いスピードの教材を使用した。全体的によく聞き取れていた。自習用音声を活用している学生も多かったようだ。しかしながら、期末テストの聴解問題では、正確に聞き取るのが難しかった学生もいた。会話のミニドラマでは、協力的に課題に取り組み、各ペアで様々なアイデアを出し合いながら、会話を作成することができた。発表の際は、上手に演技をしながら会話をし、クラスで盛り上がりを見せた。その一方で、活用や表現の正確さなど、細部に意識が向かない学生もいた。そのため、先学期同様、会話のスクリプトを OHC に映して、フィードバックを行った。今後も、正確さが身につくような指導方法について考えてきたい。

<J6 聴解・会話>

担当者名：<春学期>a クラス：長谷川孝子、b クラス：藤田恵

<秋学期>a クラス：井上玲子、b クラス：藤田恵

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：<春学期>a クラス 18 名、b クラス 9 名 <秋学期>a クラス 8 名、b クラス 5 名

使用教材：瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク、荻原稚佳子・斉藤真理子・増田真佐子・伊藤とく美『日本語上級話者への道—きちんと伝える技術と表現』スリーエーネットワーク、鎌田修他『中級から上級への日本語なりきりリスニング』the Japan Times など、生教材（テレビニュース）

目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話やスピーチでは、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、ディベートにおいては、資料を用いて根拠のある意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

毎回授業の前に自宅学習としてテキストの音声を聞いてくることを課し、授業の前半に

同じ音声を使ったディクテーションクイズを行った。授業の後半は聴解や、それに関連した会話練習を行った。また、テキストで学習したトピックに関連したスピーチ、ロールプレイを学期中に実施した。この他に、プレゼンテーション、ニュースの聴解とディスカッションを行い、それに関連した内容で、期末課題としてディベートを行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

聴解では、主題や構成を意識して聞くようになった。会話では、日本語表現、日本特有の会話の流れ、スピーチやプレゼンテーションでは、日本語表現、論理展開を意識した構成、準備の大切さなどを学んでいった。ディベートでは、論理的に説明する力をつけると同時に、グループで協力して意見をまとめる楽しさにも気づいていた。しかし、学習者が求めている弱点の克服までにはまだ課題がある。聴解では、連体修飾や省略を理解しながらの細部の把握の練習、ディベートでは、即座に反論をする練習がさらに必要である。

(b クラス)

春学期の b クラスは特外生のための 9 名のクラスであった。学期の初めにそれぞれの目標を定め、多くが、フォーマルな場面での会話を挙げていた。J6 聴解・会話では、前半にカジュアルな場面の会話と聴解を扱い、後半はよりフォーマルな表現が用いられるプレゼンテーションやディベートを行った。これらの活動は、履修者の目標に合っており、履修者の学習動機が最後まで保たれ、学習効果も高かった。教師は、履修者個人の日本語能力の伸びを把握することができるが、履修者自身は能力の伸びを自覚することが難しいため、今期は学期初旬に行ったスピーチの録音データを自身でとるようにし、それを学期末に確認することで、学習成果を感じるように図った。最終日の授業内にこの録音データを用いて、成果を確認する計画であったが、この活動を取り入れることができなかったことが悔やまれる。次回は、授業の中で確認できるようにしたい。また、今学期よりこのレベルで初めて PPT を使ったプレゼンテーションを扱ったが、発表日までの準備の進め方に課題が残った。b クラスでは、1 回目の発表を練習とし、教師からの FB をもとに 2 回目の準備を進めるようにしたが、次回は 1 回目の発表から準備ができるように進めていきたい。

<秋学期>

(a クラス)

a クラスは正規大学院生 3 名と特外生 5 名の計 8 名が履修したが、大学院生 3 名は一度も出席をしなかったことから、今学期は 5 名のクラスで授業を行った。

会話練習では『中級から上級への日本語なりきりリスニング』を使用した。学生にとって扱ったトピックは簡単だったようで、話の概要は理解できているようであった。一通りクラスで練習した後、最後にスクリプトを配布して確認の時間を設けた。そこで細部まで聞き取れなかったり、意味のわからない語彙などを自身で調べたり、教師に質問したりして、各自

語彙拡充に努めていた。

学期中盤では聴解練習とパワーポイントを用いたプレゼンテーションを並行して行った。履修者全員、日本語でプレゼンテーションをした経験があったため、評価基準もしっかり考慮してプレゼンテーションを行っていた。聴解は使用教材と生のニュースを扱った。ニュースのスピードに慣れていない学生が多かったので、まずはキーワードをピックアップしてから、大まかな内容を掴む練習を行った。よくできる学生もニュースの大意は掴めてはいたものの、ディクテーション練習ではメモを取るのに苦戦していた。細部まで内容が理解できるよう、ポーズを取りながらキーワードを抽出していき、全体で確認しながら進めていった。

学期後半から、b クラスと合同でディベート活動を行った。ディベート実技（期末試験）のグループ分けを行った後、まずはディベートの練習を行ったが、質疑を反論の場と捉えていた学生が多く、どのグループも相手側の主張に対する質問ではなく、反論する形になってしまった。「質問」の意味を再度全体で確認した後、本番のディベートを行ったが、どのグループも FB を活かし、「質疑」と「反論」の違いをしっかりと理解してディベートに臨んでいた。ディベートは難度が高く、うまくできるかどうか心配していたが、実践ではどのグループも想像以上に完成度の高いディベートを行うことができたように思う。根拠となるデータも各グループしっかり準備してディベートに臨んでいた。ディベートの本番前に練習の時間を設けたことと、導入と準備の間に冬休みを挟んだことにより、準備に時間をかけることができたのがよかったのではないかと考える。ディベート終了後に学生に感想を聞いてみたところ、「自分たちのディベートについて日本人の意見を聞いてみたかった」という意見があった。期末試験期間であるため、日本人学生を迎えてのディベート実技は難しいように思うが、今後、実施に向けて模索していきたい。

今学期の履修者は、非常に真面目で学習意欲も高かったが、学期当初は、全体での確認の際には学生からの発言がなかなか出なかったり、会話練習の際にも、教師が指示した練習が終わった後は、そこで会話が途切れたり、活発な活動とはならない場面があった。学期当初は 1 名、積極的に発言してくれた学生が中心となってくれたが、徐々に他の学生からの発言も増えていったように思う。積極的に発言できる学生だけでなく、どのような学生にとっても安心してクラスで発言しやすいような教室環境を教師がどのように整えていったらよいのか、今後の課題としたい。

(b クラス)

秋学期の b クラスは、全員特外生の 5 名のクラスとなった。毎回自宅学習として課していた聴解の書き取り練習とクイズでは、きちんと取り組んでいる様子が見られ、クイズではほとんどの学生が満点に近い点数をとっていた。履修者にとって、この練習は、語彙の拡充に役立っているようであった。学期の初めに取り組んだ日常会話の練習は、やや易しめに感じている様子も見られたが、履修者は話の概要のみを聞き取っていた。そのため、J6 レベルの目標は、概要のみでなく、細部までの聞き取りができることであることを履修者に伝え、それができるように練習をしていった。学期中盤から扱ったニュースの聴解では、生活の中

で日本語のニュースを聞いていない履修者が多かったため、概要さえも聞き取ることが困難な場合が多かった。そのため、概要の聞き取りから練習を始め、最後には細部の聞き取りまでできるように、問い方を工夫して進めた。パワーポイントを用いたプレゼンテーションは学期中に2回行い、スライドの作り方と発表表現を練習した。1回目の発表後のFBの内容が、2回目では改善されており、J6 レベルとしての目標を達成していた。学期終盤にはディベートの活動を行い、この活動はaクラスと合同で実施した。練習のディベートでは、「反論」の内容が不十分であるなどの課題が見られたが、学期末のテストで行ったディベートでは、修正と改善が行われ、クラスで学んだことが活かされていた。今学期の履修者は、個人作業を中心に進める活動は能動的に進めていたものの、ペア・グループでの活動では、教師が促さなければ、活発に行われないことが多く、会話練習やディベートの準備活動において課題が残った。これは、個人の性格もあるだろうが、この他に履修者自身の口頭能力への自信のなさも影響していると思われる。聴解会話クラスでは、口頭でのアウトプットの機会を多くすることが、学習目標の達成へとつながると考える。よって、このような履修者が、教室を練習の場と認識して発話が増えるように、授業の進め方を工夫していきたい。

＜J7 聴解・会話＞

担当者名：＜春学期＞aクラス：高嶋幸太、bクラス：嶋原耕一

＜秋学期＞高嶋幸太

授業コマ数：週1コマ

履修者数：＜春学期＞aクラス15名、bクラス13名 ＜秋学期＞20名

使用教材：荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤真理子『日本語超級話者へのかけはしーきちんと

伝える技術と表現—上級から超級へ』スリーエーネットワーク

生教材（テレビ番組の録画およびDVD）

目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

授業は聴解と会話の2部構成で進めた。聴解では、「ガイアの夜明け」「カンブリヤ宮殿」等のDVDを視聴し、内容把握と語彙や表現の確認を行った。DVD視聴後は、テーマである社会問題についてグループでディスカッションを行った。定期的に日本人学生ボランティアも募集し、ディスカッションに参加してもらった。ディスカッション後は、要約と意見

をレポートとして提出することを課題とした。会話は『日本語超級話者へのかけはし』を使用し、ロールプレイとプレゼンテーションを課題としながら、特に相手にわかりやすく伝える練習を行った。期末テストとしては、プレゼンテーションと DVD の内容要約を実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

本授業では、ゲストスピーカーとして日本人学生に来てもらい、映像教材に関して 3 回ほどディスカッションを行うことができた。学んだことを口頭でアウトプットできる機会が複数回設けられたため、発話のモチベーションにつながったと思われる。また、さまざまな学生から多様な意見やアイデアを聞くこともできたため、インプットという観点からも有意義であったと考えられる。あわせて、クイズやミニクイズなどでも比較的高い点数が取れていたため、意欲的に授業に取り組んでいたように思う。課題としては、ディスカッションにおいて活発に話し合いをしているグループと、していないグループがあったという点が挙げられる。今後は、教員が適切なファシリテーションを行い、どのグループも活発に話し合いができるようにすることを目指していきたい。

(b クラス)

クラス内のレベル差が少なく、みな積極的で非常に進めやすいクラスだった。ロールプレイやプレゼンテーションでは、何回か繰り返し練習したこと、フィードバックで自身の発表を聞く時間をしっかりと確保したこと、ある程度の熟達が見られたと思う。ただ多くの時間を割いたディスカッションについては、課題と覚えることもあった。J7 の学生は準備をしなくとも、どのトピックについてもある程度話すことができるため、漫然と思いついたことを話して満足してしまう様子が見られた。自由度の高いディスカッションだからこそ、どのようなことに気を付けながら参加するのか（反対の仕方や相手の意見の受け止め方など）、もっと指導し注意を促してもよかったように思う。今後の課題としたい。

<秋学期>

履修者は多かったのだが、実際に毎回授業に参加する学生は少なく、小規模のクラスとなった。そのため、密にコミュニケーションを取ることができた。一方で、少数ゆえにこぢんまりとしたディスカッションになっている場面も見られた。ロールプレイやプレゼンテーションでは、きちんと事前にスクリプトやスライドが準備されており、よく練られた発表になっていた。

今後は、ディスカッション時における、きめ細やかなファシリテーションなども行い、あまり意見を述べない学生からも、話してもらうような工夫をしていきたい。

2019 年度 J8 授業記録

コース概要

J8 は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8 で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<日本の文化・社会 A>

担当者名：<春学期>丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 5 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、最後のまとめとしてプレゼンテーションを行う。

結果と課題

本科目は正規学部留学生対象科目「大学生の日本語」との併置科目である。履修生は全員が正規学部生であった。日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。視聴覚教材を主として展開するテーマと、読解教材を主として展開するテーマをそれぞれ 2 種類用意し、ディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行った。

トピックはいくつかの候補の中から学生の希望を反映させて選定した結果、インフラ開発と、ソーシャルイノベーションとなった。最終プレゼンテーションとレポートは、当該科目で取り上げたテーマと関連させたトピックを各自が選定し、課題に取り組んだ。授業開始時に、いいプレゼンとは、いいレジュメとはという活動を行い、日本語力の点でこの授業で

期待することを伝えた結果、履修者は全体的に個々の授業活動の目的を理解した上で積極的に活動に取り組めたと思う。レポートの書き方の中で必ず扱われる引用のしかた、出典の書き方も取り上げた。

授業で取り上げた各トピックについて、各自が毎回欠かさず課題を行い、日本の文化・社会的文脈に関する知識も得ながら各テーマについて理解を深めることができた。

<日本の文化・社会 B>

担当者名：<秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の文化・社会に関するテーマを 4 つ選び、それに関する映像教材を見たり、資料を読んだりして、授業を進めた。テーマに関するディスカッションや発表を中心とした授業を行い、期末には扱ったテーマから 1 つを選び、さらに理解を深める最終プレゼンテーションを実施した。

結果と課題

学生からの要望があった「日本の観光」「日本のテクノロジー」「日本の医療」「日本の高齢化」という 4 つのテーマを取り上げ、1 テーマにつき 3 週かけてそれぞれを学んでいった。3 週目には、毎回学生ボランティアを呼び、彼ら・彼女らに対して発表をしたり、ディスカッションを実施したりした。学生ボランティアとのインタラクションは、どのグループも活発に行っており、有意義な活動になったと考えられる。

今学期、扱った資料は、官公庁が発行しているデータや統計などが特に多かった。今後は、バラエティーに富んだ文章を読んでいくために、さまざまなジャンルを取り扱うように留意したい。また、資料の難易度も徐々に難しくなるよう、提示順にも気をつけたい。

<日本の文化・社会 C>

担当者名：<秋学期>丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して日本社会や文化に関するテーマの中から、受講生の興味・関心に沿うものを選び、そのテーマに沿って授業を進める。

授業の方法

「日本の企業風土」「日本的経営」「日本型サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

結果と課題

J6～8 の 3 レベルの学生を対象として開講し TA を配置する科目である。今回の履修者は全員 J7 以上であった。ゲストスピーカーによる講義の前の事前学習、後の事後学習は基本的にグループディスカッションや、分担読解の課題を行い、履修者の主体的な学習を促した。本科目は小レポートに 3 回取り組む設計になっている。分担読解は、1 回目では、ピアリーディングの活動に慣れていない、また資料の構成を意識せずに文章を読み発表しているケースが見られたが、回を重ねることで、ピアリーディングの活動を文章理解に上手に生かしている様子が観察され、発表の内容もよくなっていったように思われる。学期末まで学習を継続した履修者は、全体的に非常に学習意欲が高く、学期末まで学習動機を下げることなく、積極的に取り組んだ。

<日本語の諸相 A/B>

担当者名：<春学期>沢野美由紀、<秋学期>佐々木藍子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名、秋学期 13 名

使用教材：独自教材

目標

一つの言語としての日本語を取り上げ、他の言語と比較した場合に特徴的な日本語の側面を理解する。擬音語・擬態語、様々な感情表現、微妙なニュアンスを表す副詞、位相や役割語など、日本語の特徴的な側面を取り上げ、それについての論文を読んだり、調査したりする。

授業の方法

<春学期>

今期のクラスでは主に「配慮表現」、「日本語の擬音語・擬態語」、「依頼、謝罪のメールの書き方」などを学んだ。関連する資料や文献を読み、日本語と受講者の母語などとの比較もしながらディスカッションを行うとともに、実際に大学生がどのような配慮表現や擬音語・擬態語を使用しているかという調査を宿題として課し、授業で分析、検討した。

配慮表現と擬音語擬態語については、各学生がそれぞれテーマを決めて文献を読み、一人2度ずつ発表を行った。また、この2項目を含め、敬語や役割語など、日本語について各自関心があるトピックを選んで最終発表を行い、それをもとにレポートを作成した。

<秋学期>

本授業は日本語を一つの言語として取り上げ、いくつかのテーマに合わせて、他の受講生とディスカッションしたり、深く調べたりすることを通して、日本語についてさらに理解が深められるよう進めた。テーマとして取り上げたのは、「若者ことば」「メールの文体」「呼称」「役割語」の4つであった。各テーマでは、テーマに関して、知っていることをもとにブレインストーミングを行い、テーマの概略が掴めるようなある程度まとまった文章を読んだ。その後、文章を読んだ内容やブレインストーミングで話した内容などについて、グループでディスカッションをした。ディスカッションで話にあがった疑問やわからないことについては翌週までに調べておき、調べてきた内容は翌週グループ内で共有した。まとめとして、それまで学んだことや調べたことについてまとめて発表するようにした。発表は全部で3回行ったが、最初の2回はグループごとの発表、最後の1回は受講生1人ずつの発表とした。最後は発表した内容をもとに、レポートを作成した。

結果と課題

<春学期>

継続して出席した学生は7名中5名で、それぞれ日本語について関心を持つテーマが異なっていたようであるが、配慮表現や擬音語・擬態語の文献や課題にも積極的に取り組んでいた。学生により語彙力の差があり、時としてディスカッションでお互いの論点がかみ合わない場面も見られたが、語彙がやや少ない学生も鋭い意見を言ったり、なかなか気づかない点に切り込んで発言していた。学生同士がお互いに尊重しあってくれたおかげで、十分なディスカッションができたと思われる。

今後の課題として、文献を読んで発表する際にどのように自分の意見を述べたり批判したりするか、その方法や着目のしかたがわからない学生がいたので、文献の読み方についてどのように指導すればいいかという点について考えていきたい。

<秋学期>

今学期は受講生が多く、また学部2年生から大学院生まで多岐にわたる学年の受講生が履修していた。そのため、多少の日本語能力のレベル差はあったものの、充実したグループ

活動が行えた。グループやペアでの活動を行う際は、いつも同じペア、グループではなく、できるだけいろいろな学生同士が交流できるよう、毎回ペア、グループを変えるようにした。その結果、受講生もいろいろな学生と交流することができ、クラスの雰囲気も週を経るごとに良くなっていったと思う。また、人前で発表することについても、非常にスキルが上がったように思われる。

この授業では学生自身が各自で問題解決を行っていけるような力をつけることも念頭に置いて指導にあたったが、これについては、日本語の知識、能力のレベルだけではなく、総合的な学力も関係しているため、学生によってはまだ1人では問題解決まで持っていくことのできない学生もいた。この点については、今後どのようにフォローしていくべきかを工夫していきたい。

＜日本語論文読解＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）小森由里、（新座）谷 啓子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）8名、（新座）1名

使用教材：独自教材

目標

日本語で書かれた学術論文の内容が読めることを目指し、日本語論文の構成語彙などについて学ぶ。

授業の方法

初回に論文とは何かを考え、個々の専門分野に関する論文を探す手法を学ぶ。その後、各自が探した専門の論文（担当論文）や教師から提示されたサンプル論文を素材に「論文の構成」を確認していった。その中で、論文特有の表現を学び、分野による論文の違いを共有した。後半は担当論文を先行研究の扱い、データの種類、調査方法などの面からさらに分析した上で、全体構成を発表した。最終課題として、担当論文についての詳細なレジュメを作成し、口頭発表とディスカッションを行った。

また論文読解に関連して、「参考文献や引用のルール」「調査方法」、最終発表に必要な「レジュメ作成」や「口頭発表上の注意」などを練習とともに内容に組み込んだ。

結果と課題

（池袋）

正規学部生 6 名、特外生 2 名の計 8 名のクラスだった。1 時限目だったためか、遅刻欠席が目立ったが、授業中は 8 名とも熱心に取り組んでいた。特に、特外生 2 名は論文読解に意欲的で、他の学生も特外生の態度に触発されていたようである。8 名は経営、異文化、日

文など専門が異なり、担当論文も多様な分野のものであったが、学生自身が選択した論文であるため、細部まで読み込んで理解できていた。最終発表では、発表者は論文の要点を簡潔に説明でき、オーディエンスの学生達も発表者にさまざまな質問をし、有意義なディスカッションをすることができた。発表用のレジュメは、最終的には教師のコメントを反映し概ねよく整理されてはいたが、1本の論文を2頁のレジュメにまとめるのには苦勞していた。レジュメの第1稿の中には、短くまとめるために重要な部分を削ってしまい、内容が理解できないようなものもあった。レジュメ作成にあたり、適切な要約の仕方を指導することを今後の課題としたい。

(新座)

履修者は学部生1名(2年次)であったが、欠席もなくすべての課題に非常に真面目に取り組んだ。専門である福祉分野から論文を選択した。今期から100分授業となったが、その分練習問題を多めに扱い、細かな質問にも対応できた。

1名で順調に進んだため、後半は進度に余裕が生まれた。本人より口頭発表が苦手とのことだったので、最終課題の準備前にレジュメ作成練習と発表練習を2回分取り入れた。特につなぎの言葉や図表の説明、声の出し方などが改善された。最終発表用のレジュメは稿を重ねて分かりやすいものになった。内容もよく読み込んでおり、適切なコメントもつけられていたと思う。

今回のように1年次で選択必修の日本語を履修したメンバーだけの場合は、途中の引用のルールの復習等に時間がかからない場合があるので、その分の進度調整を準備しておくとういと思われる。

<日本語論文作成法>

担当者名：<秋学期> (池袋) 山内薫、(新座) 谷啓子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期(池袋)8名、(新座)2名

使用教材：大島弥生他『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 第2版』ひつじ書房, 2014.

浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版, 1997.

北原保雄監修(独)日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計画作成法』凡人社, 2009.

目標

卒業論文や学術的な論文作成に必要とされる語彙・文型・スキルについて学び、高度な日本語論文作成能力を身につけることを目指す。日本語の論文の構成、スタイル、使用される語彙や接続表現、文型の特徴について学び、自らそれらを用いて構成の組み立てや短文作成などを行う。その後実際の論文作成を行い、実践力をつける。

授業の方法

前半は論文の探し方の指導後、各自の専門分野に関する論文を探し、1本担当論文を決めて分析し、論文の大まかな構成を把握した。専門や関心の異なる分野の論文に触れることで、論文にも様々なパターンがあることが確認した。また、テキストで論文特有の日本語表現を学んだ。

後半は、テキストで研究計画書の書き方、論文に必要な表現等を学びながら、各自が取り組みたい論文の準備を行った。テーマ探しから始まり、研究課題を検討、並行して先行研究の収集と整理を行った。特にテーマ探しではピア・レスポンスを活動に盛り込み、互いのコメントから修正点を見つけて改善につなげていった。それぞれの作業に関してはワークシート等にまとめ、適宜発表した。計画書を執筆する段階では教師とブラックボードやメールでやりとりし、コメントを参考に修正を重ねた。最終課題として各自の論文の研究計画書と文献メモを作成、発表した。

結果と課題

(池袋)

履修生は正規学部生 6 名、特別外国人学生 2 名であったが、その内の 1 名は新学期より就職先との面談などで欠席が続き、連続欠席が重なっていった。そのため、7 名の履修生で授業活動が行われた。毎回出席している学生は課題の提出や検討を順調に重ね、ピアあるいはグループ活動により、各学生の担当論文の分析、及び研究計画書の作成や推敲を進めることができていた。その一方で、遅刻や欠席が多い学生は、課題の提出が遅延したため、他の学生と進度が異なり、授業担当者とのやり取りが中心となった。研究計画書は、担当論文から発展させた内容、学生の専門の内容、専門外だが留學生活の経験により関心を持っていた内容など、多様な内容となった。また、発表では、各学生が聴き手を意識した工夫を行っており、専門外の内容でも十分に発表内容を理解できるものとなり、発表後のディスカッションにおいても、有意義な意見交換を行うことができた。

今後の課題としては、コース前半の論文分析における練習問題を取り上げる方法である。各学生の担当論文を詳細に分析し、発表することができていたが、テキストの論文の序論・本論・結論の各段階で構成や表現を指導した後、時間が取れず練習問題を十分に扱うことができなかった。そのことから、研究計画書を作成する際に、表現を応用することができていない学生が多く見られた。今後、宿題にして確認したり、研究計画書作成の際に復習を取り入れるなど、学生が的確に応用できるように、工夫したい。

(新座)

今期の履修は学部生 2 名であった。2 人が同じ学部だったことから、専門の論文を読む際やディスカッションでも共通となる下地があったため、お互いに専門的な質問や適切なコメントが出せていたように思う。2 人共卒業論文を意識した履修で、意識も高く真面目に取り組んだ。少人数だったのでじっくり進めることができたが、他分野の論文との違いの学び

は共通論文がメインとなり、他学部のパラエティに触れる機会は少なかった。

後半の研究計画は、テーマ設定の段階ではピア活動でコメントをもらって足りない部分や新たな視点に気付く様子が見られた。課題文を書く段階では教師の赤が入る前の状態で、まずは互いに分かりにくい部分を指摘し合ってから修正版を見ることで自分以外のプロダクトからも吸収していた。授業中の課題や提出物も概ねスムーズであった。

研究計画書は、サンプルやテキストでは学んだものの、初めて自分のテーマで書く際にはやはり時間がかかった。‘なんとなくそれっぽいもの’を書くのではなく、ステップをふんで各段落の役割を丁寧に見直す作業が学べたように思う。最終発表では特に質疑が今後につながる充実したものとなった。文献は現段階としてよく当たっていたが、自分なりの文献メモをさらに充実させていけたら、今後論文を書く際に有用だと思われるので、よりよい説明を工夫したい。

<キャリアジャパニーズA>

担当者名：<春学期>（池袋）平山紫帆、（新座）井上玲子、<秋学期>（池袋）佐々木藍子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期（池袋）13 名、（新座）1 名、秋学期（池袋）15 名

使用教材：『立教就職ガイド 2019』『立教就職ガイド 2020』

『外国人留学生のための就活ガイド』

（参考資料『外国人留学生のための日本就職オールガイド』

授業の方法

<春学期>

（池袋）

就職活動で必要とされるスキルのうち、「作文スキル」に関しては、自己分析を行った上でエントリーシートを作成する活動を行った。各自が書き上げたものはペアやグループで検討し、改善点とその方法について話し合った。そして、教師からのフィードバックも与えて完成度を高めていった。「発話スキル」については、実際の就職活動を想定した個人面接や集団面接、グループディスカッションの練習を行った。「ビジネスマナー」に関しては、ビジネス上で必要とされる服装や態度について考えたり、手紙やメールのマナーについても学習したりした。

さらに、学期中に 1 回、ゲストスピーカーの講師を招き、就職活動の概要に関する説明を聞き、日本における就職活動の特徴や取り組み方を学んだ。

（新座）

授業では、『立教就職ガイド』、『外国人留学生のための就活ガイド』『外国人留学生のための日本就職オールガイド』を中心に、他教材、就活支援サイトの情報などを基に、日本での

就職活動に関する基本的な流れ、知識等を学びながら、実際に「自己 PR」や「志望動機」といったエントリーシートで出題される内容を分析し、書く練習をしたり、面接の練習を行ったりした。さらに、専門の方にお越しいただき、現在の日本企業の動向、就職状況などを講義していただいた。

＜秋学期＞

（池袋）

本授業は 3 つのステップに分けて授業を進めた。第一ステップでは就職活動の概要と流れ、自己分析を取り扱い、日本の就職活動について理解を深めた。第二ステップではエントリーシート、履歴書の書き方、書類送付の仕方について取り上げ、就職活動に必要な作文スキルの向上を目指した。第三ステップでは第一ステップ、第二ステップで学習した内容を踏まえ、実際の面接でよく出題される質問の回答について検討し、個人面接・集団面接の練習を行った。また、適宜企業分析やビジネス敬語の練習をするほか、ゲストスピーカーとして株式会社 i-plug の田中伸明氏を迎えるなどし、就職活動への意識を明確にした。

結果と課題

＜春学期＞

（池袋）

学期を通して多くの課題を課したが、学生たちは熱心に一つ一つの課題に取り組み、着実に就職で必要とされるスキルを身につけていった。また、特に日本での就職を希望している学生は、ゲストスピーカーの方のお話を伺い、就職活動への意欲がさらに高まったようである。

だが、今学期の受講者は、日本での就職を強く希望している学生もいる一方で、就職を全く考えていない短期留学生もいるなど、受講の目的や状況がばらばらで、授業の進め方が難しいこともあった。

学生の状況やニーズに応じて、同じ課題でもアプローチの仕方を変えるなど、より柔軟な方法を検討していきたい。

（新座）

履修者は 1 名であった。その学生は日本での就職を希望していたため、授業では、使用教材で日本での就職活動に関する基本的な流れや知識を確認した後、時間があれば、その学生が希望する業種・職種の HP を一緒に確認した。また、今夏、インターンシップの参加を希望していたため、学生のニーズに応える形でエントリーシートを書いたり、課題を作成したりする時間を設けるなどした。

日本でのアルバイト経験があるので、履歴書の書き方や面接での最低限のマナーはすでに知っていたが、志望動機やエントリーシートの作成では、どのように自分をアピールしたらいいかなかなかアイデアが出て来ず、かなりの時間を要した。しかし、教師と何度も対話をしていくうちに、自分自身について掘り下げて分析する習慣をつけることができたよう

である。

履修者が1名だったので、その学生のペースで授業が進めることができたが、教師と1対1での授業だったため、時には単調になった感が否めない。時にはキャリアセンターに足を運んで、留学生の就職状況について実際に話を聞いてみるなどして、臨機応変に対応してもよかったかもしれない。

＜秋学期＞

(池袋)

今学期は履修者が多く、学部2年生から4年生、院生、特外生から成る学生15名が履修した。どの学生も日本での就職を希望している学生たちで、毎回の授業でも積極的に就職活動に関する質問があった。この授業では、自己分析やES、志望動機など、文章を作成するという作業が大きな割合を占めており、課題でもその割合が多かったが、大部分の学生は熱心に取り組んでいた。ESの作成、自己分析、面接の練習などでは、各自で考えた後、ペアで互いにチェックしあうこともあった。特にESについては、日本社会ではマイナス評価につながる内容を書いてしまう学生もいたが、互いに確認し合うことで、内容をきちんと検討するきっかけになったようである。結果として学生同士も良い関係性を築くことができ、互いの刺激にもなっていたようである。一方で課題が多かったために、1度提出が遅れると、どの課題を出していないのか、自身でわからなくなる学生もいたようである。この点については、チェックシートなどを作成し、学生が各自で管理できるような体制をとるなど、今後工夫していきたいと考える。

＜キャリアジャパニーズB＞

担当者名：＜春学期＞(池袋) 佐々木藍子、＜秋学期＞(池袋) 小森由里、(新座) 井上玲子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期(池袋) 25名、秋学期(池袋) 6名、(新座) 3名

使用教材：独自教材

授業の方法

＜春学期＞

就職試験(SPI)の国語分野の出題範囲から毎週1～3つのテーマを選び、問題を解きながら必要な知識や対策を学習した。また、毎回授業開始時に前回に扱った内容の小テストを行った。学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを実施し、その翌週に期末テストを行った。

＜秋学期＞

就職試験(SPI)の言語能力に関する分野から、同意語、反意語、慣用句など語彙力に関するテーマや文章読解に関するテーマなどを選び、練習問題を通して必要な知識や問題に

対応するためのストラテジーを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。

結果と課題

＜春学期＞

今学期は、履修した学生が 25 名と規模の大きいクラスでの実施であった。この授業は、就職試験の対策の授業であったが、実際に日本での就職を希望している学生は 7 名程度で、その他は日本での就職を希望していない、あるいはまだ検討中の学生であった。日本での就職を検討している学生は、日本語の知識のブラッシュアップを目的として受講したようである。

この授業は宿題で解いてきた問題の解説が中心となるため、その日に扱ったテーマに関するペアワーク、グループワークを取り入れながら進めた。宿題が多く、暗記する内容も多かったが、自ら日本語のブラッシュアップを意識して受講していたためか、宿題やクイズの勉強もしっかりしており、真面目に取り組む学生が多く、スムーズに授業を進めることができた。ただ、読解問題の箇所に入ってから、学生によって問題を解く速さの差が大きく、授業のスピードが合わない学生もいたようである。これについては、今後この点についてどのように工夫していけばよいか検討したい。

＜秋学期＞

（池袋）

正規学部生 4 名、特外生 2 名が本コースを履修した。6 名のうち遅刻欠席が目立つ学生が 1 名いたが、他の学生たちは真面目に授業に出席し復習予習も十分に行っていた。毎回の小テストにも準備をして臨んでいた。期末テストは範囲が広く、特に語に関する知識を問う問題が多いためか、模擬テストは芳しい結果ではなかったが、模擬テストによって十分に身につけていない項目を学生が自覚し復習できたようで、期末テストの結果は総体的に良好だった。

6 名の学生の中には、就職試験を意識している者もいたが、日本語力の向上のために受講した者もいた。学期末にコース全体の感想を聞いたところ、いずれの学生もそれぞれの目的が達成できる授業内容だったとのことである。学生は満足しているようではあったが、学習項目が同音異義語や四字熟語など語や語句の知識に関するものが多いため、授業が答えのチェックという単調なものにならないよう工夫する必要が求められた。今後も学生が積極的に授業に取り組めるようクラスの進め方を改善することを課題としたい。

（新座）

今学期は、正規学部生 2 名と特外生 1 名の計 3 名が履修した。この授業の履修目的は、3 名全員日本での就職を考えていたため、就職試験対策という意味合いは勿論のこと、学生自

身の日本語能力の更なるステップアップのための意味合いもあったとのことである。1名は学期中盤あたりから欠席が目立つようになったが、他の2名は学習への意欲も高く、予習もしっかりして授業に臨んでいた。また、毎回の授業で積極的に質問が出て、非常にいい雰囲気です。

授業自体は、学生の協力的な姿勢もあって、特に問題なく進めることができたと思う。しかし、授業運営、特に宿題の答え合わせに関しては、教師から学生への一方的な知識の伝達になってしまった感はない。学生間のコミュニケーションが教師対学生間のコミュニケーションに比べて、圧倒的に少なかったように感じている。解答を確認する際にも教師から学生への一方向の形式ではなく、学生間でコミュニケーションが取れるような方法を考えていきたい。

<ビジネス日本語口頭 A>

担当者名：<春学期>（池袋）小森由里、（新座）井上玲子、<秋学期>（池袋）山内薫

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）20名、（新座）4名、秋学期（池袋）11名

使用教材：独自教材

参考：

（池袋・新座）

『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』、『BJT 模試と対策』

（新座）

『新装版商談のための日本語』、『新装版ビジネスのための日本語』、

『にほんごで働く！ビジネス日本語 30 時間』

目標

ビジネスで必要とされる構文または談話レベルの日本語力（聴解・発話）を身につける。

授業の方法

<春学期>

（池袋）

ビジネス場面を想定した聴解および会話の練習を行った。聴解練習では、ビジネス用語や表現に注意させながら、情報を聴き取らせた。会話練習では、会議、電話応対、商談と大きく3つのテーマを取り上げ、各場面で用いられる表現や談話展開を指導した。特に、ビジネス場面には欠かせない待遇表現の運用に注意させることを心掛けた。また、日本のビジネスマナーや習慣なども、それぞれのテーマに絡めて導入した。

（新座）

授業では、ビジネスシーンの「会議」「電話」「商談」という3つの場面を取り上げ、そこ

で必要とされる会話力、対応力を養成するよう進めた。各回の進め方は、まずその回で扱う表現を確認し、グループで会話練習を行った。次に、ブランクのあるモデル会話に入る表現を考えてもらった後、ディクテーションを行い、その回のターゲット表現を再度確認した。そして、そのモデル会話を使って口頭練習を行った後、まとめとしてロールプレイを行った。各場面を学習した後には、ロールプレイテストを行い、テスト終了後にフィードバックを行った。さらに、並行してビジネス場面での聴解力をつけるため、ビジネス日本語能力テストの聴解問題も行った。

<秋学期>

(池袋)

本授業では、ビジネスにおける「会議」「電話応対」「商談」という3つの基本的な場面を設定し、各場面において適切な言語行動及び非言語行動を養成するように進めた。具体的には、「会議」は①提案・申し出、②説明(プレゼン)、③賛成・反対、④質疑応答、「電話応対」は①基本、②応用、「商談」は①指示・確認、②訪問、③依頼・断り、④お詫び(クレーム処理)を取り上げ、基本的な表現、社内と社外の表現の異なり、各場面の要点などを学んだ。その上で、ペアでロールプレイを作成し、クラスで発表を行った。また、3つの基本的な場面の学習後に、3回、まとめのロールプレイテストを行った。さらに、ビジネス場面での聴解力を身につけるため、毎回、ビジネス日本語能力テストの聴解問題を行った。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

20名(正規学部生16名、特外生4名)が履修登録をしたが、そのうちの4名は欠席が続いたり途中で履修を取りやめたりして、修了することができなかった。一方、16名は真面目に出席し、聴解の練習やロールプレイのペア・ワークに積極的に取り組んでいた。16名のうちの大半が日本の企業や自国の日系企業への就職を希望しており、本コースがビジネスに直結する実践的な内容であることが学生の学習動機を高めたものとみられる。ロールプレイのテスト後には、発話内容・文法や表現の正確さ・発音・流暢さなどに関するコメントを記した評価シートを学生に個別に配布し、改善が必要な点を意識させた。ロールプレイはテーマごとに3回テストを実施したが、テストのたびに学生の会話力が向上していることが感じられた。他方、聴解の期末テストには予想以上に苦戦していた。ビジネス用語が身につけていないこと、ビジネス場面の婉曲表現に不慣れなことがその要因と考えられる。聴解の練習を通して、語彙表現を増やすよう指導することを今後は心がけたい。

(新座)

履修者は正規学部生3名と特外生1名の4名であったが、1名が一度も出席しなかったため、出席者3名で授業を進めていった。3名中1名は日本での就職を希望、2名は現段階では日本での就職は考えていないが、ビジネス表現に興味があるとのことだった。毎回の活

動では新しい表現についてはメモを取るなど、熱心に授業に取り組んでいた。また、3名中2名がアルバイト経験者であったため、クラス内で扱った表現について実際にアルバイトの場面で使ったことがあるものや、失敗談など、現場の話を全体で共有することができた。

どの学生も敬語の知識はあるものの、授業で扱ったビジネス場面に慣れておらず、敬語や扱った表現をスムーズに使用できない場面が見受けられたが、ロールプレイテストでは意識して使おうとする様子が見られた。

課題として挙げられるのは、ロールプレイテストの時に、ビジネス場面であまり良い印象を与えない振る舞いをしたり、打ち合わせの場面では、隣同士で座って対応したりしていたことである。普段の練習から、口頭表現の練習だけでなく、立ち居振る舞いなどのビジネスの基本マナーも丁寧にフォローする必要性を感じた。今後の課題としたい。

<秋学期>

(池袋)

履修生は正規学部生8名、特別外国人学生3名であった。履修生の内、2名は新学期より連続欠席で、1名は学生の申し出により学期途中で辞退した。8名の小規模のクラスであったため、全員での意見交換を行いやすく、ビジネス場面での社内と社外の表現の異なりや非言語行動、さらに、日本と各学生の母国や居住国との異なりに関し、毎回、活発に話し合いを行うことができた。日本での就職を想定している学生は2名と多くはなかったが、大半の学生がビジネス場面のイメージを持っており、また日本語力に大きな開きが無いクラスであった。そのため、ロールプレイにおいては、ピアでテキストのモデル会話をさらに発展させた上で、発表することができていた。また、その発表を聴いた学生が参考にし、次のロールプレイで談話を展開させようとする様子が窺えた。

一方で、ビジネス日本語能力テストの聴解問題においては、選択問題の回答を選ぶことは、いずれの学生も容易であると捉えていたが、詳細な箇所を確認すると、的確に聴き取れていないことが多々あった。ビジネス場面での聴解力が向上するよう指導方法を改善することを今後の課題としたい。

<ビジネス日本語口頭 B>

担当者名：<春学期> (池袋) 平山紫帆 <秋学期> (池袋) 平山紫帆、(新座) 井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 (池袋) 11 名、秋学期 (池袋) 4 名、(新座) 0 名

使用教材：BJT 対策問題集 (語彙リスト)

目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力を、ソリューション・デザイン型活動を通して身につける。

授業の方法

<春学期>

まず、初回の授業で、ソリューション・デザイン（SD）型活動の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」をテーマに、SD 型活動を進めていった。具体的な進め方としては、まず、プレタスクとして、そのテーマで必要となる概念やキーワードを考える時間を設けた。その際には、はじめから教師が概念を紹介するのではなく、学生たちが自分たちで考え、教師が必要に応じて補足するという方法をとった。そして、そこで挙げられた重要なキーワードの意味や具体例を分担して調べ、結果を会議形式で発表し合った。そうしてテーマを考える上での大きな枠組みを共有したところで、タスク（商品開発の場合、飲料メーカーの新商品開発）の提示を行い、グループごとに調査や検討を進めていった。そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをシェアコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画したものを一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

毎回の SD 型活動は社内会議という設定で行った。そして、議事録を作成し、毎回、上司に会議内容を報告するという活動を取り入れた。

<秋学期>

初回の授業で、ソリューション・デザイン（SD）型活動の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」をテーマに、SD 型活動を進めていった。具体的には、まず、プレタスクとしてそのテーマで必要となる概念やキーワードを考え、全員で枠組みを共有した。その上で、具体的なタスク（商品開発の場合、飲料メーカーの新商品開発）を提示し、グループごとに調査や検討を進めていった。そして、1 回目のグループ発表を行ってグループ同士でコメントをシェアコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、録画したものを一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。なお、後半のテーマ 2 では、受講者数が少なくなり、1 班しか作れなかったため、グループ同士のコンサル活動を行う代わりに自分たちの映像を見ながら改善点を検討する時間を設けた。

毎回の SD 型活動は社内会議という設定で行った。そして、議事録を作成し、毎回、上司に会議内容を報告するという活動を取り入れた。

結果と課題

<春学期>

（池袋）

今学期は、テーマ 2 の問題解決のタスクを、これまでの人材確保策からアルバイト店員の人材育成面に焦点をあてたものに変更した。留学生にとっては、身近なテーマであったため

か、比較的考えやすかったようである。どのグループでも活発な話し合いがなされ、多様で興味深いアイデアが多数提案された。

今学期は、明るく熱心な学生が非常に多く、毎回、クラスは活気に溢れていた。そうした学生たちは、班内でもよく協力し、着実に話し合いを重ねて作業を進めていた。一方で、グループ活動にあまり意欲のない学生もおり、その学生と周りの学生たちとの間の摩擦も起きた。考え方や状況の異なる学生たちがそれらを乗り越えて協力し合い、それぞれの学びを深めていけるよう、一層留意して授業を進めていきたい。

＜秋学期＞

(池袋)

今学期の学生は比較的静かな学生が多く、会議がやや小声で行われることも多かったが、それでも意欲的に活動に取り組んでいた。どの学生も向上心が非常に強く、1度目の発表で指摘したことが2回目の発表では大幅に改善されていた。この学期を通じて、各自の口頭能力やビジネスプレゼンテーションのスキルは大きく伸びたと思われる。

しかし課題もある。今学期は4名でスタートしたが、途中で履修辞退者が出たため、1つのグループのメンバーに過度に負担がかかる事態になった。活動途中の辞退者を出さないためにも、授業の進め方を今一度見直すとともに、辞退者が出た場合の対応についてもより良い方法を検討していきたい。

＜ビジネス日本語（文書）＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）佐々木藍子、＜秋学期＞（池袋）開めぐみ、（新座）嶋原耕一

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）17名、秋学期（池袋）7名、（新座）2名

使用教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネスメール・ビジネス文書 適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』（スリーエーネットワーク）

目標

日本でのビジネスに必要な日本語能力（読解、作文）について学び、使えるようになる。

授業の方法

＜春学期＞

(池袋)

本授業では、教材に沿って、ビジネスメール（お知らせ・依頼・照会など）や日報、議事録を実際に作成するという方法で進めた。各回の授業は、教材の構成に従って、「役に立つ表現」を確認し、短文作成などの練習問題を行ってから、実際のタスク問題に移るようにし

た。タスク問題を行う際には、持参したパソコンを使用して作成するようにした。タスク問題を書き終えるごとに解説を行い、次の問題へと進め、授業で扱えなかった問題は、毎回宿題とした。宿題は次の授業よりも前に提出するよう促し、教師が修正すべき箇所に下線のみを付けるというチェックを施した。翌週の授業ではチェックした宿題を返却し、チェックの入った箇所について、どのように修正したらよいか学生が自らあるいはペアで考えることで、ビジネス場面でふさわしい日本語が使えるよう努めた。

<秋学期>

(池袋)

ビジネス場面に応じた適切な形式を用いて簡潔かつ効果的なメールが書けることを目標とし、各課をクラスワークと宿題で構成した。授業は2部構成で行った。前半では宿題のフィードバックを行った。毎回2名の宿題をスクリーンに映し、教師からの講評だけでなく学生同士のコメントも取り入れながら効果的に書けている点を確認すると同時に、工夫の足りない点や問題点の改善方法を全体で確認した。後半では、導入課で使用する語彙・表現を確認しテキストの短文作成練習を行った。その後各自で書き始める前に、その課の文書の構成、必要とされる情報、書く際の注意点、設定状況について全体で確認し、理解ができたうえで書き進めた。毎回1課ずつ導入し、クラス内で問題1, 2を書き、ピアエディティング、全体で見直して問題点を抽出し、改善方法を話し合い書き直すという流れで進めた。問題3は宿題としメールで提出させた。

(新座)

テキストの流れに沿って、課ごとに表現を練習し、その課の流れを確認後タスクをこなしていった。タスクでは、それぞれ持参したパソコンを使って作成させ、教師に提出する前にピアチェックをさせた。ピアチェック後に修正を加えたものを教師が確認し、フィードバックを与えた。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

この授業は、日本での就職を視野に入れた学生が多く履修していた。日本語のレベルは高かったものの、ビジネスメールは書いたことのない学生が多く、コース開始時期はタスク問題のビジネスメールを作成するのに時間がかかっており、またどのような表現、語彙、敬語を使用すればよいのか、とても悩んでいたようである。しかし、真面目にメール作成に取り組むことによって、コース中盤からは要領を得たようで、メールを作成するのも非常にスムーズになっていった。熱心にこつこつと取り組んだ成果であったと考える。熱心な学生が多かったこともあり、宿題の提出率もよく、質問も積極的になされ、クラスで質問の内容を共有し、検討することもできた。ただ、日本語の文法的な間違いや癖になっている間違いなどは、最後まで見受けられた。今後はこれらについてもフォローしていけるよう、工夫してい

きたい。

＜秋学期＞

（池袋）

受講生全員が漢字圏出身であり、語彙・表現練習はスムーズに進んだが、待遇表現に関して受講者間の既知知識に大きな差があり、簡単な待遇表現に苦戦していた受講生がいる一方で、ネイティブ話者にも引けを取らないほどのレベルまで理解している受講者もいた。授業では、語彙・表現練習、ピアエディティングなどの協働ワークおよび各自で行うライティングをバランスよく取り込み、書く作業にのみ活動が固定しないよう努めた。学生の意欲は高く、毎回熱心にノートを取り練習問題にも真剣に取り組んだが、ピアエディティング、宿題のフィードバックなど、話す場面では消極的になる学生が多く、協働作業が効果をあげたとはいいがたい。コース開始後からこの傾向を察知し、話し合いを活性化するための工夫をいろいろしたが、コース終了時までこの状態は改善できなかった。コース中盤からは軌道修正し、学生の静かな学習スタイルを尊重した結果、積極的な数名の活発な学生が自主的に多く発言し、他の静かな学生は聞き役が多いが、書いたものを教師と共有し全体で添削するのに積極的になるという変化があった。コース前半は、場面ごとの文書の形式を学ぶことと読み手を意識した文書作りに焦点を置き、後半は前半の内容を踏まえたうえでより細部にわたり正確性を上げ、場面に応じた簡潔で効果的文書作成ができることを目指したが、形式と読者視点の重要性の理解、常時簡潔な文書作成を目指す点については一定の効果を上げたのではないと思う。一方課題としては、待遇表現の理解の差など、教師が学習者ひとりひとりに向き合い、一对一の個々のフィードバックをする時間が十分に取れなかった。授業構成を再検討し改善していきたいと思う。また、宿題のフィードバックについても、より効果的な方法を探っていきたい。

（新座）

履修者の2名は、非常に優秀で飲み込みが早かったため、学期末には基本的なメールと文書の書き方をマスターしており、期末課題も想定上の出来だった。また、少人数かつ履修者2名の相性がよかったため、終始和やかな雰囲気ですべてを進めることができた。ただ、2名の飲み込みが早かったこともあり、学期の終盤には課題を簡単すぎると感じることもあった。基本的に教科書に沿って進めたが、そのような学生に、どのように+αの課題を出し授業の意義を感じてもらおうかが、今後の課題といえる。

2019 年度 Japanese Language and Japanese Culture A、B、Japanese Language and Japanese Society A、B 授業記録

コースの概要

すべての特別外国人学生を履修対象とし、履修のための日本語レベルは問わない。日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

<Japanese Language and Japanese Culture A>

担当者名:<春学期>嶋原耕一

授業コマ数:週 1 コマ

履修者数:春学期 22 名

使用教材:独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本文化への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語の語彙や表記、慣用表現などについて、その背景にある文化的・歴史的なことから触れながら学んでいく。授業は英語と簡単な日本語で行われる。講義も行うが、学生同士のディスカッションや調査なども頻繁に行うようにした。トピックとして扱ったのは、日本の地理と観光、アニメ、生活習慣、日本の障がい者支援、日本の祭りなどであった。日本の障がい者支援については、ゲストスピーカーを招いて講演を聞いた。学期末には、学期中に扱ったトピックと関連させて学生自身の国や社会と比較するなどのプレゼンテーションを行った。

結果と課題

春学期はアメリカとイギリスの学生が半数以上を占め、アジアからの留学生の履修者が少なかった。そのため「多様な文化を比較する」という観点からは、十分に議論を進めることができなかったことが、課題として残った。ただ履修者は総じて真面目であり、毎週の課題もしっかりと準備して、授業に臨んでくれた。普段の授業では一人一人に意見を聞く時間はなかなか取れないが、課題や最終プレゼンテーションを通して、学生がそれぞれの興味のある観点から授業で提供する内容を深めている様子が見られた。

<Japanese Language and Japanese Culture B>

担当者名:<秋学期>嶋原耕一

授業コマ数:週 1 コマ

履修者数:秋学期 30 名

使用教材:独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本文化への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語の語彙や表記、慣用表現などについて、その背景にある文化的・歴史的なことから触れながら学んでいく。授業は英語と簡単な日本語で行われる。講義も行うが、学生同士のディスカッションや調査なども頻繁に行うようにした。トピックとして扱ったのは、日本の労働、冠婚葬祭、スポーツ、音楽、ジェンダー問題、書道などであった。書道体験はゲストスピーカーを招いて実施した。学期末には、学期中に扱ったトピックと関連させて学生自身の国や社会と比較するなどのプレゼンテーションを行った。

結果と課題

J0 から J7 までの、幅広い日本語レベルの学生が履修した。国籍としても多様であったが、ヨーロッパ系が多く、アジア系は比較的少数だった。特にアメリカ・イギリス・アイルランドという三国の学生が多かった。授業態度は非常にまじめであり、雑談などをするものもなく、講師の話をよく聞いてくれたと思う。またアクティビティやディスカッションへの参加度も、高かったように感じる。期末発表及び期末レポートからも、学生が講義の中で、それぞれ興味を持った点について深堀し、学びを得ていることが感じられた。一点課題として感じたのは、クラスの中の多様性の低さだった。先述の通り、ヨーロッパ系の学生が多かったこともあり、アジア系がマイノリティとなり、アジアの文化や考え方を共有する機会をなかなか設けることができなかった。またアジア系の学生の中には英語を不得手とする者も多く、どのように彼らに授業中発言させるかが、課題だったように思う。多様な背景を持つ学生たちに、自分たちの多様性を発信できる機会を与えられるよう、試行錯誤していきたい。

<Japanese Language and Japanese Society A>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 27 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語および日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。地域方言、社会方言、名前の変遷、ボディランゲージ、日本語の表記体系、日本の教育制度などである。授業は、冒頭にそれぞれのテーマについて 10 問ほどの質問を学生に投げかけ学生間で考えさせた後、講義を行いながら質問の答えを示すという形式で進めていった。授業後半には、各テーマについて日本と学生の出身国との比較についてグループでディスカッションさせ、その結果

を発表させるなどして、学生の積極的な参加を促した。また、体験学習として書道と茶道を取り上げた。書道のクラスでは、日本人学生にも参加してもらい立教生との交流を図った。茶道は、表千家の教授をゲストスピーカーに招き、お点前を披露していただいた後で、希望者には抹茶を点てる機会を与えた。期末レポートは、授業で扱った「地域方言」「名前(ファーストネーム)」「若者言葉」「男性語・女性語」の中から1つのテーマを選択し、インタビュー調査やアンケート調査を実施し、その結果を分析させた。

結果と課題

27名が履修登録したが、2名から履修取りやめの連絡があり、最終的には25名のクラスとなった。20名以上の大きいクラスではあったが、学生達は欠席が少なくいずれのテーマに対しても熱心に取り組んでいたため、クラス運営はしやすかった。期末レポートでは、1つのテーマについて10名から20名ほどの日本人を対象に調査を行っていたが、学生の出身国でも同様の調査を行いその結果を比較するなど、学生独自の分析考察には興味深いものが複数みられた。最終日にコースの振り返りをしたが、書道、茶道の体験学習が楽しかったという意見が多く聞かれた。また、若者言葉や日本人の名前(ファーストネーム)のクラスが面白かったという声もあった。若者言葉も名前も、日常生活の中で学生が耳にするものではあるが、通常の日本語クラスでは取り上げられないテーマである。今後も、これらのように、学生の身近にあり興味を引くテーマを取り入れ、学生のモチベーションを維持しながら日本語および日本社会への理解が深められるコース作りを心掛けたい。

<Japanese Language and Japanese Society B>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期21名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業では、日本語と日本社会に関するテーマを毎回1つずつ扱った。テーマは、人称詞、敬語、色・動物のイメージ、日本の食生活、日本の衣生活、日本の宗教、日本の祝祭日などである。それぞれのテーマについて講義をしたうえで、グループやクラス全体でディスカッションをし、学生の積極的な参加を促した。衣生活のテーマでは着物を着たり、短歌・俳句のテーマでは俳句を作るという体験学習も行った。敬語について講義をした翌週に、グループで日本人学生にインタビューをして敬語に対する意識調査を行い、結果を発表するという活動も取り入れた。さらに、ゲストスピーカーとして神職を招き、神道についての講義をお願いした。期末レポートでは、学生の母語の家族内呼称体系と日本語の体系とを比較させるものか、敬語について日本人を対象に意識調査したものをまとめるものかのいずれかの課題を選択させた。

結果と課題

21名の学生たちはJ1からJ7まで日本語のレベルはさまざまであったが、遅刻欠席が少なく大変真面目に出席していた。授業中もディスカッションや活動に積極的に取り組んでいた。リアクションペーパーから、授業で取り上げたさまざまなテーマの中でも、学生たちが着物を着たり、俳句を作成したりという体験学習のクラスに興味を持って臨んでいたことがうかがえるが、それには今年度は体験学習クラスに日本人学生のボランティアを招き日本人学生との交流を促したことが影響しているように思われる。期末レポートは、家族内呼称についても敬語についても、十分な調査を行い詳しく分析したものが多かった。ただ、学生からは、期末レポートの課題は2つだけではなくバリエーションがあったほうがよかったという声があがった。授業でもさまざまなテーマを取り上げているので、今後は期末レポートの課題も増やしたいと思う。

2019年度 日本語演習 授業記録

コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習1はJ2レベル、演習2はJ3レベル、演習3はJ4及びJ5レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習1では「アニメ／日本の歌」、演習2では「映画／まんが」、演習3では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習1～3の詳細は以下の通りである。

<演習1>

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期7名、秋学期2名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本のアニメや歌を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、日本人の考え方などについての理解を深める。

授業の方法

アニメを通して学校(教育制度、お弁当、掃除、部活動、先輩後輩、受験、防災訓練)、住まい、就職活動、結婚、年中行事などについて学び、自国の文化・社会との相違点や共通点について話し合ったり、発表したりした。日本人学生ボランティアを呼んで、それまで

に学んだ内容について日本人学生の体験談や意見を聞き、翌週その内容について発表するという活動もした。また、日本の歌を聞いてディクテーションをしたり歌ったりする時間も作った。年間行事に関連して、春学期は七夕飾りの作成、秋学期は書き初めを行った。期末はインタビュー・プロジェクトを実施し、それぞれが関心を持つテーマについて知り合いの日本人にインタビューし、その結果をレポートにまとめて口頭で発表させた。主な使用言語は J2 レベルの簡単な日本語とし、必要に応じて英語も使用した。

結果と課題

＜春学期＞

今年度から授業時間が 10 分長くなったので、クラスでは中間の発表や期末の発表以外に、普段から調べたことや自分の文化について皆の前で発表する機会を多く設けた。さまざまな文化背景をもつ学生がいたこともあり、お互いに関心を持って発表を聞き、質疑応答も活発に行われた。また、今学期は数回、授業の最後にリアクションペーパーを書く時間をとった。普段は主に日本語を使用しているが、リアクションペーパーは英語で書く学生も多かった。英語で書かれたものを読むと、初級の日本語で書かれた文章からは知ることができない、学生たちのより深い考えを知ることができた。日本語で書くことにも英語で書くことにもそれぞれ利点があるので、今後もバランスを考えていきたい。

＜秋学期＞

2 名登録したが、1 名は日本語のクラスも履修をやめて、実際に受講したのは 1 名となった。これまでは日本の文化と母国の文化の比較をする際も、クラスメートの文化背景についてお互いに聞く活動ができたが、今回は学生が 1 名だったため、そのような活動はできなかった。普段は日本人学生を招くビジターセッションも学期に一度だけだが、今回は教師以外の日本人の意見を聞く機会を持つために 2 度行うなど工夫した。1 対 1 で 100 分の授業となるので、学期のはじめは心配もあったが、熱心な学生だったこともあり、学期を通して日本文化や社会への理解も深まり、良い学びができたようである。ただし、やはりもう少し学生がいた方が、学生同士の日本語でのやり取りもできるため、学期のはじめにこのクラスの内容について知らせ、多くの学生に受講してもらうことが課題である。

＜演習 2＞

担当者名：＜春学期＞金庭久美子 ＜秋学期＞浅野有里

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 7 名、秋学期 12 名

使用教材：独自教材

目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの映画やマン

ガを取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

<春学期>

「日本の衣食住」をテーマとし、「和食」「弁当」、「制服」、「日本の家」等のトピックを取り上げた。それぞれの内容に関わる日本のドラマや映画を部分的に視聴し、気づいたことを話し合ったり、自国の状況を紹介しあって比較を行ったりした。また、学期の途中には、自分たちの国のドラマや映画を紹介し、そこから読み取れる文化的な特徴や日本文化との違いを分析するプレゼンテーションも行った。学期末には授業で学習したテーマの中で気になっていることを一つ取り上げ、自分の国と日本との違いや、その背景についてまとめることをレポート課題として提出させた。またレポート提出時には、自分のまとめた内容についてクラスメイトとディスカッションを行った。

<秋学期>

「日本の衣食住」をテーマとして、関連する日本のドラマ、映画、まんが、映像を取り入れながら授業を進めた。映像等を視聴する前には、テーマについて既存の知識を全体で共有し、視聴後は気が付いたこと、自国との違い等について話し合いを行った。学期中盤には、自国の映像を紹介しながら、日本文化や日本人の生活と比較するプレゼンテーションを行い、学期末には、クラスで取り上げたテーマから各自が一つ選び、自国と日本との違いやその背景についてレポートにまとめて提出してもらった。

結果と課題

<春学期>

前半は体調不良などで、欠席する学生もあったが、後半はみな参加し、授業態度は非常によかった。映像使用の際は、ワークシートを与え、日本の文化的な特徴にポイントを絞って見た結果、その後のディスカッションにもつなげることができた。ディスカッションは積極的な学生が多く、毎回活発に意見交換が行われた。その際、日本語で伝えることが難しい場合は英語の使用を認めたが、どの学生も日本語への意欲が非常に高く、クラス全員がまずは日本語で話そうとする姿勢が見られた。学期の中盤に行われたプレゼンテーションでは自国らしさを表す映像を皆に紹介する授業を行ったが、お互いの内容に積極的にコメントする様子も見られ、非常によかった。最終レポートでは授業内容に結び付け、「衣」「食」「住」に関するテーマを選び日本と自国の比較を各自の視点で述べることができたが、日本語でのレポートは2名のみであった。日本語の使用をもっと促すべきだったと感じた。

<秋学期>

学期中の宿題（主にテーマ導入前の既有知識を共有するための Q&A）は、ほぼ 100%の学生が毎回日本語で準備をしてきていた。毎回詳細まで書いている学生もあり、学習意欲の高さがうかがえた。日本語の添削はしたものの、日本語のミスは評価には影響しないと断っておいたため、学生もそれぞれの考えを遠慮することなく表現することができていたと思う。ただし、学生の宿題から多く出てきた表現や、映像教材に出てきたキーワードなどは適宜板書し、全体で日本語の確認を行った。

中盤の発表や学期末のレポートにも大変意欲的に取り組んでおり、各自の考察がよく表現されていた。しかし、映像を部分的に用いた発表では、各自が言わんとする点がうまく映像上で見せられず、ややわかりにくい発表が多くなってしまった。映像の扱い方は難しいが、発表後にもうまくフォローできる方法を検討したい。

また授業が進むにつれ、進め方も定着してきが、ややマンネリを感じている学生もいたようだった。母国との相違点について聞くときに、単に「あなたの国ではどうですか」と質問するのではなく、質問のバリエーションを増やして飽きさせない方法を検討していきたい。

<演習 3 / CS 日本語 4 - 5 B (異)>

担当者名：春学期：神元愛美子 秋学期：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名、秋学期 9 名

使用教材：独自教材

目標

プレイスメントテストで J4、J5 レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

<春学期>

クラスでは短編小説と川柳を扱った。小説は『蜘蛛の糸』、『鼻』（芥川龍之介）と『キッチン』（吉本ばなな）を読んだ。授業はゼミ形式で進め、担当者が前回の内容の復習と担当箇所でのレビューを行い、ディスカッションポイントを提示した。それに沿ってクラス全体で意見交換を行った。更に『キッチン』は映画を鑑賞し、小説との違いや映画の特徴について話合ったうえで、最後に『キッチン』について各自がテーマを設定し、プレゼンテーションを行った。

川柳は「サラリーマン川柳」等のサイトから各自が探したものか、あるいは自作した川柳を発表する活動を行った。

<秋学期>

クラスでは短編小説、詩、俳句、川柳を扱った。小説は『むじな』、『雪女』（小泉八雲）、『注文の多い料理店』（宮沢賢治）、『デューク』（江國香織）、『手袋を買いに』（新見南吉）を読んだ。詩は、谷川俊太郎と相田みつをの作品を扱った。作品ごとに担当者を決め、毎回一名がレビューを行い、その後、担当者が提示したディスカッションポイントをもとに、クラス全体で意見交換をした。学期末には、ビブリオバトルで本を紹介してもらい、それに関してレポートを課した。そのほか、「お〜い、お茶」のサイトから各自が気に入った作品を紹介する活動や、自身で俳句・川柳を作成し、発表する活動も実施した。

結果と課題

<春学期>

文学に興味がある学生を中心に大変意欲的に授業に参加していた。授業前半は教員がリードして進める予定だったが、小説の読み方を理解しており、ディスカッションをリードすることにも慣れた学生が多かったため、かなり早い段階から学生主体で授業を進めることができた。ディスカッション担当者は毎回のディスカッションを十分に準備し、ディスカッションポイントもよく考えていた。学生からは「各国の学生と話し合うことで自分の価値観もどんどん変化していった」という声を聞くことができた。

授業中盤で読んだ『キッチン』は他の多読教材と違い、日本語のレベルが上がり、苦労したようである。しかし、学生たちはしっかりと準備し授業に臨んでいた。また授業では扱わない『キッチン』後半の話も自主的に読んでおり、ディスカッションでも時折それを読んでいることが前提で話が進んでいた。「日本の文学を日本語で読めるようになった」「適切な小説の読み方ができるようになった」と話しており、読解力と自信がついたようである。

一方で、このクラスがチャレンジレベルの学生は完璧でなければいけないとプレッシャーに感じていたようだった。個別フォローもきちんとしていきたい。

<秋学期>

日本の漫画やアニメは好きだか、文学作品をあまり読んだことがないという学生が多かった。今学期は、日本語力にレベル差があるクラスであったため、グループディスカッションでは、多少英語を使用してもよいことにした。また、難易度が高い表現に関しては、スライドに語彙リストを入れたり、簡単な表現を交えて発表したりと、学生達も工夫をしながらレビューをしていた点がよかった。そのため、文学作品を負担なく、じっくり味わうという目標が達成されたように思う。本科目は学生主体で展開されるが、全体的に大人しい学生が多かったこともあり、意見交換の際、積極性に欠けたことは残念であった。今後も、学生間で活発なやりとりをするためには、どのような工夫ができるのか考えていきたい。

2019 年度 総合日本語 4～6 授業記録

コースの概要

J4～J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

<総合日本語 4-6A>

担当者名：嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 16 名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解を軸に、内容確認、グループ・全体ディスカッション、個人・グループ発表を行った。扱ったテーマは、「観光地」「祭り」「江戸しぐさ」の 3 つである。読解教材は、内容は同じであるが、学生の各レベルに合わせたものを準備し、授業外で読んでくることを宿題とした。また、読解で扱ったテーマに関する作文の宿題を 2 回出した。毎回の授業には TA が参加し、ディスカッション、作文のフィードバック、学生のレベル差への対応など、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

春学期の履修者は J5 と J6 の学生だけで構成されており、J4 は一人もいなかった。そのためレベル差が比較的少ないクラスとなった。そのため、本来授業の中で強調する「相手に合わせて表現を変える」練習はあまりフォーカスせず、敬語や専門用語の説明に焦点をあてた。特に専門用語の説明は、自国の文化や歴史の説明には欠かせないため、「いい練習になった」という感想が多かった。またどの学生も非常に勤勉であり、チームワークもよかったため、まとまりのある学生主体のクラス運営ができたと思う。

<総合日本語 4-6B>

担当者名：谷啓子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

使用教材：独自教材

授業の方法

VTR「クローズアップ現代」（NHK総合）を素材に、「①若者の消費」「②未婚化」「③育メン」の3テーマから現代日本社会を考えた。各テーマの流れは、以下の通りである。

VTRに出てくる語彙リストを配布、読みの確認。意味調べは次回までの宿題⇒テーマに関わるウォームアップワーク⇒語彙シートの確認とフォロー⇒各自内容をメモしながらVTR視聴⇒メモした内容をグループでシェア（VTR前後半で2回繰り返す。メモは何語でも可とし、クラスメイトと日本語でシェアする前に少し整理する時間をとった）⇒TAがまとめたメモをOHCで見せて説明⇒その後全体の概要を簡潔にまとめたものを配布、各自語彙や表現を確認しながら読み、再視聴した。

VTR再視聴と概要の読解が終わると、グループディスカッションである。テーマに合ったトピックを与え、学んだ語彙を使って4人程度のグループで話し合う。グループディスカッションは各グループから出た意見を代表がまとめて発表してもらった。各テーマの終わりには学習した表現を復習するためのレベル別復習プリントを配布した。

各テーマにはまとめの課題があり、テーマ①については作文（だ・である体を指示。字数はレベル別）、テーマ②についてはミニ発表（図表を使い、図表の表現を用いて説明する）を行った。最終課題として、扱った3テーマから最も興味を持ったものを選び、各自視点を絞って口頭プレゼンテーションを行った。

結果と課題

全体に皆真面目に取り組んだ。ほぼJ5とレベルも揃っており、人数も程よいサイズで全体にとってもスムーズであった。提出物もほぼ〆切を守れていた。

今期は特に新しいテーマに入る前のウォームアップワークや、途中で入れたインタビューワークが大変盛り上がった。そのための準備を各自がきちんとしてきたこと、積極的で明るいメンバーが多かったことが大きいと思われる。ディスカッション時はTAと教師がグループを回って表現などをフォローしたが、グループ発表の際にそれらをすぐ試してみる姿が見られた。

最終発表はそれぞれの視点が光る興味深いものが揃った。学んだ表現を意識して使えている人もいてトピックで学ぶ良さを感じた。一方で内容をがんばりすぎたのか語彙表現はあまり進展していない人もいたのが課題である。なお、パワーポイントは必須としなかったが、使うメンバーが多かった。準備に1回しかとることができなかったのでパワーポイントの文字はチェックできなかったが文字の小さいものがあったので今後は事前に注意したい。

<総合日本語 4-6C>

担当者名：嶋原耕一

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期9名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解教材を軸に、内容確認、ディスカッション、発表、作文を行った。扱ったテーマは、「若者」と「日本の外国人」である。読解教材は、J4、J5、J6それぞれのレベルに合ったものを用意し、語彙リストを添付した。作文は、読み物のテーマに沿ったものを宿題として2回出した。また、毎回の授業にはTAが参加し、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

J4 から J6 まで全てのレベルの学生がおり、各レベルの人数が比較的均等なクラスだった。9名と少人数であったため、J4 へのフォローも十分に行うことができたと思う。また、少人数かつ受講生同士の相性もよかったようで、毎週和気あいあいと授業を進めることができた。その分、学生の発表やディスカッションでの話し言葉には、上達が見られたように感じられた。漢字圏と非漢字圏の差もそこまで見られなかったこと、お互いから学び合う姿勢が見られたことから、教師としても非常に運営しやすかった。ただ、学期を通じて課題だったのが、遅刻者の多さだった。毎週のように遅刻してくる学生が複数おり、どうしてもその対応に時間を取られてしまった。特に朝寒くなる秋学期は、遅刻してしまう気持ちもわかるが、もう少し全体に注意を促すことができればよかったように思う。

<総合日本語 4-6D>

担当者名：谷啓子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 20 名

使用教材：独自教材

授業の方法

日本の四季と年中行事を題材に、関連する語彙や表現を学んだ。その中で担当した語彙を調べてシートにまとめ、短い発表を行う、グループで話し合う、作文を書く等、様々なスキルを使うことで運用力を伸ばすよう計画した。映像素材としては、NHK の DVD 「しばわんこ和の心」を部分的に使用した。

初日オリエンテーションでは、この授業に必要な日本の暦や時代区分、季節について確認し、資料を配布。比較のために履修者の出身地の季節についてシートに記入してもらった。その後は1課「冬」、2課「春」、3課「夏・秋」の3課を順に進めた。

各課（季節）は2～4回から成り、「ことば調べ」の読み確認→担当のことばを調べる（宿題）→発表→VTRで内容確認→グループディスカッション（その場でフィードバック）→小課題（作文または発表）→まとめプリント、の流れである。

「ことば調べ」は、テーマに関する語彙（例：鳥居）を1語担当し、シートに簡潔にまとめ、数分で発表する。その際、画像などの視覚資料を見つけた場合はOHCで見せながらクラ

スメイトに説明した。その後、その季節に関する DVD を視聴、語彙を映像とともに確認し、理解を深める。

グループディスカッションは 4～5 人の小グループで行い、学生の司会のもと、DVD についての感想を述べたり、出身地ではどうかを紹介したりする。そこに教師またはティーチングアシスタント (TA) がつき、ホワイトボードに適宜メモをとってフィードバックを行った。フィードバックは教師や TA から一方的にするのではなく、よりよい表現をメンバーで考えてもらうよう意識した。

まとめプリントはレベル別の復習プリントである。その課の語彙の読み、コロケーション、学んだ表現を使つての短作文などである。課が終わったタイミングで配布し、これまでは宿題とすることが多かったが、今期より 100 分授業となったため、時間があるときはまとめ作業として授業内に組み込み、仕上がらなかった場合は次回までに提出とした。

第 13・14 回は最終課題として今期扱った内容に関するテーマで個人またはグループプレゼンテーションを行った。

結果と課題

履修者数が 20 名と多かったため、グループディスカッションで発話時間が十分とれるようにスケジュールを調整した。全体に真面目で、準備状況、提出物等のそろいも良く、スムーズに進んだ。一部欠席・遅刻するメンバーが決まっていたのが残念だった。

冬 (年末年始)、春 (桃の節句、端午の節句)、夏秋 (お盆、祭り) の 3 課について上記の方法で学び、各課において関連する語彙表現を繰り返し使うことで各話題については運用力がついたと思われる。また、これら年中行事から日本文化の一端を知る機会になったようである。「盆踊りはどこに行けば参加できるか?」「留学生でもお神輿を担げる祭りは?」等問い合わせがあった。

課題としては、J4・6 の異なるレベルのメンバーから成るクラスなので、発表の際などに伝わっているかどうか、分かりやすいかどうか、を意識できるとさらに良いと思う。例えば「ことば発表」では写真がある時は先に見せてイメージを共有する、レジュメにはことばのリストをつけたり、途中でフォローする、等である。できている人はできており、それを見習って途中からできるようになる人もいるが、各発表の準備中にも全体に声かけするようにすると意識する人が増えるのではないだろうか。クラスメイトの発表に対して質問が少な目なのが気になったが、これも十分に理解できれば自ずと質問が出てくるのではないかと思われる。

2019 年度 漢字 授業記録

コースの概要

どのレベルの学生でも履修することができるクラスである。学生は自分でレベルを選択し、学期中 2 回ある立教漢字検定に向けて、その範囲の漢字語彙を学習する。

担当者名：＜春学期＞嶋原耕一、＜秋学期＞谷啓子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 33 名 秋学期 43 名

使用教材：独自教材、立教漢字検定テキスト

目標

履修のための日本語レベルは問わず、全レベルの学生が履修することができる。漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字の語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

授業の方法

立教漢字検定のテキストを用いて、各学生が決めたレベル、分野に沿って学習を行う。2019 年度は初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とする。授業ではテキストに沿ったワークシートを中心に、個別学習とピアラーニングを行う。また、毎回、自身の受験レベルの範囲にある漢字を使った漢字語を教室外で見つけて発表する「漢字発見」の活動と、クイズを行う。

結果と課題

＜春学期＞

春学期は履修者が 33 名となり、TA がクラスにつくこととなった。J0 から J8 まで様々なレベルの学生がいたが、TA もいたことにより、J0 に対するケアは十分にできたのではないかと考えている。ただ、特に中級の学生で、最初のレベル設定を高くしすぎた学生は、テキストとクイズの難しさに戸惑う者もいた。あまりに知っている漢字や熟語がなさすぎ、途中でやる気をなくしてしまう学生もいたので、初回授業でのレベル決定の誘導を、工夫する必要があると感じた。ただ大半の学生は、淡々と学習を続け、立教漢字検定に合格する者も多かった。一人では漢字学習を進めることが難しいと感じる学生も、このようなクラスがあるからこそ、努力できるのではないかと思う。

＜秋学期＞

秋学期は計 43 名の履修があり、TA がついでに運営となった。立教漢字検定レベルは初級 14、中級 18、上級 11 の割合である。初級には J0、J1 の学生が複数含まれる。全 20 レベルのため、配布物やクイズ返却がスムーズにいくようネームカードを活用する等して工夫した。

例年のことではあるが、最初の検定のレベル設定で背伸びをしてしまい、申込みをしてからワークシートやテキストの難しさに変更を希望する学生が数人いた。決定にあたっては前年度の合格率を示したり、テキストのサンプルを閲覧できるようにしているが、検定チャンスは 2 回あるので、今後も親しみのある漢字が多い級からのスタートを勧めたい。なお、

2 回目のレベル決めでは、中級では範囲の漢字数が最も少ないレベルに申込みが集まった。また、ピアラーニングを取り入れているため、中上級とも後半は友達と同じレベルを申し込む傾向にあった。

課ごとのクイズでは、J0~3 あたりの学生はひらがなの表記ミスで点につながらないことが多かったが、後半はひらがな学習が進むためか、ミスが減った。漢字テキストは全てに英訳がついているわけではないので、ボリューム的にも慣れるまでは負担感が大きいと思われる。

最後のアクティビティは好きな漢字、または自分の名前に漢字をあてて 1 文字選び、色紙に筆ペンで書き、好みに飾り付けする活動を行った。検定に合格するともらえる賞状とともに漢字クラスの良い思い出となったようである。

2019 年度 Business Japanese I/Business Japanese A 授業記録

コースの概要

Business Japanese I/A は、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。Business Japanese I は J4, J5 レベル、Business Japanese A は J6, J7 レベルの学生を対象とする。

<Business Japanese I>

担当者名：数野恵理、富倉教子、平山紫帆、沢野美由紀、山内薫

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

この科目は、将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの 3 本柱で展開した。

本授業の主な流れは、①朝のロールプレイ、②オリジナル教材を用いたキープレーズの導

入ならびに会話練習、③帰りのロールプレイである。①と③では、出勤・退勤時に同僚と交わされる日常会話を練習した。②では、商談、会議、電話応対等のビジネス場面で適切に対応できるよう、導入と練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやりとりを想定した応用練習を行った。さらに、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴解練習も行った。

学期中 6 回実施したゲストセッションでは、コース前半は顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品・新戦略の提案を行った。セッションは録画をし、後日フィードバックを行った。

結果と課題

履修者間にレベル差があったり、体調不良で活動に十分に参加できない学生がいたり、複数の担当講師から様々なアドバイスを受けることに抵抗感を持つ学生がいたりするなど、今学期はクラス運営が難しいと思うことが度々あった。しかし、その中でも、学生たちは最後まで熱心に取り組み、着実にビジネス場面で通用する日本語力を身につけていった。

BJI は J4 と J5 の学習者を対象としたクラスで、J4 と J5 それぞれのレベルにも幅があるため、今年度も履修者の日本語レベルにはかなり差があった。特に J4 の中でも初級を終えたばかりで来日した学生にはクラスで学習する日本語もかなり難しかったと思われるが、一生懸命理解しよう、日本語を使おうとする熱意と地道な努力が窺え、学期が進むにつれて日本語力が向上していった。普段の授業ではわからないところなどを 3 人で協力しあっている様子は見られたが、レベル差の影響もあってか、ゲストセッションのための予行練習など、互いの内容を共有する機会には、相手へのコメントやアドバイスが例年に比べてあまり出てこないのが残念だった。しかし、クラスメートの準備しているスライドの内容を参考に自分自身の内容を改善しようとする様子や、経営学研究科で参加したインターンシップの経験をクラス活動に生かそうとする姿勢、最新の情報を用いて根拠を示しながら説得力を持った提案をしようとする姿勢が窺えた。最終発表では、このクラスで学んだストラテジーや言語表現などを生かし、それぞれが個性を発揮し、内容のしっかりした発表ができた。

聴解についても、学期当初は話の大意をなかなか理解できない学生もいたが、練習を重ねるうちに少し長めの込み入った話も理解できるようになっていった。

今回、特に難しさを感じたのはフィードバックについてである。学期の後半はゲストセッションでの発表に向けて、各自がスライドやスクリプトを準備し、毎回の授業で担当者がフィードバックしていくが、複数の担当講師から異なるフィードバックを受けたと抵抗感を持つ学生がいた。フィードバックした内容はなるべく講師間で共有するようにしていたが、すべてを把握するのは難しい。チームティーチングでのフィードバックの方法については今後の課題としたい。

<Business Japanese A>

担当者名：金庭久美子，富倉教子，平山紫帆，沢野美由紀，山内薫

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動，そしてプロジェクトの発表場面にもなる，立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの 3 本柱で展開した。

本授業では，ゲストセッションに向けて課題を設定し，その課題が達成できるようにさまざまな表現を導入し，実際の現場で使えるようにしている。本年度の課題は「新製品の売り込み」「新製品販売状況報告」「取引先への謝罪と説明」「問題の対応策の検討（社内会議）」「自社説明（プレス）」等である。

結果と課題

今回の履修者 3 名は意欲的かつ穏やかな学生たちで、お互いに尊重し、切磋琢磨しながら協働的に課題に取り組むことができた。学生からはロールプレイが非常に役に立ったという感想があったが、ロールプレイの練習では回を重ねることにより自然な会話となった。会話を展開すること、相手への配慮を表現すること、場に適切なビジネス表現を用いることなどを学び、上達していく様子がうかがえた。ゲストセッションに向けた一つ一つのタスクも、各自の個性を十分に生かしながら、積極的に取り組んでいた。ゲストからも上達していく様子が実感できたとの感想を頂戴した。ビジネス用語やビジネス場面での表現についての知識も豊富になったが、漢字の読みにはまだ課題も残っている。次年度は、学習した語彙や意味、訳などを記入できるシートを準備するなどして、ビジネスに必要な漢語表現の練習を取り入れていくとよいと思われる。「雰囲気がいいクラス」とはありふれた表現だが、それは学生が互いに、またクラスに関わる教師を信頼することなしには生まれないものであり、その中で臆することなく質問したり、表現したりできることこそ語学には大切であると、このクラスを担当し実感した。

2019 年度 異文化コミュニケーション研究科 TESOL-J プログラム 授業記録

コースの概要

異文化コミュニケーション研究科 TESOL-J プログラムに在籍する学生向けに、2016 年度に新規に立ち上げた科目である。日本教育センターの担当科目では、日本の教育機関で英語教員として働くことを目指す学生が、勤務後に必要な日本語会話や日本のマナーを学べるようにデザインした。

<Japanese in Educational Settings: Classroom and Kyoumuka>

担当者名：藤田恵

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 1 名

使用教材：独自教材

目標

日本の教育機関で働く英語教員が教室と教務課等で使用する日本語を学び、実際に使えるようになる。

授業の方法

授業は、RP を中心に行った。学期前半は「教室の日本語」として授業活動や授業準備に必要な会話、後半は「教務課の日本語」として教員が関わる教務事務に必要な会話を取り上げた。毎回の授業の流れは下のとおりである。

- 1) 宿題確認、語彙クイズ（漢字、文作成）
- 2) シャドーイング
- 3) RP（1 回目）、FB
- 4) 語彙、表現導入
- 5) RP（2 回目）、FB

結果と課題

履修学生は、以前に他の日本語クラスを履修しており、J5-6 程度の日本語能力を持っていた。この学生は非漢字圏の出身であり、漢字の習得に意欲的であったことから、教員となったときに教務と事務で目にする漢字語を積極的に教材に取り入れるようにし、クイズでも漢字問題を出題するようにした。その結果、教務と事務で用いられる漢字語の習得には伸びが見られた。RP では、中級レベルの復習をしながら、上級レベルへの橋渡しを意識し、場面の設定と表現の練習を行った。授業では新たな表現を多く導入したが、学期中に 2 回行った RP テストでは、以前学習した初級後半の表現を多用し、新たに学んだ表現を使用す

る回数は少なかった。学生と教員の一对一の授業の中で、練習時間は多く取れたはずだが、学生の定着に結びつく指導ができなかったことは非常に悔やまれる。また、現在学生生活を送る中では出会うことのない、教育機関で働く時に使用する日本語の場面のイメージが、学生自身に伝わらないことがあった。このクラスの目標と強く関わる部分でもあるため、RPの場面設定と状況の説明を丁寧に行い、学生の納得を得てから活動に移れるように指導方法を検討していきたい。

2019 年度 大学生の日本語 / 総合日本語 6-8 授業記録

コースの概要

「大学生の日本語」は正規学部生の1年生が大学における学習を日本語で行えるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。「総合日本語 6-8」として特別外国人学生や大学院生も履修可能であり、様々な背景をもつ学生が、共に学ぶ機会を提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<大学生の日本語 A6, 7, 8> <総合日本語 6-8A>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。春学期は「ニュースの紹介と用語の定義（引用）」、「グラフの説明」、「調査の引用」、「アンケート調査」という4つのテーマで、それぞれ必要な機能表現を導入・練習し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを行った。各回の主な目標となる機能表現が含まれるスライドの1枚分についてはスクリプトも提出させた。また、ディスカッションのための質問も考えてこさせ、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。テーマ1～3は、まずスライドを作ってグループの中で発表の練習をし、学生間評価をさせた。また教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて再度グループの中で発表し、代表の学生が皆の前で発表をした。最終課題は全員が皆の前で発表した。

使用教材

独自教材

[社会・経営]

担当者名：長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名

結果と課題

発表自体初めての学習者がほとんどを占めたが、課題やクイズを繰り返すことで、発表の基本を身に着けることができた。パワーポイントの見やすさ、発表内容の論理展開などに気をつけながら、基本の表現を使って発表ができるようになった。最終発表では、まだ完全ではないものの、聞き手を意識しながら発表をしていた。しかし、グラフの説明では、順を追って分かりやすく説明することがまだ難しいようだ。次回は、グラフなど複雑な内容の説明をさらに練習し、声の抑揚や間の取り方などの練習も段階的に入れ、聞き手に分かりやすい発表を目指したい。

[法学・異文化]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 22 名

結果と課題

人数の多いクラスであったが、熱心な学生が多く、自主的かつ積極的に活動に取り組んでいた。受講生は非常に明るく協力的であったので、一学期間を通して、非常にいい雰囲気です授業運営することができた。また、受講生は全体的に学習意欲が非常に高く、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていった。そのため、ほとんどの学生が良好な成績を修めた。秋学期も引き続き学生の学習意欲の維持に努めたい。

大半の学生が日本語での発表、パワーポイントの作成をすでに経験していたため、発表に慣れているようであった。発表の際に、スクリーンやパソコンを見て発表するのではなく、聴衆の方を見ながら話すようにと指導してきたが、まだアイコンタクトが不十分だった学生が数名いた。また、スライド作成では、デザインに凝るあまり、文字が小さかったり、文字の量が多かったりで、スライドの形式や体裁にまで気を配ることを忘れがちになっている学生もいた。聴衆を意識した話し方やスライドの作り方については引き続き秋学期の課題としたい。

また、学生一人一人にフィードバックの時間が十分に取れなかったことも今後の課題である。このクラスは他学部と同時進行でスケジュールが組まれているため、スケジュールを動かすことはできないが、別の日に時間を設けてフィードバックすることは可能かもしれない。人数の多いクラスでどうすれば授業内で効果的なフィードバックができるかを検討したい。

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 24 名

結果と課題

今年度は熱心に取り組む学生とそうでない学生にかなり差があった。真面目に課題に取り組んだ学生は確実に力をつけていった。特に今年度からテーマ 1～3 の発表スライドは個別にフィードバックする時間も持ち、修正版を作成させることができたため、定着が図れた。一方で、学習動機が低かったり、タイムマネジメントができなかったりして、課題をやらずに出席する学生もいた。最終的にはどうにか課題をこなしたものの、しっかり取り組めばもっと力が伸ばせたはずなので残念である。秋学期も継続するクラスであるため、学習動機を高められるよう工夫したい。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 11 名

結果と課題

日本語で正式に発表をするのは初めてという学生が多かったが、学生は概ね課題に前向きに取り組んでいた。レベルや到達度に多少の差は見られたものの、目標とする、定義、図表、アンケート結果を伝えるためのプレゼンテーションの基本のスキルを習得することができたのではないと思う。昨年にはなかった各テーマのポイントとなるスライドにスクリプトをつけさせたこと、また一つのテーマについて発表を 2 回行ったことで、学生の学びは深まったと思う。

課題としては、引用や参考とする資料がどうしてもインターネットで手軽に得られるものになりがちであったことが挙げられる。図書館で対応可能なようなので、簡単な情報検索講習会を授業の一部で組み込んでも良いのではと思った。秋学期への課題としては考察を独自の視点で、論理的に展開できるようになること、またより聴衆を意識して話せるようになることであると思う。個人的な課題としては 1 稿目スライドの添削作業を効率よく、かつ分かりやすくすること、また参考文献の指導基準が曖昧にならないようすることである。

[心理・福祉]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名

結果と課題

7 人とこじんまりしたクラスではあったが、学生ごとに興味の対象が異なり、最終発表のテーマはかなり個性のあるものだった。1 限の[観光・映像]クラス同様、全員発表の基礎的なスキルは習得できたのではないかと思う。スクリプトを書いたことや再提出により学びが深まったことも[観光・映像]クラスと同様である。

運営上の課題として、出席の状況や提出の遅れが気になる学生がいたことが挙げられる。自分のレベルで努力し、力をつけていかないと大学生活を乗り切ることができないと話をしたが、秋学期は自主的に取り組んでほしい。コースの課題としてはやはり考察部分を論理的に展開していくこと、また信頼に足る適切な資料を使うことである。加えて、このクラスは学生数が多くなかったので、個々の発表に取れる時間が比較的多くあったが、ディスカッションがあまり深まらなかった。秋学期には発表者、聞き手双方がディスカッションを活発にできる力も身につけていけるといいと思う。

[経済・理学]

「大学生の日本語 A-8」は「J8 日本の文化・社会 A」と併置のため、「J8 日本の文化・社会 A」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 A-7」は「J7 聴解会話」と併置のため、「J7 聴解会話」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 A-6」は「J6 聴解会話」と併置のため、「J6 聴解会話」部分を参照のこと。

[GLAP]

「大学生の日本語 A」は「Japanese Language and Japanese Society A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 B6, 7, 8> <総合日本語 6-8B>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レジュメ、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

『上級日本語教科書 文化へのまなざし』のうち「国際共通語」、「フリーターと仕事」に関する 2 つのテーマを扱った。資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理

解を行った。資料 2 は A と B から各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクション・ペーパーとレポートの書き方を指導し、リアクション・ペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

[社会・経営]

担当者名：＜春学期＞数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 春学期 11 名

結果と課題

今学期は「大学生の日本語 B」として履修する学生 7 名と「総合日本語 6・8B」として履修する特別外国人学生 4 名が履修した。昨年度まではレポートの書き方を導入・練習した翌週にはレポートの初稿を提出するというスケジュールだったため、レポート作成までに時間的な余裕がなく、この段階でつまづいてしまう学生もいた。また、大学の授業では授業の最後にリアクション・ペーパーを書くことが多いが、何を書いてよいかわからないという学生もいるようであった。そこで、今年度はまずクラスで読んだ資料についてリアクション・ペーパーを書き、それをレポートに発展させ、翌々週までに初稿を提出するというようにした。資料の理解などに問題があった場合はリアクション・ペーパーを書いた時点でフィードバックができたので、レポートは初稿から内容の質がよくなったと思われる。

今学期もレポートなど課題の提出が追いつかず、未提出の課題が溜まってしまう学生もいたが、必修科目として履修している学部 1 年生には学期を通して声をかけ、相談に乗ったところ、最終的には課題を仕上げることもできた。この一学期で大学での学習スタイルやレポートの書き方にも慣れたと思うので、来学期はタイムマネジメントもできるようになってもらいたい。秋学期はまだレポートを書いたことのない特別外国人留学生と、春から継続して学ぶ学部 1 年生と一緒に学ぶため、新たに加わる学生がついてこられるようにすると同時に、継続の学部生が退屈しないよう、工夫していきたい。

[法学・異文化]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 21 名

結果と課題

このクラスは、欠席や遅刻が非常に少なく、宿題や課題が全員期限内に提出されるなど、そういう意味では手のかからないクラスだった。授業中のディスカッションやペアワークも熱心に行われた。全体的に仲が良く誰が誰とグループになってもうまく活動ができていた。一方、レジュメやレポートの作成では、テーマ1の時は多くの課題があり、個別の指導が必要であった。しかしテーマ2の際には、テーマ1での経験を活かし、大幅に改善された成果物を出してくるものもいた。引きつづき指導が必要な部分はあったが、テーマ1の時と比べると指導部分は着実に減っていった。しかしながら、学期も終盤になると、遅刻や課題の未提出が出る学生が若干名いたことが懸念される。大学生活も初めは緊張感をもって臨んでいたものが、いい意味でも悪い意味でも慣れが出てきて、気のゆるみにつながっている。常に目標を持って先を見て進んでいけるよう指導していく必要がある。

[文学]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 22 名

結果と課題

最初はお互いのことをよく知らない者同士の新入生という印象が強かったが、回を重ねるたびに、仲良くなっていき時にはうるさすぎるくらい母語での私語が飛び交うこともあった。それが功を奏した部分もあり、グループでの話し合いやペアワークは活発に行われた。グループで話したことをまとめて発表する役にも積極的に手が上がり、ディスカッションが授業終了間近まで続き白熱することもあった。一方、レジュメ作成やレポート作成に至るまでの過程では、文献を引用して書くことに慣れない学生も多く、1回目のテーマの時には、かなり指導が必要だったが、2回目のテーマの際には、1回目の経験をふまえ、より優れた成果物を出す学生も出てきた。しかし、日本語の正確さという面では書き言葉ことばと話し言葉が混在したり、文献の引用と自分の意見とが混在する学生もまだいるなど、課題は多く残っている。提出期限までに出すべきものが出せない学生もいるため、計画的に学習を進めていく力が付けられるよう引き続き指導が必要である。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名

結果と課題

今学期は J6 の学生が半数を占めたが、全体的に熱心にペアワークなどのクラス活動に参加し、日本語力の問題はあまりなかった。また、ほとんどの学生がレポートとレジュメの作成や各課題に熱心に取り組んだ。レジュメ作成においては、資料のポイントを理解し、的確にまとめられるようになった学生がいる一方で、資料の文をそのまま書き抜き、文中の指示語の内容が不明で、読み手に意味が正しく伝わらない場合も見られた。来学期は要約が適切にできるよう、文脈を意識しつつ簡潔にまとめる練習を多く取り入れたい。レポート作成においては、全体の構成、引用・参考の方法、参考文献リストの作成、図表の表現を中心に授業を進めた。図表説明では、課題を通して正確な表現を習得し、概ねレポート執筆に活かせるようになったが、引用表現と参考文献リストの作成では、引用文型や記号の使い方、記述の仕方などに誤りが多く見られた。来学期は今学期の学習事項を復習すると共に、正確な引用表現や引用内容と自分の意見との結び付け方などについて引き続き指導していきたい。

[心理・福祉]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名

結果と課題

今学期は J6 の学生が多くなり、日本語力の差が見られたが、全体的には真面目にクラス活動に参加し、レポートとレジュメの作成や各課題に取り組んだ。レジュメの作成においては、見出しや番号の付け方に慣れておらず、全体の書式設定にも苦勞していたが、ペアワークを通して互いに書き方を参照することができ、読み手に分かりやすく示す方法を徐々に学べたようである。また、レポートの作成においては、全体の構成、引用・参考の方法、参考文献リストの作成、図表の表現を中心に授業を進めた。これらの学習項目をしっかり身に付けることができた学生がいる一方で、自己流や不正確な表現をなかなか改められない学生も見られた。来学期は今学期の学習事項を復習しつつ、レポートの客観性、論理性を高めるためには、図表解説や引用などの的確な表現が求められることを引き続き指導していきたい。

[経済・理学]

「大学生の日本語 B-8」は「J8 日本語論文読解（池袋）」と併置のため、「J8 日本語論文読解（池袋）」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 B-7」は「J7 作文」と併置のため、「J7 作文」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 B-6」は「J6 作文」と併置のため、「J6 作文」部分を参照のこと。

[GLAP]

「大学生の日本語 B」は「Japanese Language and Japanese Culture A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 C6, 7, 8> <総合日本語 6-8C>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。

秋学期は比較対照、有識者の見解への同意、部分的な同意と反論などの機能表現を導入し、スライドを用いた 5 分のプレゼンテーションを計 4 回行った。各回の主な目標となる機能表現が含まれるスライドの 1 枚分についてはスクリプトも提出させた。また、ディスカッションのための質問も考えてこさせ、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。テーマ 1～3 は、まずスライドを作ってグループの中で発表の練習をし、学生間評価をさせた。また教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて再度グループの中で発表し、代表の学生が皆の前で発表をした。最終課題は全員が皆の前で発表した。

使用教材

独自教材

[社会・経営]

担当者名：長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 11 名

結果と課題

学習者は発表練習を繰り返すことで、発表の基本を身につけることができた。また、クラス全体の前で発表練習も行ったため、聞き手を意識した発表を心がけるようになっていった。声の抑揚やスピード、間の取り方など、話し方の技術に関しても、完全ではないものの、前期よりも工夫している様子が見られた。学習者何名かにとっては、かなりの挑戦であったようだが、周りの学習者から刺激をもらい、最後まで授業についてくることができた。今回、少人数のクラスだったため、教師は学習者一人一人の様子を注意深く見ることもできた。今後、人数が多くなった場合の対応をどうするかが課題となるだろう。

[法学・異文化]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 24 名

結果と課題

このクラスは 2019 年度春学期に「大学生の日本語 A」を履修した学生に加え、秋学期から履修した学生、そして再履修の学生の合計 24 名という人数の多いクラスとなった。春学期から履修している学生のほとんどが、自主的かつ積極的に活動に取り組んでいて、秋学期も引き続き、高いモチベーションを維持していた。そして、秋学期から参加した学生や再履修の学生にもその雰囲気が伝わり、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていった。欠席が続いたり、課題提出が遅れたりなどして、モチベーションが一時低下した学生も数名いたが、長期欠席の 1 名を除いては、今学期の課題をやり遂げることができた。

1 年を通して、発表の仕方や内容、スライドの体裁が非常によくなった学生も多かった。一方で、スライドを作成する際に、課題の形式が指示されたものと合致していなかったり、資料の内容理解不足で、論理展開がずれてしまったということがあった。また、発表の際に、スライドの文字をそのまま読んでいて、内容説明が不十分だった学生や、スクリーンやパソコンを見て発表していて、春学期の課題点であったアイコンタクトが不十分な学生もいた。明らかに練習時間と学生へのフィードバックが足りておらず、教師の指導が十分でなかったと痛感している。学生の問題点や課題点は個々で異なっているため、授業時間内にきめ細かいフィードバックをすることは非常に難しい。フィードバックの時間確保以外に、学生が主体的に問題や課題に気づき、解決していけるような仕掛けや支援方法があるのかどうかを考えていかなければならないと思っている。

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 24 名

結果と課題

24 名の履修登録があったが、2 名は休学のため採点対象外で、その他に一度も出席しない学生が 4 名いたため、実質的には 18 名のクラスであった。1 年を通して真面目に取り組んだ学生はアカデミックなプレゼンテーションの力をしっかり身につけることができた。

学期末の最終発表の準備では、グループ内で発表練習をする日にボランティアの日本人学生を招き、発表を聞いてもらった。母語話者にも聞いてもらうということで普段よりも緊

張感が生まれた。また、ボランティアの学生から発表の内容や仕方について高評価をもらい、留学生たちは達成感を感じられたようである。

このクラスは学習意欲があり真面目に取り組む学生とそうでない学生にかなり差があった。発表の準備をせずに授業に来て、未提出の課題が溜まっていく学生がいた。一名を除き最終的にはすべての課題を提出したものの、事前課題を準備してこないため、グループでの発表でもただ聞いているだけとなってしまったのが残念である。このような学生には日頃から声がけをしたものの、なかなか改善されなかった。学生の動機付けについては今後の課題としたい。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 12 名

結果と課題

春からの継続が 10 名、再履修が 2 名の構成であった。授業の進行のしかた、口頭発表の基礎的知識は既に持っていたので、練習を重ねることで、プレゼンテーションの型の部分でのトレーニングは達成できたのではと思う。目線や態度も発表らしくなってきた。今回は有識者の見解から同意、反論、提案など自身の考えを深めて、それを口頭で表すことが目標であったが、有識者の見解の読み取りから同意や反論につなげるところで、ねじれがあったり、基本となる見解の主張を十分に読み取れていないこともあった。ただ、回が進むにつれ、構成が整ってきた印象はあり、最終発表では良い提案も出ていた。真面目なクラスであったが、その分おとなしく、質疑応答があまり盛り上がらなかった。質問の促し方やディスカッションポイントの設定の仕方については今後の課題としたい。

[心理・福祉]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 8 名

結果と課題

履修者 8 名のうち、総合日本語として履修したのは 2 名であった。内容と進度は観光映像のクラスと同じで、型は学べたものの、有識者の見解を正しく理解し、論理的に一貫性を持って述べていくところが十分にできていなかった学生がいた点もほぼ同じである。このクラスには春からの継続の学生に加え、特別外国人学生がいたので、テーマ 1 の比較対照のところでは表の説明の仕方など少し基本的なことも振り返りながら進めたが、それは良

かったと思う。人数が少なく、時間的余裕もあったからかもしれないが、質問やディスカッションについては多くはなかったが、数人の学生からは発言があった。ただ発言する学生には偏りがあったので、発表するだけでなく、他者の発表をよく聞き、質問できるようにする聞き手としての指導も今後の授業運営で考えていきたい。

[経済・理学]

「大学生の日本語 C-8」は「J8 日本の文化・社会 B」と併置のため、「J8 日本の文化・社会 B」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 C-7」は「J7 読解」と併置のため、「J7 読解」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 C-6」は「J6 読解」と併置のため、「J6 読解」部分を参照のこと。

[GLAP]

「大学生の日本語 C」は「Japanese Language and Japanese Society B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society B」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 D6, 7, 8><総合日本語 6-8D>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

学期の前半は『上級日本語教科書 文化へのまなざし』の「個性と学び」、後半は生教材の「AI」に関する読み物を扱った。学期の前半と後半それぞれ、資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料 2 は A と B から各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、レポートの書き方の指導を行い、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。春学期の大学生の B では直接引用について学んだが、秋学期の大学生の日本語 D では間接引用を練習した。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社。

井上智洋、2018、『人工知能と経済の未来—2030 年雇用大崩壊』、文春新書。

小林雅一、2017、『AI の衝撃—人工知能は人類の敵か』、講談社。

[社会・経営]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 21 名

結果と課題

このクラスは「総合日本語 6・8D」と併置されているため、春学期に「大学生の日本語 B」を履修した正規学部生に、新しく「総合日本語 6・8D」の特別外国人学生が加わった。秋学期は春から継続している正規学部生の日本語の力もアカデミックな力も高いため、昨年度は総合日本語で加わった学生のうち 2 名が学期の半ばで課題の難しさなどから履修を諦めてしまった。この反省を踏まえ、新学期のオリエンテーションでコースの紹介の際に実際に使用している教材を見せて毎週の課題の量を知らせる他、継続の学部生は J7、8 レベルの力があることを伝えるなどして、より具体的にコースのイメージが持てるように努めた。その結果、新たに加わった特別外国人学生は J7、J8 レベルの学生が 9 名、J6 が 1 名となり、どの学生も学習意欲が高く、大部分の学生の日本語力は正規学部生と同程度となった。「総合日本語 6・8D」の学生はレポートやレジュメの書き方を初めて学ぶため、他の学生が「大学生の日本語 B」で学んだ引用の仕方、参考文献の書き方、レジュメの書き方を一から説明する必要があったが、学期後半には大部分の学生がしっかりこのアカデミックな力も身につけることができた。

今年度は学期後半のレジュメ発表の日にボランティアの日本人学生をクラスに招き、クラスメートだけでなく日本人学生に対してもレジュメを見せながら説明したり、話し合ったりする時間を設けた。この活動は留学生にも日本人学生にも好評で、お互いに良い刺激を受けたようである。大学生の日本語に日本人学生を招くのは初の試みであったが、できれば来年度は春学期にもこのような機会を設けたいと思う。

[法学・異文化]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：26 名

結果と課題

基本的には文学部同様春学期 B で学んだことを基礎に、間接引用や接続表現の技術を学ぶことができていたと思う。取り組みは概ね真面目で、最終レポートでは自身の興味と AI の技術をつなげて独自の視点で書こうとする学生が多く、発想は独創的であった。ただテーマの性格にもよるのかもしれないがその内容に引用の割合が多いことが気になった。全体に見て、レポートを書く技術を身につけるというクラスの目標は達成できたのではと思う

が、課題としてはピアリーディングでチェックシートをよく見れば気づくようなことも、指摘ができていなかったこと、表現クイズでは接続詞の使い方は理解できていたようであったが、提出レポートでは接続詞のバリエーションが限られていたり、適切に使えていないものもかなり見受けられた。また今期 J5 から上がってきた J6 の学生の中にはこのクラスを受講できるレベルには達していない印象の学生もいて、最後まで大変そうだった。できる範囲でサポートをしたが、人数が多かったため、個別の対応には限界があり、十分な手当てができなかったことは残念でもあった。

[文学]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 27 名

結果と課題

多くの学生が、春に B を終えてからの履修であったため、授業の流れは把握しており、レジュメやレポートのピアリーディングも積極的にできていた。技能面では参考文献の書き方、直接引用の知識も身に付いていたので、それに加える形で間接引用や接続表現を学んだが、それらについての基本的な知識は身についたのではと思う。読解では 2 つの読み物を扱ったが、レジュメは 1 つ目より 2 つ目の方が全体にまとめ方がよくなっており、内容の要点を押さえることができてきたと感じた。レポートでは資料の探し方、またそれらと自分の主張をつなげる部分で苦労している様子が見受けられた。クラス全体の課題としては、欠席者が多く提出物も滞りがちの学生が複数いたことである。このクラスは提出物が多く、修正しての再提出も多いので、それぞれの期日に遅れるとなかなか流れについてくるのが難しい様子だった。再履修者もほとんど来なかったことも残念だった。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 11 名

結果と課題

全員春学期から引き続き履修した学生で、みなクラス活動に積極的に参加した。遅れ提出もほとんどなく、クラス全体で各課題にも熱心に取り組んだ。その結果、レジュメの作成では、番号や記号の使い方に工夫が見られ、読み手にとってどのような資料が分かりやすいかが考えられるようになった。また、レポートの作成では、春学期の課題を活かしつつ、さらに間接引用、要約、接続詞の適切な使い方を目指した。まだ引用表現や参考文献の書き方に

細かいミスはあるが、自分の意見を論理的に述べる日本語力は概ね身に付いたと思われる。今後の課題としては、引用の効果的な使用が挙げられる。自分の意見か他者の意見かを区別する意識は、ほぼ出来るようになったが、両者の関連性は何か、なぜその資料をレポートで引用するのかという必然性が不明瞭な場合が見られた。来学期は、この点についての練習を増やし、的確な引用の定着をはかりたい。

[心理・福祉]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

結果と課題

7名のうち6名が春学期も履修していたため、基本的なレジュメとレポート作成は概ね理解しており、クラス全体で各課題に真面目に取り組んだ。レジュメの作成においては、春学期には資料の文章をそのまま抜き出す等のことが見られたが、秋学期には簡潔で内容を踏まえたレジュメが作成できるようになった。レポート作成においては、資料の解説表現を復習すると共に、間接引用、要約、接続詞の適切な使い方を目指した。まだ引用表現や資料の解説表現では改善の余地があるが、自己流で書くということとはなくなり、全体の論理性と構成に留意して自分の意見か他者の意見かを区別する意識は、概ね身に付いたと思われる。今後の課題としては、複数の文を引く間接引用の表現が挙げられる。短い引用や長い引用の始まりは適切に記述できているが、どこまでが引用かが不明確な場合が見られた。来学期は要約の練習と共に、様々な引用表現の定着をはかりたい。

[経済・理学]

「大学生の日本語 D-8」は「J8 日本語論文作成（池袋）」と併置のため、「J8 日本語論文作成（池袋）」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 D-7」は「J7 文法」と併置のため、「J7 文法」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 D-6」は「J6 文法」と併置のため、「J6 文法」部分を参照のこと。

[GLAP]

「大学生の日本語 D」は「Japanese Language and Japanese Culture B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture B」部分を参照のこと。

2. Placement Test 実施報告

【春学期】

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	継続生	新入生	継続生	履修希望 新入生	在学生	
3月26日 特別外国人学生 正規院生対象			109	7	25 (※1)	7	1
3月28日 正規学部生対象	77	1				s	
4月3日 予め設定された 特別措置	1	1	0	0	2	0	1
	78	2	109	7	27	7	2
全受験者数 232 名							

2019 年度春学期 日本語プレースメントテスト受験者数

※1：3月26日正規院生25名のうち、ビジネスデザイン19名

春学期プレースメントテスト結果

J0	22			
J1	18			
J1S	16			
J2	15			
J2S	18			
J3	12			
J3S	12			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	10	9	11	9
J5	34	26	36	40
J6	58	38	60	44
J7	41	50	38	44
J8	45(うち条件付き 24 名)			

＜春学期総評＞

春学期の受験者総数は 232 名で、2018 年度（265 名）より若干人数が減った。大学院生の受験者数は 2018 年度からさらに 20 名ほど減少し、正規学部留学生の受験者数も 30 名ほど減少した。その一方で特別外国人学生が約 15 名増加増加した。判定レベルの分布は、昨年よりも J0 が少なく、その分 J1～J2 が多かった。3 月 26 日、28 日は 2 グループ編成で短時間でテストを実施する体制を組み、順調であった。

【秋学期】

2019 年度秋学期 日本語プレースメントテスト受験者数

	正規学部生	特別外国人学生		正規大学院生	
	新入生	新入生	継続生	新入生	在学学生
9 月 5 日 特別外国人学生 継続正規院生対象	2	171	1	0	3
9 月 12 日 新規正規院生 特別措置	0	3	0	20	3
	2	174	1	20	6
全受験者数 203 名					

秋学期プレースメントテスト結果

J0	64
J1	11
J1S	18
J2	8
J2S	10
J3	11
J3S	15

	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	17	17	19	19
J5	28	16	24	26
J6	24	24	32	21
J7	33	19	32	32
J8	25(うち条件付き 21 名)			

<秋学期総評>

受験者総数は 203 名で、2017 年度（181 名）、2018 年度（190 名）と少しずつ受験者数が増えている。J0 判定者は、2018 年度よりも 20 名弱増えたが、昨年度秋学期中に J0 担当者を中心に、ひらかたテスト対応の改善が検討されたことで、円滑に実施できた。

プレイスメントテスト後、実際の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。

【2019 年度春学期】			【2019 年度秋学期】	
特別外国人学生	国 籍	人 数	国 籍	人 数
	アイルランド	1	アイルランド	3
	アメリカ	35	アメリカ	20
	イギリス	7	イタリア	3
	イタリア	1	イギリス	9
	インドネシア	4	インドネシア	2
	オーストラリア	13	エストニア	1
	オーストリア	3	オーストラリア	13
	オランダ	7	オランダ	13
	カナダ	4	カナダ	9
	韓国	12	韓国	10
	コスタリカ	1	シンガポール	3
	ジョージア	1	スイス	3
	シンガポール	3	スウェーデン	4
	スイス	3	スペイン	7
	スウェーデン	2	スロバキア	1
	スペイン	6	スロベニア	2
	タイ	1	タイ	2
	台湾	8	台湾	9

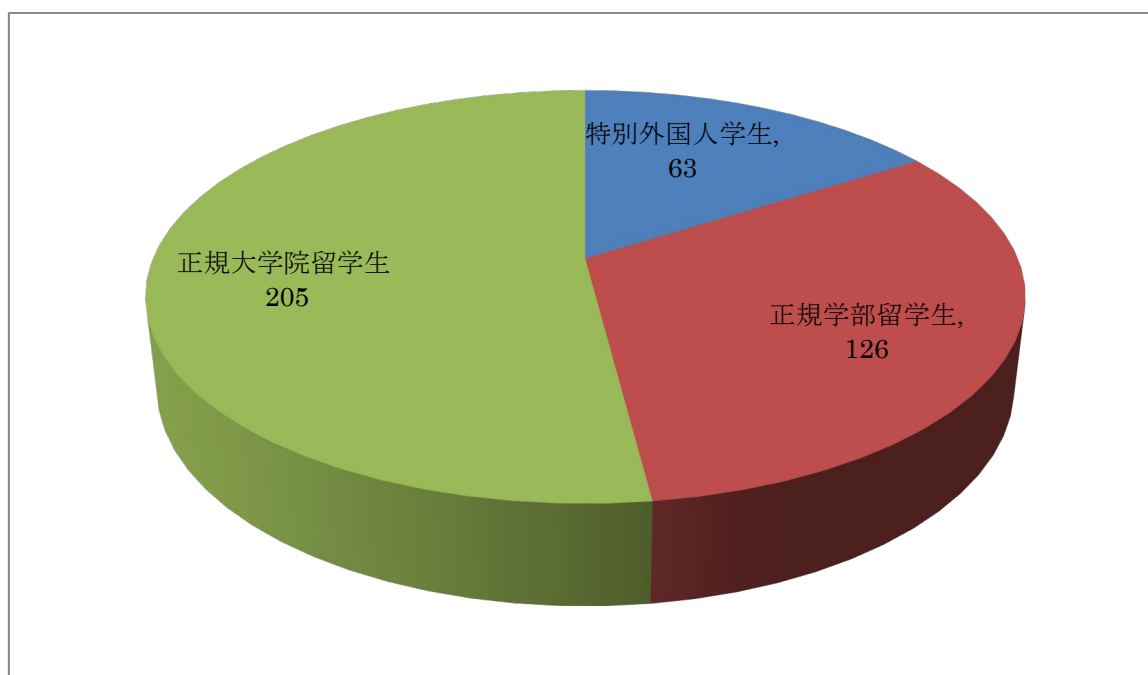
	チェコ	3	チェコ	2
	中国	17	中国	15
	中国(香港)	4	中国(香港)	2
	中国(マカオ)	1	デンマーク	4
	ドイツ	16	ドイツ	17
	日本	1	日本	2
	トルコ	1	ニュージーランド	2
	ニュージーランド	1	ノルウェー	2
	ノルウェー	4	フィリピン	3
	フィリピン	1	フィンランド	1
	フィンランド	2	フランス	16
	フランス	15	ベトナム	1
	ベルギー	2	ベルギー	3
	ポーランド	2	ペルー	2
	ポルトガル	1	ポーランド	3
	ミャンマー	2	マレーシア	1
	モンゴル	1	ミャンマー	1
			メキシコ	1
			モンゴル	1
特別外国人学生合計		186		193
正規留学生 (大学院)	イタリア	1	アメリカ	1
	韓国	1	インドネシア	1
	タイ	1	台湾	1
	台湾	1	中国	23
	中国	35	ドイツ	1
	フランス	3	フランス	2
	ベトナム	3	ベルギー	1
	ベナン	2	モンゴル	1
	モンゴル	1		
	ペルー	1		
正規留学生(大学院)合計		49		31
日本語履修者合計	2019 年度春学期	235	2019 年度秋学期	224

※春学期、秋学期とも中国国籍の正規大学院生のうち 19 名がビジネスデザイン 1 年生

3 2019 年度 日本語相談室実施報告

2019 年度 日本語相談室利用状況(2019 年 4 月 10 日～2020 年 2 月 3 日)

【相談者所属別利用件数】



2019 年度も安定的に日本語相談室が運営できたが、留学生数、特に正規大学院留学生数が減ったことが影響して、利用件数は若干減少した。しかし実質利用人数でみると、2018 年度が 208 人だったのに対し、2019 年度は 219 人となった。特別外国人学生は、2018 年度の実質利用人数が 30 人だったのに対し、2019 年度は 42 名となった。正規学部留学生は 2018 年度の実質利用人数が 48 名だったのが 2019 年度は 72 名と数字を伸ばした。より多くの留学生に利用されたことがわかる。

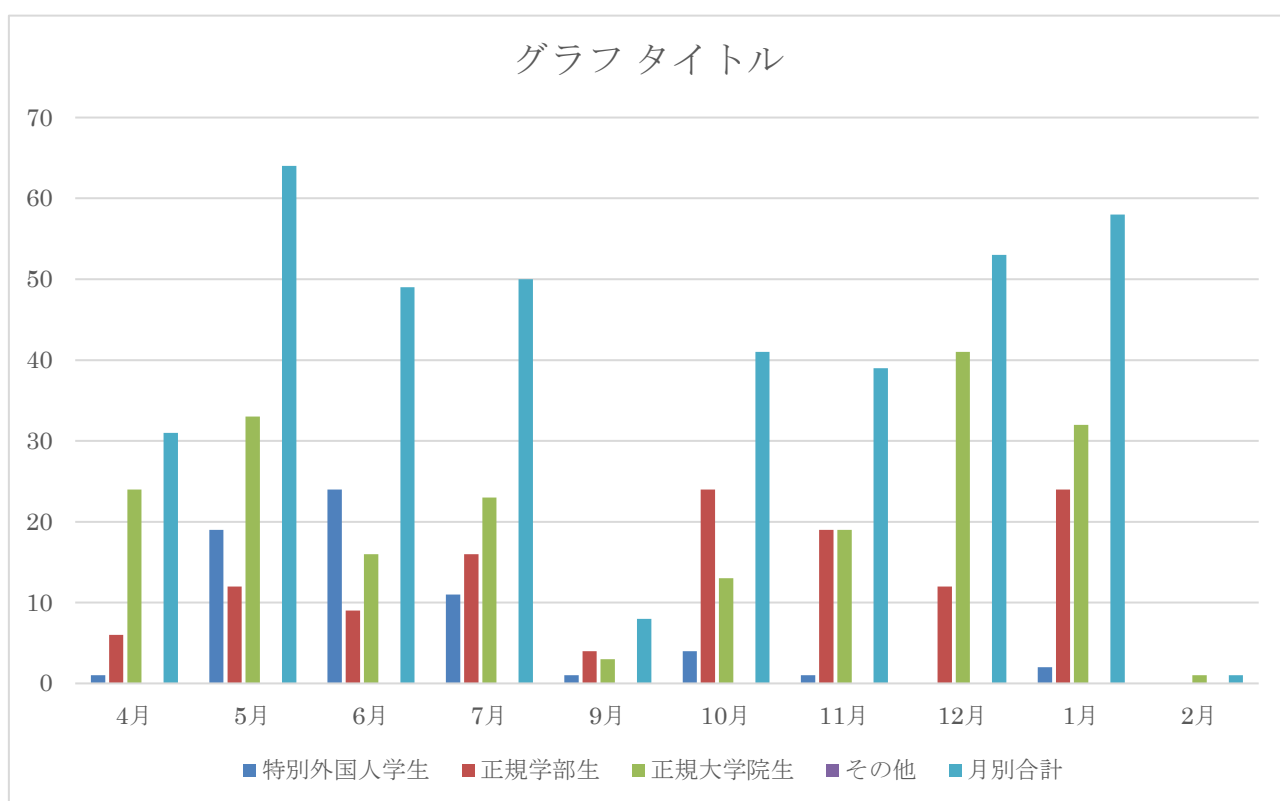
学生への周知は、昨年度と同じように、ニュースレターなどを活用した学生への直接の呼びかけに加えて、日本語相談室についての教員向けのちらしを作成し、国際センターサポーター委員会で各部局の先生がたに日本語相談室の広報を行った。

相談者の種別でみると、スピーチコンテストの時期と重なる 5 月、6 月は特別外国人学生の利用が多い、修士論文提出時期の 12 月 1 月は正規大学院生の利用が多いという傾向は、これまで同じだが、10 月、11 月は正規学部生の利用が多かった。

今年度の実務委員会での日本語相談室利用についての報告からは、試験期間が有効に活用されている様子もわかった。

【月別推移】

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
特別外国人学生	1	19	24	11	1	4	1	0	2	0	63
正規学部生	6	12	9	16	4	24	19	12	24	0	126
正規大学院生	24	33	16	23	3	13	19	41	32	1	205
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月別合計	31	64	49	50	8	41	39	53	58	1	394



学部・研究科別の利用状況を見ると、学部生は社会学部の学生が比較的繰り返し利用している様子がうかがえる。大学院生はどの研究科も利用件数が多いが、2019年度は観光学研究科、ビジネスデザイン研究科、経営学研究科の学生が繰り返し利用した様子がうかがえる。

【所属別利用件数】

		実質 利用 人数	合計 利用 回数	相談キャンパス	
				池袋	新座
特別外国人学生		42	63	57	6
正 規 学部生	文学部	15	21	21	0
	経済学部	2	2	2	0
	異文化コミュニケーション学部	9	15	15	0
	社会学部	10	33	27	6
	経営学部	5	7	7	0
	観光学部	3	3	1	2
	法学部	2	2	2	0
	GLAP	1	1	1	0
	コミュニティ福祉学部	1	1	0	1
	現代心理学部	24	41	4	37
正 規 大学院生	文学研究科	30	63	62	1
	観光学研究科	17	23	11	12
	ビジネスデザイン研究科	29	70	63	7
	異文化コミュニケーション	6	15	10	5
	21 世紀社会デザイン研究科	6	11	11	0
	経営学研究科研究科	3	8	5	3
	社会学研究科	4	4	4	0
	経済学研究科	1	1	1	0
	現代心理学研究科	5	6	0	6
	コミュニティ福祉学研究科	3	3	1	2
	法学研究科	1	1	1	0
		特別外国人学生 計	42	63	57
正規学部生 計		72	126	80	46
正規大学院生 計		105	205	169	36
合 計		219	394	306	88

池袋、新座の各キャンパスに所属する学生の利用状況を見ると、新座キャンパスの利用が

2017年度は69件、2018年度は93件であったのに対し、2019年度は88件と若干減った。新座キャンパスは、現代心理学部の正規学部留学生の実質利用人数も合計利用回数も数が伸びた。ひきつづき新座キャンパスにおいても日本語相談室利用を促したい。

【曜日・時限別 利用件数および相談内容の内訳】

日本語相談室は、基本的に予約制で1コマに2件相談を受け付けられる設計となっており、試験期間を入れて各学期15週稼働している。2019年度より100分授業が導入されたのにもとない、1枠あたりの時間も5分伸びた。下表は学期、曜日、時限の日本語相談室の稼働状況がわかるものであるが、2019年度もばらつきなく利用されている様子がわかる。2018年度より日本語相談室の予約が取りにくくなっているという声を耳にしている。2019年度は正規留学生の減少により、利用件数は2018年度よりやや下回ったが、今後の本学の国際化の方向性を考えて、予約が取りにくい状況を改善する取り組みが必要だと考える。

【曜日・時限別 利用件数】

2019年度春学期

(池袋キャンパス)

	月	火	水	木	金
2限	16	17	25	15	
3限	20		18	24	16
4限					

(新座キャンパス)

火	水	金
		5
13		
15	10	

* 新座キャンパスでの利用43件のうち、15件はテレプレゼンス、28件は対面で利用。

2019年度秋学期

(池袋キャンパス)

	月	火	水	木	金
2限		17	18		12
3限			16		17
4限	23		27		25

(新座キャンパス)

月	火	水
7	20	8
	10	

* 新座キャンパスでの利用45件のうち、15件はテレプレゼンス、30件は対面で利用。

【相談内容内訳】

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）	129
就職活動（エントリーシート等）	51
レポート（授業、ゼミ等）	84
奨学金関係（申請書類、面接練習等）	22
発表指導（授業、ゼミ等）	16

学会発表・予稿集・投稿論文	15
学習方法指導（練習も含む）	37
日本語能力試験対策指導	0
スピーチコンテスト	28
その他	12
合計	394

日本語相談室担当者コメント

今年度の日本語相談室の利用は 394 件であった。Web 予約システムの導入以来、増加傾向にあった利用件数がやや落ち着き、2018 年度の 438 件から 44 件減少し、2017 年度と同程度の利用件数であった。昨年度の相談内容と比較して一番差があったのは、164 件から 129 件に減った「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」と、96 件から 51 件に減った「就職活動（エントリーシート等）」である。ただ、前者は一昨年度 116 件、後者は 50 件だったことから、昨年度一時的に急増した利用件数が、元に戻ったともいえる。減少した相談内容がある一方で、「レポート（授業、ゼミ等）」は昨年度の 63 件から 84 件、「学習方法指導（練習も含む）」は 29 件から 37 件へと増加しており、普段の大学生活を営む上で必要なそれらの相談内容が増えていることは、日本語相談室が立教大学に根付いてきている証といえるだろう。また、2019 年の全体異なり利用者数は 108 名で昨年度の 92 名に対し、16 名の増加となった。日本語相談室の存在が知られ、必要とする人に利用されていることがわかる。以下、池袋キャンパス、新座キャンパス、テレプレゼンスの利用について、順に見ていく。

<池袋>

2019 年度の利用者数は 307 件で、2018 年度の 347 件より減少しているが、異なり利用者数は 88 名で、2018 年度の 83 名よりも多かった。相談内容で最も多かったのは、従来同様「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」104 件であり、学位論文提出が重なる学期末は、稼働率が最も高かった。次に多いのは、2018 年度は「就職活動（エントリーシート等）」、「レポート（授業・ゼミ等）」の順であったが、2019 年度は、「レポート（授業・ゼミ等）」52 件、「就職活動（エントリーシート等）」43 件であった。

例年同様、同一学生による定期的な相談も多かったが、指導教授やキャリアセンターの勧めもあり、新規利用者も増加した。しかしながら、チラシの配布やオリエンテーションで案内しているにもかかわらず、相談室の存在を知らない学生もいるとのことであった。そのため、日本語相談室の認知度が高くなるよう、周知をより強化する必要がある。

<新座>

今年度の新座キャンパスの日本語相談室利用は 60 件であり、2018 年度の 50 件、これま

での過去最高だった 2016 年の 53 件を上回る件数だった。異なり利用者数も、昨年度の 13 名を大きく上回る 24 名であり、新座キャンパスでの日本語相談室の認知度・利用度が着実に向上しているといえそうである。

利用目的としては、昨年度まで毎年最も多かった「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」は 13 件にとどまり、「レポート（授業、ゼミ等）」が 25 件で最多だった。卒業論文や修士論文・博士論文で年末に集中して利用するような学生はおらず、春学期と秋学期を通して利用率の推移はある程度安定していた。ただ、2016 年度から課題として挙げられている事前資料の提出については、提出してくる学生はほとんどいなかった。実感として、その煩雑さから事前資料の提出を避けている学生が多いようなので、より利便性を高められるよう検討していければと思う。

＜テレプレゼンス＞

2019 年度は 30 件で、2018 年度の 41 件より減少したが、異なり利用者数が 19 名で、前年度の 10 名より大幅に増加した。新座キャンパスでのテレプレゼンスの認知度、利用率が高くなっているといえる。相談内容は「卒業・修士・博士論文」12 件、「レポート」7 件の順で多かった。新規利用者が増えたこともあり、事前資料の提出方法や機器の利用に慣れていない学生もいた。そのため、テレプレゼンスの利用方法、機器利用について周知し、スムーズに運営できるよう改善していきたい。また、新座キャンパスの利用者が増加していることもあり、テレプレゼンスの周知も引き続き行っていきたい。

【2011 年度—2019 年度 利用件数推移】

	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67	42	63
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70	92	126
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268	304	205
その他	0	0	0	1	8	0	2	0	0
合 計	144	153	181	237	424	428	407	438	394
増 減	100	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6	304.2	273.6

日本語教育センターはこれまで学内での周知活動を定期的に行いながら、ウェブ予約システムを導入し利便性を高め、日本語相談室の機能を活性化させることをめざしてきた。実務委員会や日本語教育センター運営会議では毎月報告と意見交換が行われてきており、2018 年度までで、件数の伸びや著しい繰り返し利用の傾向などの課題は一通り克服され、現在の課題は予約が取りにくくなっているが挙げられている。一方で日本語相談室の存在自体を知らない留学生もいることも実務委員会で共有されている。日本語相談室の認知度を

上げる努力を続けるとともに、日本語相談室の新しい体制について今後は検討していきたい。具体的には日本語相談室の学生スタッフの育成と活用を検討していきたい。

4. 2019 年度 立教漢字検定実施報告

2019年度	試験日	申込締切日	申 込		受 験		合 格	
第1回	5月29日(水)	4月30日(火)	初級	10	初級	9	初級	5
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			第1回申込合計	27名	第1回受験合計	20名	第1回合格合計	14名
第2回	7月10日(水)	6月12日(水)	特別外国人学生	25名	特別外国人学生	10名	特別外国人学生	9名
			上級	4	上級	4	上級	4
			中級	12	中級	3	中級	3
			初級	9	初級	3	初級	2
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			第2回申込合計	25名	第2回受験合計	10名	第2回合格合計	9名
第3回	11月20日(水)	10月23日(水)	特別外国人学生	50名	特別外国人学生	40名	特別外国人学生	25名
			上級	14	上級	12	上級	9
			中級	21	中級	16	中級	8
			初級	15	初級	12	初級	8
			正規学部留学生	2名	正規学部留学生	2名	正規学部留学生	2名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	2	中級	2	中級	2
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			その他	0名	その他	0名	その他	0名
			第3回申込合計	52名	第3回受験合計	42名	第3回合格合計	27名
第4回	1月15日(水)	12月11日(水)	特別外国人学生	43名	特別外国人学生	31名	特別外国人学生	18名
			上級	8	上級	8×注	上級	7
			中級	23	中級	15	中級	8
			初級	12	初級	8	初級	3
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			その他	0名	その他	0名	その他	0名
			第4回申込合計	43名	第4回受験合計	31名	第4回合格合計	18名

2019 年度も例年通り 4 回実施した。2017 年度から新座キャンパスで各学期 1 コマずつ、漢字検定対策のための漢字クラスを展開するようになり、計画的に教材開発を進め、クラス内で扱う範囲は、2019 年度で上級レベルまでカバーできるようになった。

2018 年度は、漢字クラス内で実力以上のレベルを申し込み、途中であきらめてしまう学生が出てしまう課題が出たが、FD 活動の成果もあって、2019 年度は、申込者数に対する受験者の割合、受験者数に対する合格者数の割合は安定したように思われる。ただ、受験者の内訳を見ると、漢字クラス履修者の申し込みがほとんどで、正規学部留学生、正規大学院留学生の受験がほとんどない状況となった。ニュースレターや HP などでの広報活動を強化したい。

5. 2019 年度 日本語自主学習用図書貸し出し実施報告

日本語教育センターでは、1 回 3 冊、2 週間までの図書の貸し出しを行っている。2019 年度の貸し出し状況は以下の通りである。

利用件数は特別外国人学生の利用が利用者数は昨年度並み、貸出冊数は昨年度よりも減った。正規学生の利用は昨年度並みであった。貸し出し教材の内容は、日本語能力試験対策が多く、次いで文法・文型、漢字の教材の利用が見られた。

【所属別記録】

2013 年度より新座キャンパスに設置（28 冊）

	利用者数	貸出冊数
特別外国人学生	17	23
正規学生	4	8
（新座）	2	2

【貸し出し図書一覧】

	貸出書名	貸出回数
特別外国人学生	BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 VOL.1 第 3 版	3
	にほんご500問 初級	2
	みんなの日本語 初級 翻訳・文法解説英語版 English[1]	1
	みんなの日本語 初級 本冊	2
	わかって使える日本語 中級レベル	1
	にほんご 敬語トレーニング (CD 付)	1
	カタカナ語彙完全マスター 日本語能力試験 1・2 級レベル	3

	日本語能力試験文法問題対策 完全マスター 2 級	5
	新試験対応 合格できる日本語能力試験 N1 CD2 枚付き	1
	実力アップ！日本語能力試験 N5 読む(文字・語彙・文法)	1
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 文法	5
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 語彙	4
	にほんご作文の方法	1
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 文法	2
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 漢字	4
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 語彙	6
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 語彙	5
	ひとりでできる初級日本語文法の復習 英語版	4
	文法が弱いあなたへ	1
	日本語能力試験対策 N2 文法 模擬テスト	2
	日本語能力試験対策 N1 文法 総まとめ	4
	日本語能力試験対策 N1 漢字 語彙	3
	日本語能力試験対策 N2 文法 総まとめ	2
	日本語能力試験対策 N2 漢字 語彙	3
	日本語能力試験対策 N3 文法 語彙 漢字	2
	日本語能力試験スーパー模試 N1	1
	日本語能力試験スーパー模試 N2	2
	日本語能力試験 模試と対策 N2	4
	パターン別徹底ドリル日本語能力試験 N2	4
	みんなの日本語初級 I	1
	げんき I	6
	げんき II	5
正規留学生	絵でわかるぎおんござたいご	1
	絵でわかる日本語使い分け辞典	2
	大学で学ぶための日本語ライティング 単文からレポート作成まで	1
	BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 VOL.2 第 4 版	2
	みんなの日本語 初級 I 本冊	1
	日本語能力試験対策 N2 文法 総まとめ	1
	日本語能力試験対策 N2 漢字 語彙	1
	BASIC KANJI WORKBOOK 使って、身につく！ 漢字×語彙 2	2

6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

2019年6月22日に『立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ー』を開催し、当日は22名の留学生が登壇した。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/6th.default.aspx>

を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第8回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ースピーチ文集』を刊行した。

7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

2018年度は、留学生受け入れ政策の取り組みとして、2018年に本学が多様な正規学部留学生を受け入れるための議論を開始したが、2019年度も、引き続き同じ課題に取り組むこととし、2つの企画を立て実施した。1つはシンポジウム「多様な日本語力の学部 留学生の受け入れと大学での学び」で、もう1つは講演会で「正規学部留学生受け入れの新時代ータイ・フィリピンの中高等教育を学ぶー」である。

開催日は2019年12月7日で、企画趣旨と本学の正規学部留学生のための日本語教育の展望と課題を整理した後、韓志昊氏（観光学部教授）による短期日本語プログラムでの実践、巖成男氏（経済学部教授）、浜崎桂子氏（異文化コミュニケーション学部長、同学部教授）による学部での実践、上西智子氏（経営学部 兼任講師）による学部を超えた実践についての報告のあと、池田伸子氏（国際化推進機構長、異文化コミュニケーション学部教授）による多様な日本語力の学部留学生の受け入れと大学での学びに関する展望と課題についての報告があり、第2部で全体討議を行った。

講演会の開催日は2020年1月10日で、Bernadette S. Hieida 氏（Assistant Professorial Lecturer 2, International Studies Department, De La Salle University – Manila）、Neancharoensuk Suneerat 氏（Associate Professor, Japanese Section, Faculty of Liberal Arts, Thammasat University）を講師に迎え、現地の日本語教育および日本留学について学ぶ機会を得た。参加者は学内の教職員をはじめ、学生、学外の方々と、シンポジウムは48名、講演会は11名の参加があった。

当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える9』として刊行した。

8. 日本語教育センターニュースレター発行報告

昨年度にひきつづき「日本語教育センターニュースレター」を発行した。スピーチコンテストや日本語クラスの紹介、日本語教育センターHPで扱っている「日本・東京探検」について特集を組んだ。また、学内教職員の協力をえて、留学生へのメッセージを積極的に発信した。詳細は日本語教育センターホームページ
<https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/>
を参照されたい。

9. 短期日本語プログラム報告（A）

日本語教育センターの新事業として、国際化推進機構との共同開催による短期日本語プログラムを本格実施した。今年度よりシドニー大学の団体受け入れを開始し、実施規模が拡大した。

【春学期】

1 実施の概要

1) 開催期間

2019年7月1日(月)～7月19日(金) ＊入寮：6月30日(日)/退寮・帰国：7月20日(土)

2) 開催場所

新座キャンパス（宿舎：太刀川記念交流会館・デイリーホテル新座店）

3) コースデザイン

①単位数：4単位（4,300分）

＊単位数内訳：日本語科目 2単位(2,800分)50分×56回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2単位（1,500分）50分×30回

4) 開講クラス：5クラス(入門 Beginners Class×3クラス・初級 Elementary Class・初中級 Pre-Intermediate Class)

2 結果

1) 参加学生 67名

協定校の区分は2019年7月

現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免除 枠 での参加 (6名)	ニューヨーク州立大学ジェネセオ校 (GLAP) 1名	ケンブリッジ大学エマニュエルカレッジ(文) 1名 オルレアン大学(異) 1名 ソウル市立大学(社) 1名 シンガポール経営大学 2名
私費での参加 (14名)	ヴァージニア・ウェスレヤン大学 (GLAP) 1名 エモリー&ヘンリー大学 (GLAP) 2名 セントメリーズ大学 1名 リンカーン大学 1名 華東師範大学 3名 中国人民大学 1名 南京大学 1名 RMIT ベトナム校 1名 RMIT オーストラリア校 1名	タマサート大学 (観) 1名
団体枠での参加 (47名)	シドニー大学 47名	

2) 学内の協力

学部		経営学部、観光学部、理学部
学 生	部活・サークル	テニス部
	クラス ボランティア	文学部 2名、観光学部 7名、コミュニティ福祉学部 3名、現代心理学部 2名、異文化コミュニケーション学部 7名 計 21名
	学生サポーター(住み込み・入寮サポート・フィールドトリップ引率など)	文学部 3名、経済学部 1名、社会学部 2名、法学部 1名、観光学部 12名、コミュニティ福祉学部 3名、経営学部 3名、現代心理学部 1名、異文化コミュニケーション学部 2名 異文化コミュニケーション研究科 2名 計 30名
事務		国際センター、メディアセンター、新座8号館講師控室、図書館、保健室、教務事務センター、学生部、人事部、総務部、財務部

3) 学外の協力

新座市役所(ホームビジット) *3 家庭に、計 5 名の学生を受け入れていただいた。

3 成果

- ・ 本学への留学パターンの多様化の促進
- ・ 協定校とのインバランスの解消、関係強化
- ・ 本学教職員のホームビジット協力 ＊7 家庭に計 13 名の学生を受け入れていただいた。
- ・ 新座市（国際事業活動）との地域連携
- ・ 本学学生との国際交流の促進

前回に引き続き、新座キャンパス国際センター協力のもとグローバルラウンジ企画と連携し、以下のイベントを行った。

それぞれのイベントの短プロ生と国内学生の参加者数は、以下の図の通り。

イベントの様子は、写真を参照。

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
日本語ワールドカフェ（全 3 回実施）	37	18	55
体育会テニス部との交流 （新座キャンパスで実施）	13	5	18
参加延べ人数	50	23	73

4 今後の課題

- ・ 入寮時の対応、学生サポーター、宿舎先との連携
- ・ フィールドトリップの事前打ち合わせ、スケジュール管理の強化
- ・ 受け入れ人数増加に伴う受入体制の強化
- ・ 事務局のプログラム期間中の体制
- ・ 学生サポーターの安定化・継続性⇒組織化
- ・ 受入学生の管理（門限、宿舎規則・ルール（ごみ処理）などの徹底周知）
- ・ オプショナルプログラムの充実化、ホームビジット受入先の確保

5 授業

日本語 A クラス（入門）

担当授業者名：三浦、谷、高嶋、

履修者数： 15 名

使用教材：『まるごと一日本のことばと文化―〈入門 A1 りかい〉』、独自教材

日本語 B クラス（入門）

担当授業者名：布村、長谷川、斉藤、

履修者数：14名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—〈入門 A1 りかい〉』、独自教材

日本語 C クラス（入門）

担当授業者名：泉、李、藤田

履修者数：15名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—〈入門 A1 りかい〉』、独自教材

日本語 D クラス（初級 1）

担当授業者名：島崎、浅野、平山

履修者数：14名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—〈初級 1 A2 りかい〉』、独自教材

日本語 E クラス（初中級）

担当授業者名：金庭、守屋、神元、小森

履修者数：9名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—〈初中級 A2/B1〉』、独自教材

2019 夏の短期プログラムは、67 名の参加があり、日本語クラスは 5 クラス体制で進めた。

A、B、C クラスは、日本語学習歴のない学生対象のクラスとし、それぞれ、15 名、14 名、14 名のクラスで行った。『まるごと〈入門 A1〉』のテキストを使用して日常会話を学習し、独自教材を用いてひらがなの導入を行った。ABC クラスの文字学習は、ひらがな学習のみとし、カタカナは希望者のみとすることにし、かなクイズの形式も、ディクテーションから 2018 秋と同様、50 音図表の穴埋めで行った。毎回表を埋めていくため達成感があり、最終日には全て埋められたことを喜んでいて、『まるごと』テキストでは、会話と聴解練習を中心にを行い、徐々に日本語でのやりとりが増える姿が見られた。進度は各曜日の担当分を事前に決めており、スケジュール通りに進めることができたが、クラスによっては語彙の導入に時間がかかる日もあった。また、最終発表では、日本語による自己紹介と英語による文化社会講義についての発表であったが、時間内に発表することができた。しかしながら、発表までの準備の時間について、グループごとの進度に差が出てしまった。発表準備のフローの中で締め切りを細かく設定したらどうかという意見もあった。

D クラスは 14 名で、初級でひらがなやカタカナを知っているレベルの学生を対象とした。テキストは、『まるごと〈初級 1 A2〉』で入門クラスよりやや難易度を上げたものを使用し、学習者にとって生活する上ですぐに必要となる日本語を学ぶことができた。スケジュール通り進めることができ、宿題、クイズの量もちょうどよかった。学習者それぞれの背景が異

なるため、ややレベル差があり、その中で学生にどこまで満足のいく授業をすることができるのか課題であった。最終発表は、全て日本語で行うことになっていたが、学生たちが発表したいと思うものに必要な日本語レベルの差が大きく、準備も発表も大変であった。

E クラスは9名、初中級レベルで、テキストは『まるごとく初中級 A2/B1』を使用した。テキストは2日間でトピック1つを終える進捗だったが、適当であった。文法は既習のものが多かったようだが、語彙表現は未習のものも多く、授業の中で日本語の文化社会的な側面についても学生の国と比較しながら触れることができた。最終発表は全て日本語で行うが、E クラスにおいても理解できないような未習の文法を使って原稿を書いており、単に原稿を読むだけの発表が見られた。初級1レベルと初中級レベルの最終発表の方法は今後も改善してよりよいものにしていきたいと思う。

今回も5つのクラスに日本人学生のボランティアが参加し、学生にとっては実際に日本語ボランティアと話したり自分の意見を発表したりする機会が多く、とても良かったと思う。ただし、ボランティア学生の一部が突然キャンセルすることもあり、そのような場合の対応を考える必要がある。

2019 夏の短プロでは教員とのやりとりで複数のクラスのメールを全員に送っており、大量のメールの処理に追われ、メール数を減らしてほしいという要望があった。連絡方法については今後対策を講じる予定である。

日本文化社会講義1クラス

担当授業者名：三浦、布村、李、高嶋、長谷川 履修者数：33名 使用教材：独自教材
--

日本文化社会講義2クラス

担当授業者名：島崎、守屋、神元、浅野、小森 履修者数：34名 使用教材：独自教材
--

2019 夏の日本文化社会講義は、テーマ1「フランチャイズシステムの現状」及び「日本のコンビニエンスストアのビジネスモデルと現在の課題」（経営学部高岡美佳先生）、テーマ2「Tourism in Japan」（観光学部韓志昊先生）、テーマ3「Hayabusa2: Asteroid Sample Return Mission and Exoplanets」（理学部亀田真吾先生）の3つのテーマで行われた。

フィールドトリップとしてテーマ1はファミリーマート、テーマ2は浅草～浜離宮、テーマ3はJAXAを訪問した。

どのテーマも学生の関心を集め、事前学習、講義、フィールドトリップ、事後学習、全てにおいて非常に熱心に参加する姿が見られた。テーマ1では RiCoLaS による逐次訳が行われ、そのおかげで学生が集中力を切らすことなく講義に集中することができた。

課題としては、リアクションペーパーの回収と、フィールドトリップの引率教員の対応である。事前学習、講義、事後学習ではそれぞれリアクションペーパーを書くことになっているが、学生番号、クラス名、氏名を指示通り書かない人がいて、その後の返却の際に非常に面倒であった。提出物の基本情報なので次回は徹底するようにしたい。また、必要に応じて講義の内容やリアクションペーパーの内容を引継ぎとして次の教員に伝えておくイメージしやすいことがわかった。次回は引継ぎで伝えたいと思う。フィールドトリップでは、毎回の点呼、講義との関連付けが重要である。2 回目のフィールドトリップではボランティアの誘導にも問題があったが、集合時間に遅れて、別ルートで現地に向かうグループがあった。集団行動なので、教員も引率していることを意識して、対応したいと思う。また、フィールドトリップのあとは、事後学習、最終発表へと続くので、引率教員は講義との関連付けができるように、見学中に声がけをするとよいと思われる。

【秋学期 12 月】

1 実施の概要

1) 開催期間

2019 年 12 月 3 日(火)～12 月 20 日(金) *入寮: 12 月 2 日(月)/退寮: 12 月 21 日(土)

2) 開催場所

新座キャンパス (宿舎: 太刀川記念交流会館)

3) コースデザイン

①単位数: 4 単位 (4,300 分)

* 単位数内訳: 日本語科目 2 単位(2,800 分)50 分×56 回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2 単位 (1,500 分) 50 分×30 回

4) 開講クラス: 2 クラス(入門 Beginners Class クラス・初級 Elementary Class クラス)

2 結果

1) 参加学生 21 名

21 名全員がシドニー大学 (大学間協定校) から団体枠での参加。

2) 学内の協力

学部	社会学部、異文化コミュニケーション学部、コミュニティ福祉学部
部活・サークル	体育会テニス部、茶道部

学 生	クラス ボランティア	文学部 1 名、法学部 1 名、観光学部 4 名、コミュニティ福祉学部 3 名、現代心理学部 2 名、計 11 名
	学生サポーター（住み込み・フィールドトリップ引率など）	社会学部 19 名、観光学部 3 名、コミュニティ福祉学部 7 名 計 29 名 (社会学部石井先生ゼミ学生、コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト学生を含む)
事務		国際センター、メディアセンター、新座 8 号館講師控室、図書館、保健室、教務事務センター、学生部、人事部、総務部、財務部

3 成果

- ・ 本学への留学パターンの多様化の促進
- ・ 協定校とのインバランスの解消、関係強化
- ・ 本学教職員のホームビジット協力 *2 家庭に計 4 名の学生を受け入れていただいた。
- ・ 本学学生との国際交流の促進

前回に引き続き、新座キャンパス国際センター協力のもとグローバルラウンジ企画と連携し、以下のイベントを行った。

それぞれのイベントの短プロ生と国内学生の参加者数は、以下の図の通り。本学に在学中の留学生(正規留学生・特別外国人学生)も一緒に参加したイベントもあり、留学生との交流も生まれた。イベントの様子は、写真を参照。

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
日本語カフェ	13 名	5 名	18 名
体育会テニス部との交流 (新座キャンパスで実施)	2 名	12 名(留学生 3 名を含む)	14 名
クリスマスパーティー	16 名	38 名(留学生 含む)	54 名
茶道ワークショップ(茶道部)	12 名	16 名(留学生 5 名を含む)	28 名
参加延べ人数	43 名	71 名	114 名

4 今後の課題

- ・ 出願書類（推薦状、成績証明書）の簡略化（特に団体枠・シドニー大学に関して）
- ・ 来日前の情報提供の徹底、来日時フライト情報の管理
- ・ 入寮時の対応、学生サポーター、宿舎先との連携

- ・新座キャンパスでの短プロ周知強化（立教生へのイベント案内等）
- ・新座キャンパス各施設における英語対応の推進
- ・オリエンテーションの効率化
- ・学内フィールドトリップ実施の検討
- ・事務局のプログラム期間中の体制
- ・学生サポーターの安定化・継続性⇒組織化
- ・受入学生の管理（門限、宿舎規則・ルール（ごみ処理）などの徹底周知）
- ・オプションプログラムの充実化、ホームビジット受入先の確保

5 授業

日本語 A クラス（入門）

担当授業者名：山内、長谷川、金庭、高嶋、東平

履修者数：18名

使用教材：『まるごと一日本のことばと文化―〈入門 A1 りかい〉』、独自教材

日本語 B クラス（初級 2）

担当授業者名：浅野、布村、神元、藤田

履修者数：3名

使用教材：『まるごと一日本のことばと文化―〈初級 2 A2 りかい〉』、独自教材

2019 秋の短期プログラムは、21 名の参加があり、日本語クラスは 2 クラス体制で進めた。

A クラス、15 名は、日本語学習歴のない学生対象である。『まるごと一入門 A1』のテキストを使用して日常会話を学習し、独自教材を用いてひらがなの導入を行った。A クラスの文字学習は、ひらがな学習のみとし、カタカナは希望者のみ行った。かなクイズの形式は、50 音図表の穴埋めで行った。50 音図表でのひらがなの確認は文字と発音が整理されよいようである。クイズ時には指示を出さなくても自分で積極的に書き込んでいた。『まるごと』テキストでは、会話と聴解練習を中心に行い、スケジュール通りに進めることができた。A クラスの学生は日本語で話そうという意欲が高いクラスでどの学生も協働的に日本語学習に取り組んでいた。また、最終発表では日本語による自己紹介と英語による文化社会講義についての発表を行った。2019 秋は優秀な学生が多かったので、自己紹介では単に一人でスピーチするだけでなく、インタビューし合ったり途中でコメント入れたりするなどの演出があり、大変面白い発表となった。また、発表の際に準備したディスカッションの質問がとてもよく、有意義な話し合いが行われたように思う。A クラス（入門クラス）の課題としては、『まるごと』テキストには学習者の日本での生活にとって必要な買い物や食事の注文に関する練習が少ないということである。今回は復習の時間を使って、それらの練習を試す教員もいた。今後もキャンパスライフに合わせ、生活のための日本語についても検討していきたい

い。

B クラスは 3 名で、日本語を学習したことがある学生を対象とした。テキストは、『まるごと<初級2 A2>』を使用した。『まるごと』で扱った課、宿題、クイズなどうまく進めることができ、今回の学生には適切であったと思われる。学生たちの中には数年ぶりに日本語を学ぶ者もいたが、テキストの難易度がちょうどよかったため、ブラッシュアップすることができたようである。最終発表の準備では初めは英語で考えてしまい、日本語での発表準備がうまく進まない者もいたが、発表のためのフォーマットを用いることで、日本語だけで考えることができるようになった。今後もその方法で行っていきたい。担当教員によれば最終発表はこれまでの発表と比べても、わかりやすく完成度が高かったとのことである。B クラス（初級2 クラス）の今後の課題としては、教材は充実したが、漢字に対する配慮がまだ必要である。学生の漢字の力に合わせ、配布教材に対し漢字のルビあり、ルビなしを準備し、教師間で共有していくことが必要である。

AB クラスには日本人学生のボランティアが参加し、同世代の話し合いができて非常に良かったと思う。複数回参加してくれたボランティアは学生のことを理解し、適宜話題を選んでくれていた。学生ボランティアの場合当日欠席という課題があるが、100 分授業を 2 つに分け、最初の 50 分に A クラス、後の 50 分に B クラスのようにして、同じ学生に 2 クラス入ってもらえるなどの工夫を行うとその課題は解決できるように思う。今後も学生ボランティアの活躍に期待する。

日本文化社会講義 1 クラス

担当授業者名：山内、長谷川、神元、高嶋、浅野

履修者数：21 名

使用教材：独自教材

2019 秋の日本文化社会講義は、テーマ 1「Ethnic minority of Japan: Ainu Culture and Current Situation」（社会学部 石井香世子先生、テーマ 2「The Cultural Self-Design in Japan」（異文化コミュニケーション学部 スティーブ・カズンズ先生）、テーマ 3「Sports in Japan」（コミュニティ福祉学部 ライトナー・カトリン先生）の 3 つのテーマで行われた。

フィールドトリップとしてテーマ 1 はアイヌ文化センター、テーマ 2 は江戸東京博物館を訪問し、テーマ 3 は大学内で和太鼓を体験した。

日本文化社会講義は、事前学習、講義、フィールドトリップ、事後学習のように進めるが、どの時間においても 2019 秋の学生は非常に積極的であり、事前学習と事後学習では活発な意見交換が行われた。また、講義においても熱心に受講し質問をする学生がおり、テーマへの関心の高さが窺えた。また、講義に同席した教員が講義内容をノートにとり他の教員へ連

絡しているが、この連携がうまく機能しており、事後学習や最終発表の準備に役立っているようである。今後もこの方法を続けたい。

今後の課題としては、各教員との情報共有が挙げられる。これまでの取り組みで改善されつつあるが、授業時に書かせるリアクションペーパーの回収、返却方法などコーディネーターと各教員の間で連絡を取り合う必要がある。また、日本文化社会講義の事前学習と事後学習は日本語教員が担当するが、授業時の時間配分に苦慮したという報告があった。授業方法については今後も担当教員と十分な相談を行い、よりよい授業運営が行えるようにしたい。

【秋学期 1 月】

1 実施の概要

1) 開催期間

2020 年 1 月 8 日(水)～1 月 24 日(金) *入寮：1 月 7 日(火)/退寮：1 月 25 日(土)

2) 開催場所

新座キャンパス（宿舎：太刀川記念交流会館、1/17、18 のみセンター試験のためデ
イリーホテル新座店・デイリーホテル志木店に滞在）

3) コースデザイン

①単位数：4 単位（4,300 分）

* 単位数内訳：日本語科目 2 単位(2,800 分)50 分×56 回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2 単位（1,500 分）50 分

×30 回

4) 開講クラス：3 クラス(入門 Beginners Class×2 クラス・初級 Elementary Class)

2 結果

1) 参加学生 32 名

協定校の区分は 2020

年 1 月現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免除 での参加 (5 名)	ヴァージニア・ウェスレヤン大学 (GLAP) 1 名 南オーストラリア大学 1 名 ウェリントン・ヴィクトリア大学 1 名 ユニバーシティ・カレッジ・ユトレヒト (GLAP) 1 名 延世大学 1 名	
私費での 参加 (7 名)	RMIT オーストラリア校 6 名 カーティン大学 1 名	

団 体 枠 で の 参 加 (20 名)	シドニー大学 20 名	
-------------------------------	-------------	--

2) 学内の協力

学部		文学部、法学部、現代心理学部
学 生	部活・サークル	体育会テニス部
	クラス ボランティア	文学部 1 名、経済学部 1 名、観光学部 4 名、コミュニティ福祉学部 2 名、経営学部 1 名、現代心理学部 1 名、異文化コミュニケーション学部 1 名 計 11 名
	学生サポーター（住み込み・入寮サポート・フィールドトリップ引率など）	文学部 5 名、経済学部 1 名、社会学部 1 名、観光学部 6 名、コミュニティ福祉学部 5 名、現代心理学部 2 名、異文化コミュニケーション学部 6 名（RiCoLaS 学生） 計 26 名
事務		国際センター、メディアセンター、新座 8 号館講師控室、図書館、保健室、教務事務センター、学生部、人事部、総務部、財務部

3) 学外の協力

新座市役所（ホームビジット）＊1 家庭に、計 2 名の学生を受け入れていただいた。

3 成果

- ・本学への留学パターンの多様化の促進
- ・協定校とのインバランスの解消、関係強化
- ・本学教職員のホームビジット協力 ＊2 家庭に計 4 名の学生を受け入れていただいた。
- ・新座市（国際事業活動）との地域連携
- ・本学学生との国際交流の促進

前回に引き続き、新座キャンパス国際センター協力のもとグローバルラウンジ企画と連携し、以下のイベントを行った。

それぞれのイベントの短プロ生と国内学生の参加者数は、以下の図の通り。

イベントの様子は、写真を参照。

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
--------	--------------	-------------	------------------

お正月遊び（全2回実施）	33	12	45
日本語カフェ	13	3	16
体育会テニス部との交流 （新座キャンパスで実施）	2	10	12
参加延べ人数	48	25	73

4 今後の課題

- ・出願書類（推薦状、成績証明書）の簡略化（特に団体枠・シドニー大学に関して）
- ・来日前の情報提供の徹底、来日時フライト情報の管理
- ・入寮時の対応、学生サポーター、宿舎先との連携
- ・新座キャンパスでの短プロ周知強化（立教生へのイベント案内等）
- ・新座キャンパス各施設における英語対応の推進
- ・オリエンテーションの効率化
- ・学内フィールドトリップ実施の検討
- ・事務局のプログラム期間中の体制
- ・学生サポーターの安定化・継続性⇒組織化
- ・受入学生の管理（門限、宿舎規則・ルール（ごみ処理）などの徹底周知）
- ・オプションプログラムの充実化、ホームビジット受入先の確保

5. 授業

日本語 A クラス（入門）

担当授業者名：浅野、布村、神元、藤田、
履修者数：15名
使用教材：『まるごと一日本のことばと文化―〈入門 A1 りかい〉』、独自教材

日本語 B クラス（入門）

担当授業者名：長谷川、金庭、高嶋、藤田
履修者数：15名
使用教材：『まるごと一日本のことばと文化―〈初級 2 A2 りかい〉』、独自教材

日本語 C クラス（初中級）

担当授業者名：島崎、山内、斉藤、平山
履修者数：3名
使用教材：『まるごと一日本のことばと文化―〈初中級 A2/B1〉』、独自教材

2019 冬の短期プログラムは、32 名の参加があり、日本語クラスは 3 クラス体制で進めた。
A クラスは 15 名のクラスで、日本語学習歴のない学生対象である。B クラスも 15 名のク

ラスであるが、既習者でひらがなの読み書きができる者も含まれている。AB クラスともに『まるごと<入門 A1>』のテキストを使用して日常会話を学習し、独自教材を用いてひらがなの導入を行った。会話と聴解練習を中心に行い、スケジュール通りに進めることができた。教材が整備されたおかげで、進め方も安定してきたように思われる。B クラスの既習者については、自発的に話すことは難しかったため、入門クラス在籍でも十分に練習を行うことができ、結果としてこのクラスの配置で問題はなかったように思う。A クラス 15 名と B クラス 11 名の文字学習は、ひらがな学習のみとし、かなクイズの形式は、50 音図表の穴埋めで行った。今回は午前に続き午後に日本語クラスが続く日があり、午前のひらがなが覚えられないうちに午後のひらがなの時間に続くことがあったため、クイズの際に書けない学生もいた。しかし、翌日にはきちんと勉強してきて、前日のひらがなクイズの箇所も埋めることができた。B クラスのひらがな既習者の 4 名は漢字学習を希望し、『使う順と連想マップで学ぶ漢字&語彙』（国書刊行会）を用い「食べ物」と「買い物・ファッション」の漢字の学習を行った。クイズは 2 回実施した。4 名とも他の学生がひらがなを学ぶかわら、自律的に漢字学習を行った。最終発表では日本語による自己紹介と英語による文化社会講義についての発表を行うが、発表の準備の際に成績評価について再確認を行ったため、発表準備の段階から熱心に作業を行った。最終発表当日も指示した時間内に自分の関心を持ったテーマについての的確に説明し、意見交換をすることができた。

C クラスは 2 名で、日本語の基本的な文法を学習したことがある学生を対象とした。テキストは、『まるごと<初中級 A2/B1>』を使用した。実際には、配布したテキスト以上の文法の知識はあったようだが、運用することができなかつたため、会話力を伸ばすことに力を入れた。その結果、流暢さを高めることができたように思う。今回は初中級より高いレベルの学生だったため、『まるごと 中級』を参考に補助教材を用意した。今後レベルの高い学習者を受け入れるかどうかは判断する必要があるが、やや上のレベルの学生が来た際の補助教材をもう少し用意しておくといいと思われる。最終発表では、2 名のうち 1 名の学生は発表内容を確定するのに時間がかかり、口頭練習が不十分なまま発表当日になってしまった。もちろん今回は 3 週目に 2 つのフィールドトリップがあり、テーマを決めることが難しかったのかもしれない。今回の反省を生かし、もう少し早めに最終発表の指示を出すとよいかもしれない。また、初級 1 レベル以上のプレゼンテーションの仕方については、教員間で話し合いを行い、十分検討したうえで指導を行うようにしたいと考えている。

日本語クラスには日本人学生のボランティアが参加した。ボランティアとの会話は自分が習ったことを試すことができる機会であり、学生たちも楽しみにしている。今回のボランティアは欠席の場合は事前連絡があり、人数が少ない日は 100 分授業の前半、後半に分けることで対応できたが、ボランティアのおかげで日本語クラスがより楽しい学びとなるので、今後もより多くの学生ボランティアの参加を期待している。

2019 冬の課題は、欠席者、遅刻者が多かったことである。病欠はやむを得ないが、遅刻は本人の時間管理能力によるものである。オリエンテーション時に成績評価の配分を伝え

ているが、クラスにおいても成績評価について学生に確認させ、参加度が重要であることを伝える必要がある。

2019 夏の短プロでは教員とのやりとりで複数のクラスのメールを全員に送っており、大量のメールの処理に追われた。その反省にもとづき、2019 冬の短プロではクラス別のメールとしたが、それによる問題もなかったようである。次回以降もクラス別のメールとし、重要なお知らせについてはコーディネーターから全員に伝えるようにしていきたい。

日本文化社会講義Ⅰクラス

担当授業者名：浅野、布村、神元、武田、 履修者数：15 名 使用教材：独自教材

日本文化社会講義Ⅱクラス

担当授業者名：島崎、長谷川、斉藤、高嶋、守屋 履修者数：17 名 使用教材：独自教材
--

2019 秋の日本文化社会講義は、テーマ 1「江戸時代の庶民文化」（文学部 水谷隆先生）、テーマ 2「Universal Postal Service in Japan: Challenges in the Digital Age」（法学部 東條吉純先生）、テーマ 3「A Guide to the World of Noh Theatre」（現代心理学部 横山太郎先生）の 3 つのテーマで行われた。テーマ 1 では RiCoLaS による逐次訳が行われ、そのおかげで学生は関心を持って講義を受講することができた。

フィールドトリップとしてテーマ 1 は江戸東京博物館、テーマ 2 は東京北部郵便局、テーマ 3 は国立能楽堂を訪問した。今回は全てバスを利用したが、困難なく移動でき、誘導もスムーズであった。

日本文化社会講義は、事前学習、講義、フィールドトリップ、事後学習のように進めるが、これまでの反省が生かされ、教員からの事前学習の宿題の指示、回収したリアクションペーパーの返却など、教員の連絡がうまくゆき、無駄なく行うことができた。最終日の発表では、日本文化社会講義で学んだことをテーマに発表を行うが、これまでのリアクションペーパーを利用して、スライドを作る学生が複数見られ、リアクションペーパーが学生にとって重要であると認識した。今後は発表準備に間に合うように特に 3 週目のリアクションペーパーの返却方法には留意する必要がある。

今後の課題としては、これまでも試みてきたが、日本文化社会講義担当の教員による授業内容の連携である。事前学習担当者はリアクションペーパーの内容を伝える。講義担当者は講義内容をノートにとり伝える。フィールドトリップ引率教員は引き継いだ内容をもとに講義との関連付けができるように、学生に対し見学中に声がけを行う。事後学習担当者はこ

れまでの活動内容をもとに作業を行わせる。このような連携が重要になってくると思われる。引き続き課題としたい。

評価アンケートの内容と結果は以下のとおりである。

【参加者による評価アンケート】

【学習面】

- 1 プログラムを通して日本語能力が向上しましたか (5 段階)。
Do you think you improved in Japanese language skill through this program?
- 2 日本語のどのスキルが一番向上しましたか (選択式)
In which skills do you think you improved your Japanese the most? (Multiple-choice)?
1) Speaking 2) Listening 3) Reading 4) Writing
- 3 日本語の授業や文化社会講義に、積極的に参加しましたか (5 段階)。
Did you actively take part in the Japanese language class and lectures on Japanese culture and society?
- 4 日本語の授業で使用した教材は、学習意欲を高めるものでしたか (5 段階)。
Did the learning materials of the Japanese class facilitate your learning motivation?
- 5 日本語の授業のスピードは適切でしたか (1 が速い、5 が遅い)。
Was the speed of the Japanese class appropriate?
- 6 日本語の授業の中で、日本語で話す機会が十分にありましたか (5 段階)。
Did you have enough time to speak in Japanese during each class?
- 7 日本語のクラスの学生数は適当でしたか (5 段階)。
Was the number of students per Japanese class appropriate?
- 8 教員の説明や指示は明確でしたか (5 段階)。
Did your teachers give clear instructions and explanations in class?
- 9 教員は授業の準備を周到に行っていましたか (5 段階)。
Were your teachers sufficiently prepared for every lesson?
- 10 日本語の授業に、立教大学の学生が参加して、よかったと思いますか (5 段階)。
Was it good that local university students took part in the Japanese class?
- 11 文化社会講義を通して、日本の文化や社会に対する理解が深まりましたか (5 段階)。
Did you deepen your understanding of Japanese culture and society through the lectures?
- 12 文化社会講義を通して、日本の社会や文化に対する興味・関心が強まりましたか (5 段階)。
Did your interest in Japanese culture and society increase through the lectures?
- 13 フィールドトリップを通して、日本の文化や社会に対する理解が深まりましたか (5 段階)。
Did you deepen your understanding of Japanese culture and society through the field trip?
- 14 あなたはフィールドトリップに満足していますか (5 段階)

Were you satisfied with the field trip?

15 あなたは立教の短期日本語プログラムに満足していますか (5 段階)。

Were you satisfied with Rikkyo Short-Term Intensive Japanese Program?

自由記述

16 このプログラムを通して、日本語で何ができるようになりましたか。

Please tell us what you've got to be able to do in Japanese language through the program.

17 (質問 10 に 4・5 と答えたひとに) どんなところがよかったか教えてください。

If you chose 4 or 5 in the previous question, please tell us why it was good.

18 日本文化社会の中で特に興味を持ったトピックはありましたか。もしあれば、そのトピックと理由を教えてください。

In the lecture on Japanese culture and society, is there topics that you found interesting? If yes, please specify the topic and the reason.

19 (質問 13 に対して) その理由を教えてください。

Please specify the reason to the previous question (Question 12).

20 フィールドトリップについて全体的な印象を教えてください。

Please share your overall impression of your field trip experience.

21 プログラムについて、よかったところを教えてください。

What are the things that you're satisfied with the program?

22 プログラムで、改善すべきだと思う点があれば、記入してください。

Do you have any suggestion for the improvement of the program? If you have any, please write.

【生活面】

23 来日前までに立教大学から十分な情報が得られましたか (5 段階)。

Did you get enough information from Rikkyo before arriving in Japan?

24 立教の学生と十分に交流はできましたか (5 段階)。

Were you able to interact with local students as much as you wanted to?

25 オプショナルプログラムには参加しましたか (選択式)

Did you participate in the optional programs? (either-or choice)

- Yes - No

26 オプショナルプログラムに参加した場合は、楽しめましたか。(5 段階)

- If you participated in the optional programs, did you enjoy the program?

27 ホームビジットプログラムには参加しましたか。(選択式)

- Did you participate in the home visit program? (either-or choice)

- Yes - No

28 食事には満足しましたか (5 段階)。

Were you happy with the board (meal)?

29 太刀川記念交流会館／ホテルでの生活はどうでしたか (5 段階)。

How did you think of living in Tachikawa International Hall and/or the hotel?

30 住みこみアルバイトから十分なサポートを得ることができましたか (5 段階)。

Were you able to get the support you needed from the student supporters at the accommodation?

31 参加費はどうでしたか (1 が安い、2 が適切、3 が高い)。

How was the tuition fee?

32 日本に留学する前に、立教大学について知っていましたか (1 がいいえ、2 がはい)。

Did you know about Rikkyo University before study abroad?

自由記述

33 来日前に、立教大学から知りたかった情報はありますか。

Is there information you wish you had got from Rikkyo before arriving in Japan?

34 出願の手続きについて、意見や提案があれば、記入してください。

If you have any opinion or suggestion regarding our application and admission procedure, please write.

35 オリエンテーションのときに知りたかった情報はありますか。もし、オリエンテーションについて意見や提案があれば、記入してください。

Is there any other information you wish you had got during the orientation? If you have any opinion or suggestion regarding the orientation, please write.

36 (質問 25 が yes の場合) どのオプションプログラムに参加しましたか。

If yes for question 25, what program did you participate in? 37 ホームビジットプログラムに参加した学生は、参加した理由をおしえてください。

If you participated in the home-visit program, please tell us the reason you participated in the program.

38 ホームビジットプログラムに参加しなかった学生は、参加しなかった理由を教えてください。

If you did not participate in the home-visit program, please tell us the reason you did not participate in the home-visit program.

39 オプションプログラムについてコメントがあれば、記入してください。

If you have any comments on the optional program, please write.

40 プログラムの間に、こんなイベントがあればよかったと思うものはありますか。もしあれば、記入してください。

Is there any event you wish you had had during the program? If yes, please write 41 日本での生活で、不便だったことがあれば、記入してください。

If you had any inconveniences or troubles in your daily life, please write.

42 (質問 28 に対して) その理由を教えてください。

Please specify the reason to the previous question.

43 日本での生活で、便利だと思ったことやよかったと思うことがあれば、記入してください。

If there is anything you found convenient or good in your daily life in Japan, please write.

44 (質問 29 に対して) その理由を教えてください。

Please specify the reason to the previous question. (Question 29)

45 (質問 30 に対して) その理由を教えてください。)

Please specify the reason to the previous question. (Question 30)

47 立教短期日本語プログラムを選んだ理由を教えてください。

Please tell us the reason you chose Rikkyo Short-Term Intensive Japanese Program to study abroad.

48 プログラムの前と後の立教大学に対する印象の立教大学の印象を教えてください。

Please tell us your impression of Rikkyo University before and after you come to Rikkyo University.

49 立教大学に関して、いいと思ったことはなんですか。

What did you find good about Rikkyo University?

50 立教大学で参加したいプログラムがあれば、教えてください。

Please tell us if there is any program you wish to join at Rikkyo University..

51 最後に、今後の参加者に一言アドバイスがあれば、記入してください。

Lastly, if you have any advice to the future program, please write.

アンケート結果は以下の通りとなった。

各設問 (5 段階評価、ただし Q25,27,32 は 2 択、Q31 は 3 択) の平均値：春学期

Q1	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13
4.6	4.5	4.6	4.7	4.6	4.9	4.8	4.9	4.7	4.3	4.4	4.1
Q14	Q15	Q23	Q24	Q25	Q26	Q27	Q28	Q29	Q30	Q31	Q32
4.1	4.8	4.6	4.3	1.5	4.9	1.3	4.5	4.5	4.8	2.2	1.1

各設問 (5 段階評価、ただし Q25,27,32 は 2 択、Q31 は 3 択) の平均値：秋学期 (12 月)

Q1	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13
4.9	4.6	4.7	4.3	4.8	4.9	4.8	5.0	4.9	4.7	4.5	4.4
Q14	Q15	Q23	Q24	Q25	Q26	Q27	Q28	Q29	Q30	Q31	Q32
4.6	4.9	4.2	4.4	1.8	4.0	1.2	4.5	4.6	4.8	2.2	1.2

各設問 (5 段階評価、ただし Q25,27,32 は 2 択、Q31 は 3 択) の平均値：秋学期 (1 月)

Q1	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13
4.6	4.5	4.6	4.7	4.7	4.9	4.8	4.9	4.7	4.3	4.4	4.1
Q14	Q15	Q23	Q24	Q25	Q26	Q27	Q28	Q29	Q30	Q31	Q32
4.1	4.8	4.6	4.3	1.5	2.5	1.3	4.5	4.5	4.8	2.2	1.1

設問は基本的に 5 段階評価で、Q31 は 3 択、Q25,27,32 は 2 択、Q16-22,33-51 は自由記述の設問となっている。また Q2 は「聞く・話す・読む・書く」の 4 技能のうちどの技能がもっとも向上したと思うかという設問である。

5 段階評価のもの、および Q25 は平均値の数値が高いほど平均的に評価が高かったと解釈できる内容になっている。Q27 は参加率が 2 点に近いほど高い。Q31 は 2 点に近いほど「妥当である」評価に近い。Q32 は 2 点が「知っていた」1 点が「知らなかった」で計算をし、2 点に近いほどプログラム参加前の本学の認知度が高いことになる。

Q1 から Q22 は授業についての設問である。日本語クラス (Q1 から Q10) については 3 回とも全体的に非常に高い評価を得た。本プログラムは口頭運用力の向上に重点を置いた内容となっているが、Q2 の回答はどの回も「話す」力が伸びたという回答が最も多かった。日本文化社会講義 (Q11 から Q14) についての評価も過年度より評価が高く、実務委員会や FD を通して、フィールドトリップや教員、事務局の連携など、様々な観点において教員、事務局が改善を重ねてきた成果だと考えられる。

Q23 から Q45 は生活面についての設問である。オプションプログラムへの参加 (Q25) は 12 月実施の回がもっとも参加率が高く、ホームビジットの参加 (Q27) と参加費への評価 (Q31)、プログラム参加前の立教の認知度 (Q32) はどの回も同程度だったことがわかる。住み込みアルバイトからのサポートに対する満足度 (Q30) もどの回も高評価であった。

自由記述では、日本語話者との授業を通じたインタラクションがあること、授業の内容、教員の質、快適な宿舎での生活などについて肯定的評価があった一方で、門限が早いことに対するコメントがあった。

2019 年度は年 3 回の実施の初めての年度で、特に 7 月は 67 名と大人数で展開した年度でもあったが、試行を含め 3 年の経験がプログラムの成功につながった。本プログラムの今後の課題については、FD 委員会でも取り上げて確認してきた。本学の短期プログラムは今後拡大して展開することが期待されている。負担を過重にすることなく、より柔軟に実施していく道をひきつづき模索したい。

10. 短期日本語プログラム報告 (B)

経営学研究科・日本語教育センター・国際化推進機構の共同運営により、2019 年 7 月に 1 週間の短期プログラムを実施した。

1 実施の概要

実施期間：2019 年 7 月 23 日(火)～7 月 27 日(土) 5 日間

主管部局：経営学部、日本語教育センター、国際化推進機構グローバル教育センター

連携大学：パジャジャラン大学大学院経済経営学研究科経営学専攻（修士課程）

内容：経営学分野における講義に加え、日本の文化や簡単なビジネスマナーを含む初級日本語授業を取り入れる。通常コースの学生は、初級の日本語基礎編、エグゼクティブコースの学生は日本文化と初級ビジネス会話の2クラスを用意する。

学籍：あり

単位：単位付与なし

修了証書：受講記録として Certificate を受講生ごとに発行（MPMA,日本語教育センターそれぞれで発行）

人数：72名（うち36名がレギュラー・社会人向けコース、36名がバンドン空港職員向けコースとして実施。参加者は全てパジャジャラン大学の学籍を有する学生）

全体スケジュール：7月

	午前	昼	午後
7/21（日）			Depart from Jakarta Airport
7/22（月）	Arrive at Haneda Airport		Tokyo Overview
7/23（火）	Opening Ceremony Conversational Japanese①② 4252～4256 教室	Lunch Pray	Campus Tour
			Tokyo Overview
7/24（水）	Conversational Japanese③ MPMA①4152、4252～4256 教室	Lunch Pray	Company Visit
7/25（木）	Conversational Japanese④ MPMA② 4152、4252～4256 教室	Lunch Pray	MPMA③ 4152
7/26（金）	Conversational Japanese⑤ MPMA④4152、4252～4256 教室	Lunch Pray	Tokyo Overview
7/27（土）	MPMA⑤(Final Presentation) MPMA⑥(Final Presentation) M201,M301,M302 教室	Lunch Pray	Tokyo Overview
			Depart from Haneda Airport

日本語クラス担当教員（50音順）：

浅野有里、神元愛美子、小森由里、谷啓子、布村猛、長谷川孝子、三浦綾乃

2 担当者連絡会

日時：2019年5月31日（金）16時30分～、6月5日（水）16時20分～

内容：学生情報（学習歴、ニーズ確認）、目標設定、教材・教具、教室配置・クラス分け、学生ボランティア配置日など

3 学生ボランティア等の授業協力

- ① 7月24日(水) 異文化コミュニケーション学部 2-4年 5名、異文化コミュニケーション学研究科 1名
- ② 7月2日(金) 異文化コミュニケーション学部 2-4年 9名

4 効果

- ・立教大学(経営学研究科/日本語教育センター)の教育内容を、参加者に対して効果的に伝えることができた。
- ・異文化コミュニケーション学部で日本語教育に関心をもつ学生が学生ボランティアとして日本語クラスに参加し、参加者と交流の機会を持つことができた。
- ・日本語の授業に、積極的に取り組み、パジャジャラン大学生の興味関心が高かった。
- ・プログラム費の納入がなされたことにより、大学の財政及び実施部局への収支差額配分に寄与することができた。

11. センター員活動報告

池田伸子

研究論文

1. 「21世紀における日本語教育センターの役割—多文化共生社会の実現を目指して—」『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年
2. 「『特別』な支援からの脱却を」、『IDE 現代の高等教育』2019年10月号、18—21頁

講演

1. 「性別でなく自分らしく」2019年宇都宮市女性団体連絡協議会大会、於宇都宮市役所、2020年2月15日(基調講演)

研究助成

1. 2017.4～現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価—持続可能で有用な開発型評価とは」(研究分担者)(課題番号:17K02863)

丸山千歌

1. 「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触 —日本に住み、働きつづける日本留学経験者Dの場合—」(小澤伊久美との共同執筆)『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年
2. 「短期日本語プログラムの授業実践と展望 —「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み—」(藤田恵・金庭久美子との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第3号、

立教大学日本語教育センター、2020年

報告

1. 「学内リソースを生かした日本語サポートの設計―「オール立教」の取り組みが留学生へのメッセージ」『大学時報』第 388 号、2019 年、一般社団法人日本私立大学連盟、46―53 頁
<https://daigakujihou.shidaiaren.or.jp/download/?issue=388§ion=2>

研究発表

1. 「日本に住み、働き続ける径路に表れる日本留学、日本語学習経験」（小澤伊久美との共同ポスター発表）、CAJLE2019 年次大会、於カナダ、ビクトリア大学、2019 年 8 月 7 日
https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2019/09/30_CAJLE2019Proceedings_Ozawa-Ikumi-and-Maruyama.pdf
2. 「日本語学習者 X が日本に住み続けることを促進・抑制する記号 ―X の「深い経験づけ」としての留学経験の分析から―」（小澤伊久美との共同ポスター発表）質的心理学会 第 16 回全国大会、於明治学院大学、2019 年 9 月 21 日
3. 「評価的思考を生かしたプログラム運営―内部評価者育成の重要性」（小澤伊久美との共同発表）沖縄日本語教育研究会第17大会、於琉球大学国際教育センター、2020年2月29 日

講演

1. 「Can-do statements を活用した教材開発と教師教育」2019 年全国日语骨干教师论坛、於華東師範大学、2019 年 10 月 19 日（招待講演）

ワークショップ

1. 「PAC 分析ワークショップ」第 11 回東京大学文学部日本語教育研究会、於東京大学文学部、2019 年 7 月 13 日（小澤伊久美と共同で講師）

研究助成

1. 2016.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「「移動して学ぶ」時代の日本語教育―留学体験の意味づけの変容・維持過程の分析から」（研究代表者）（課題番号：16K02824）
2. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価―持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）

金庭久美子

研究論文

1. 「問い合わせ」のメール文におけるドイツ語母語話者の使用状況（村田裕美子との共同執筆）、『日本語プロフィシエンシー研究』、7号、50-71、2019年6月、日本語プロフィシエンシー研究学会（査読有）
2. 「日本語メール文に見られる伝聞表現 ―相手からの情報を前提情報とする場合―」（金蘭美・金玄珠との共同執筆）、『日語日文学』84輯、23-38、2019年11月、大韓日語日学学会（KCI／韓国研究財団塔載誌、査読有）
3. 「短期日本語プログラムの授業実践と展望 ―「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み―」（藤田恵・丸山千歌との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年

研究発表

1. 「日本語インタビューテストにみられる「くり返し」の使用とレベル別特徴」（西部由佳・岩佐詩子・坂井菜緒・萩原孝恵・奥村圭子との共同発表）、口頭発表、第28回小出記念日本語教育研究会、於国際基督教大学、2019年6月29日
2. 「日本語学習者における「テシマウ」の使用の特徴：YNU コーパス、及び8つのメールタスクデータを用いて」（金蘭美・曹娜との共同発表）、口頭発表、第1回国際日本語プロフィシエンシー研究シンポジウム、於大連外国語大学、11月2日
3. 「初中級学習者が「聞き手参加型聴解」を行うために ―生の雑談分析に基づいて―」（山森理恵・奥野由紀子との共同発表）、口頭発表、第1回国際日本語プロフィシエンシー研究シンポジウム、於大連外国語大学、11月2日
4. 「日本語インタビューテストにおけるターン受取後の「考えている」表現の分析 ―学習者のレベル別差異とその特徴―」（西部由佳・岩佐詩子・坂井菜緒・萩原孝恵・奥村圭子との共同発表）、口頭発表、日本語教育学会2019年度第5回支部集会、於関西大学千里山キャンパス、3月14日（発表予定）

その他

1. 交流ひろば出展「短期日本語プログラムにおけるプレゼンテーションの指導 ―限りのある時間を利用した指導方法とは―」（藤田恵との共同発表）、2019年度日本語教育学会秋季大会、於くにびきメッセ、2019年11月23日

研究助成

1. 2019.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築」（研究分担者）（課題番号：19K00734）

藤田恵

研究論文

1. 「短期日本語プログラムの授業実践と展望 ―「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み―」（金庭久美子・丸山千歌との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年
2. 「点字で学ぶ初学者のための母語別音声ガイド付き日本語点字導入教材の作成 ―中国語による音声ガイド作成の試み―」（浅野有里、河住有希子、北川幸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年

その他

1. 交流ひろば出展「短期日本語プログラムにおけるプレゼンテーションの指導 ―限りのある時間を利用した指導方法とは―」（金庭久美子との共同発表）、2019年度日本語教育学会秋季大会、於くにびきメッセ、2019年11月23日

研究助成

1. 2016.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「視覚障害教育から切り拓く国際共生社会における日本語インクルーシブ教育の基盤構築」（研究分担者）（課題番号：JP16K02819）

数野恵理

実践報告

1. 「ゲストセッションを軸に展開するビジネス日本語クラス ―プログラムの評価と再計画のサイクル―」『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年

研究助成

1. 2019.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（B））「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」（研究分担者）（課題番号：19H01274）

小林友美

研究論文

1. 「日本人学部生と留学生による就職活動の相談に用いられる相談者の表現形式」『日本語・日本語教育』第3号、立教大学日本語教育センター、2020年

嶋原耕一

研究発表

1. 「グループディスカッションにおける第三者の修復シーケンスの参加」第2回会話分析研究会、於九州大学西新プラザ、2019年9月1日
2. 「修復シーケンスにおいてトラブルソースを常識的知識として扱うことの分析 ―日本人学生と留学生によるグループディスカッションデータを対象として―」第44回社会言語科学会研究大会、於同志社大学今出川キャンパス、2020年3月6日

研究助成

1. 2018.4～現在 科学研究費助成金（若手研究）「母語話者と非母語話者による成員カテゴリーの交渉と社会的行為について」（研究代表者）（課題番号：18K12433）

12. 2019 年度 F D 記録

(1) 担当者連絡会など

①2019 年度 FD 委員会 (2019 年 7 月 19 日、9 月 3 日、2020 年 2 月 21 日、3 月 2 日 計 4 回)

2019 年度の FD 計画に沿って計画的に進めた。活動の詳細は以下の通りである。

- a.2019 年 7 月 19 日 (金) 実務委員会終了後〔場所〕マキム第 1 会議室 〔参加者数〕10 名
〔議題〕2019 年度の FD 活動の課題 (短期日本語プログラムの運営および日本語科目のさらなる開発と改善) について
- b.2019 年 9 月 3 日 9:00-16:00〔場所〕12 号館会議室〔参加者数〕28 名〔議題〕日本語教育科目運営について、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、個人情報取り扱い注意ほか
- c. 2020 年 2 月 21 日 (金) 実務委員会終了後〔場所〕マキム第 1 会議室 〔参加者数〕10 名〔議題〕2019 年度の FD 活動の課題 (短期日本語プログラムの運営および日本語科目のさらなる開発と改善)、来年度の FD 活動の課題ほか
- d.2020 年 3 月 2 日 (火) 9:00-16:00〔場所〕12 号館会議室〔参加者数〕28 名 〔議題〕日本語教育科目運営、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、新型コロナウイルスの影響による次年度の日本語プログラム運営ほか

(2) 短期日本語プログラムの運営についての検討

短期日本語プログラムは 2019 年度より年 3 回実施することになった。年間を通して短期日本語プログラムを円滑かつ安定的に展開できるよう、FD 委員会で取り上げ、プログラム設計、運営について検証を行った。

各回の実施を成功裡に終えられたことを確認すると同時に、日本語授業、日本文化社会講義およびフィールドトリップ、学生ボランティア、事務局運営の観点から報告があり、協議を行った。日本語授業については安定的な授業運営が確認でき、学部教員・日本語教員・事務局の連携が必要となる日本文化社会講義については日本語コーディネーターがフィールドトリップに同行して課題を確認したうえで、日本語教員向けのマニュアルを作成し、科目運営の改善を図った。学生ボランティアの活用については、ボランティアであるが故の安定的な運営の難しさが共有され、次年度は観光学部との連携を強化して取り組む方向が確認された。事務局運営については住み込みアルバイトほかの課題について報告があり、順次日本語コーディネーターを交えて改善を図ることが確認された。

(3) 日本語科目のさらなる改善と開発

2019 年度は①留学生のためのグローバル教養副専攻プログラムの開発の一環として言語

自由科目の再設計を行う。②漢字 AB などを中心に日本語科目のさらなる改善と開発を行うことを主な課題として取り組んだ。

① の J8 科目（全カリ言語自由科目）の再設計については、春学期中に実務委員会および日本語教育センター運営会議で協議、全カリ委員会での承認を得ることができた。秋学期は、グローバル教養副専攻の第 3 系列に位置づけて新設を図った「国際的協働のための国内インターンシップ」の内容を固めた。グローバル教養副専攻の新テーマのコンセプトや設計、J8 科目（全カリ言語自由科目）の新しい形について年度内に兼任講師も含めて共有された。

② については FD 委員会で、漢字 AB、J6,7 の読解科目を取り上げ、課題と改善について協議を行った。漢字 AB については、初級から上級までの教材開発を終え、小テストや、漢字検定で同じレベルを再受験する履修生向けの教材の開発が進んでいる旨報告があった。J6,7 の読解科目は、日本語プログラムの全体目標に位置づけて当該科目の内容を調整することについて意見交換が行われた。

また、J0 科目の早期帰国者のための対応について、学習時間と成果の確認の観点から報告があり、意見交換を行った。

（４）2019 年度の学生による評価アンケート結果（特別外国人学生対象 J0～J7）

日本語教育センターでは、特別外国人学生用日本語科目について、J0 から J7 レベルの日本語科目を履修したプログラム修了予定学生（帰国予定学生）を対象に日本語プログラムに関するアンケートを実施している。国際センターの協力によりウェブによるアンケートを実施し、春学期 111 名、秋学期（集計中）から回答を得た。

質問内容は以下の通りで、自由記述以外は、5：はい 4：まあそうである 3：どちらともいえない 2：あまりそうでない 1：いいえ の 5 段階の選択式で回答を得た。

1 以前より日本語を聞いて理解できるようになった。

I can listen and understand Japanese better than before.

2 以前より日本語を話すことができるようになった。

I can speak Japanese better than before.

3 以前より日本語を読んで理解できるようになった。

I can read and understand Japanese better than before.

4 以前より日本語で書く力が伸びた。

I can write Japanese compositions (or reports) better than before.

5 以前より多くの日本語の単語を使えるようになった。

I expanded my Japanese vocabulary, and use it in my spoken/ written Japanese.

6 以前より多くの文型を使えるようになった。

I can speak/write Japanese using different sentence patterns.

- 7 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びた。

My ability to discuss and give a presentation in Japanese improved.

- 8 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信がついた。

My confidence to discuss and give a presentation in Japanese increased.

- 9 宿題は日本語の勉強の役に立った。

The homework helped me to learn Japanese.

- 10 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになった。

The Japanese class's activities help me think about Japanese social and cultural issues.

- 11 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確だった。

My teachers gave clear instructions and explanations in class.

- 12 日本語で話す機会が十分にあった。

I had enough time to speak in Japanese during each class.

- 13 立教の日本語科目数に満足している。

I am happy with the variation of the Japanese classes of Rikkyo University.

- 14 1クラスの学生の人数は適当だった。

The number of students per Japanese class was appropriate.

- 15 立教の日本語プログラムに満足している。

Overall, I am happy with the Japanese course of Rikkyo University.

自由記述

立教の日本語プログラムでいいと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was good.

立教の日本語プログラムで改善すべきだと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was not good, and any suggestions for improvement.

アンケートに対する回答者数 137 名、回収率 88.4%で、結果は以下の通りとなった。

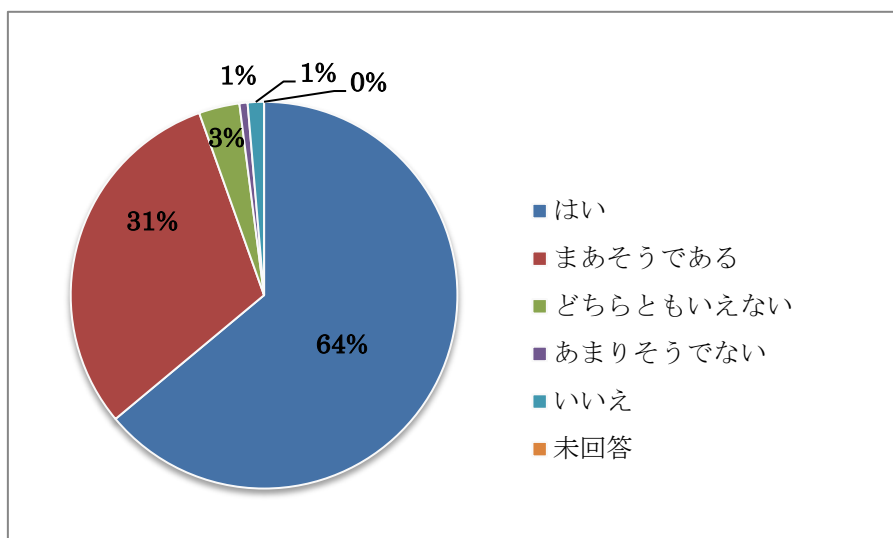
春学期は、4 技能の向上、語彙力の向上、書く力の向上、教師のインストラクション、クラス人数の適正さ、科目数、全体的な満足度などに対する評価が非常に高い。ディスカッションをしたりする力、それに対する自信、日本の文化社会への理解について考えるようになったかについての評価はやや高い。

自由記述では、教師の対応やインタラクティブな授業運営、教師の専門性、日本語による日本語クラスの展開科目数、授業の構成などについて具体的で肯定的な評価があった。。一方で、読解教材に表れる語彙の多さ、宿題の量が多い、小テストが多いなどのコメントがあった。

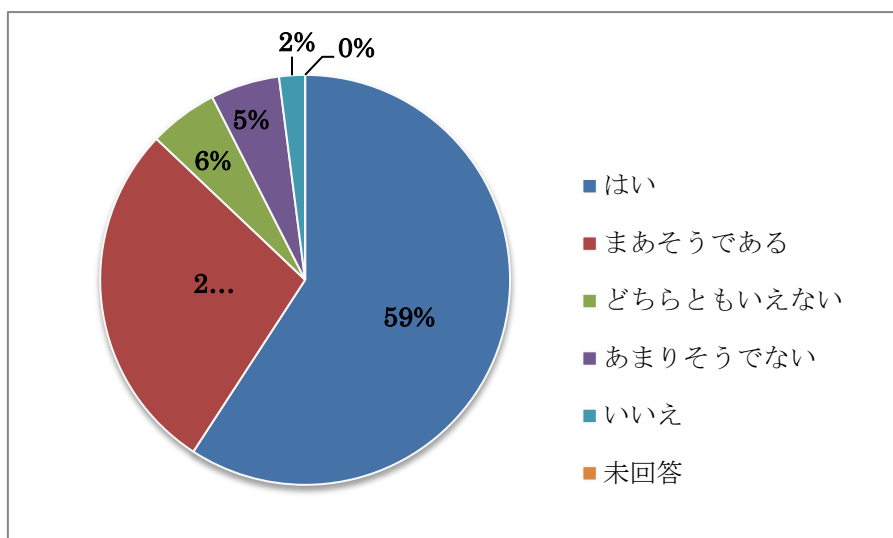
【2019 年度春学期プログラム修了予定学生アンケートの結果の内訳】

(数値は%)

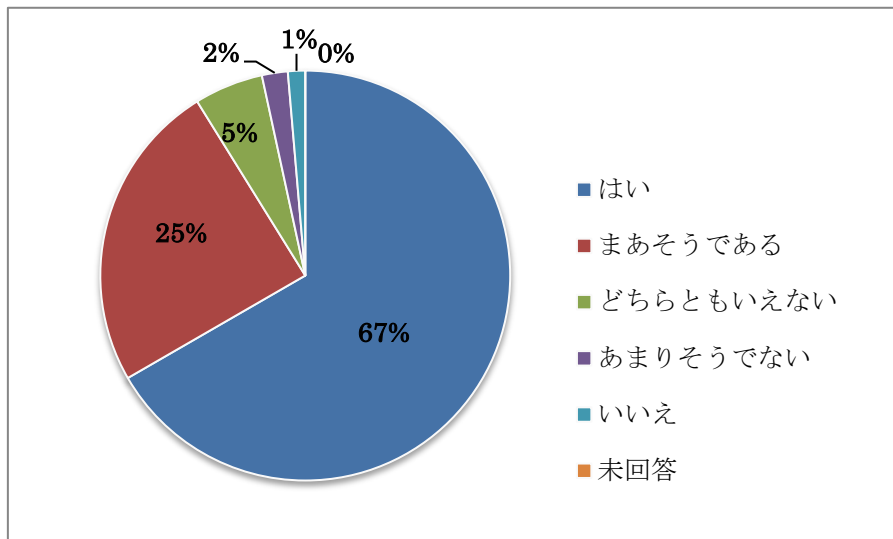
1. 以前より日本語を聞いて理解できるようになりましたか？



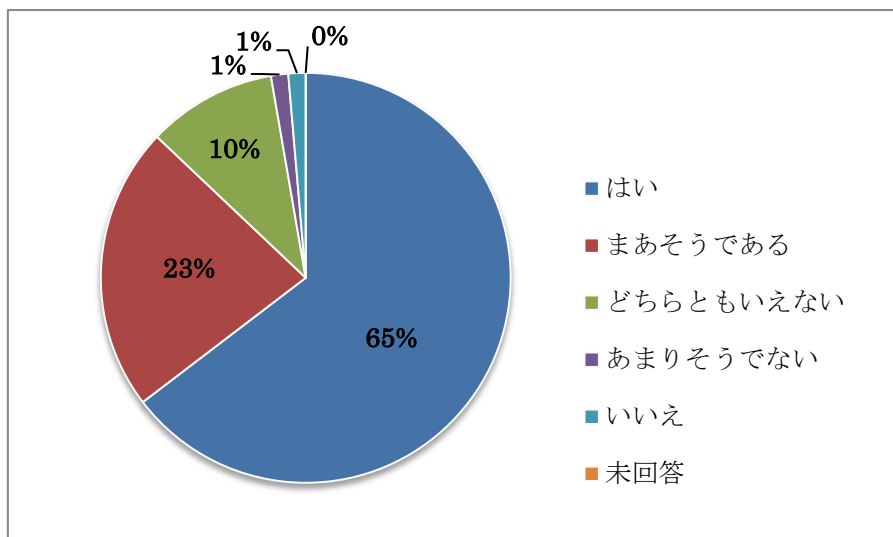
2. 以前より日本語を話すことができるようになりましたか？



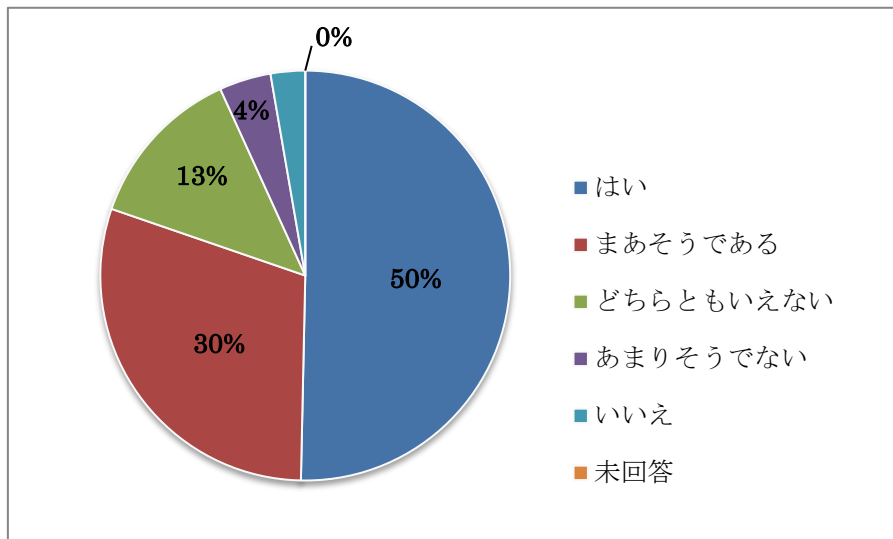
3. 以前より日本語を読んで理解できるようになりましたか？



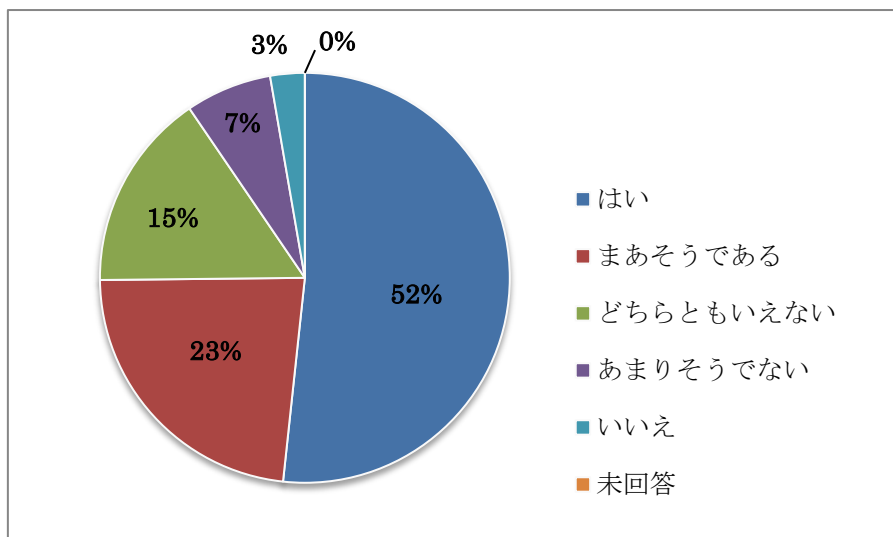
4. 以前より日本語で書く力が伸びましたか？



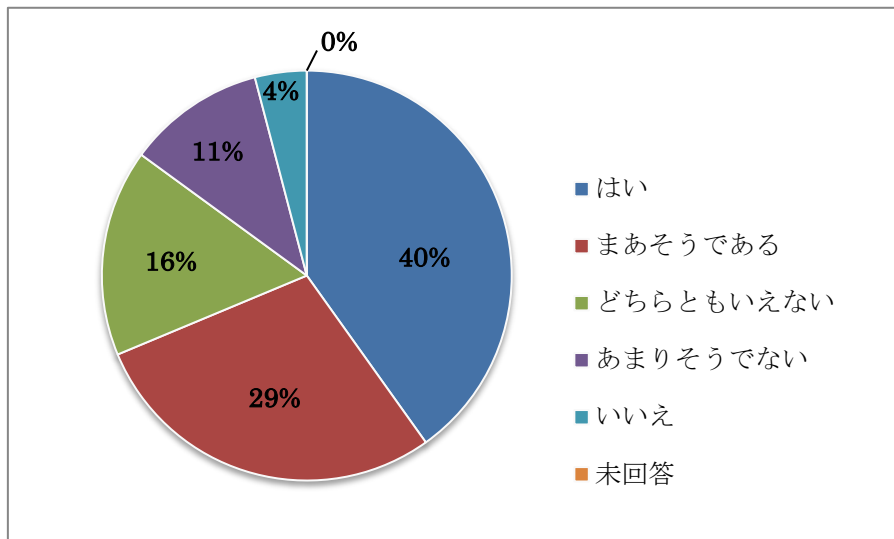
5. 以前より多くの日本語の単語を使えるようになりましたか？



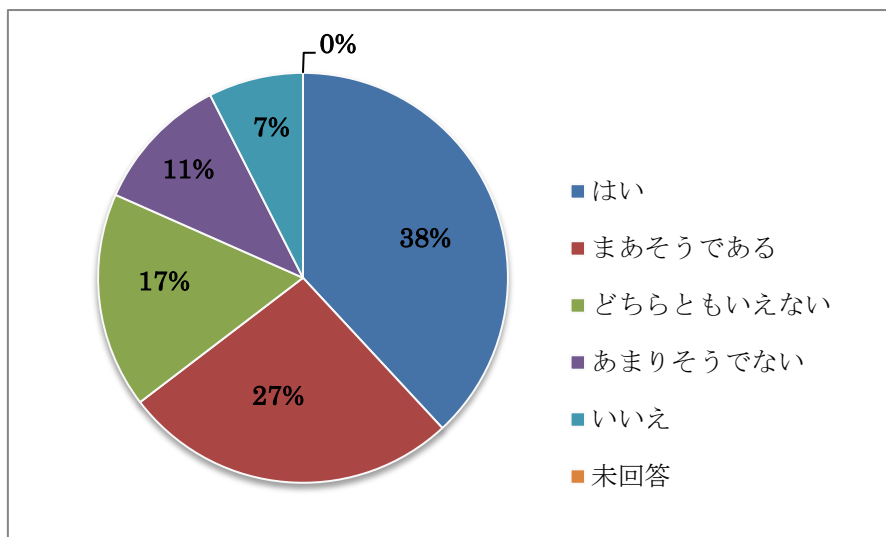
6. 以前より多くの文型を使えるようになりましたか？



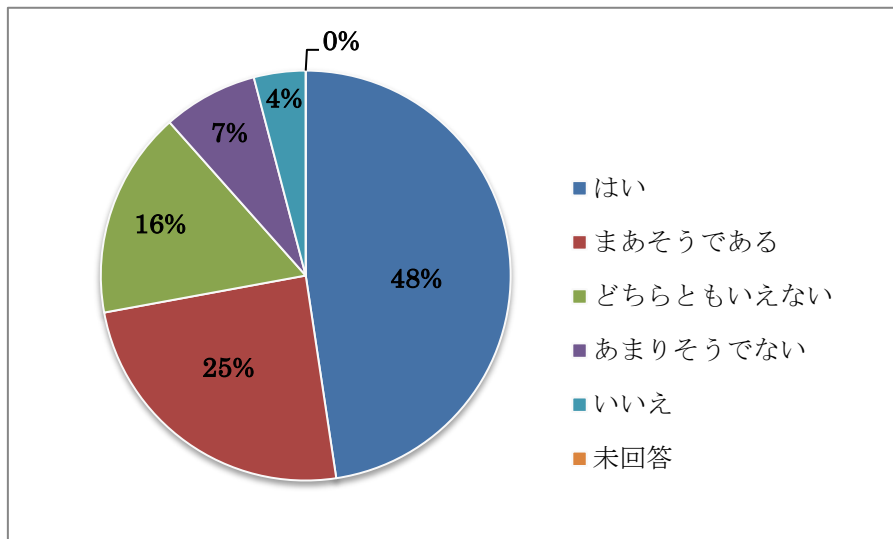
7. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びましたか？



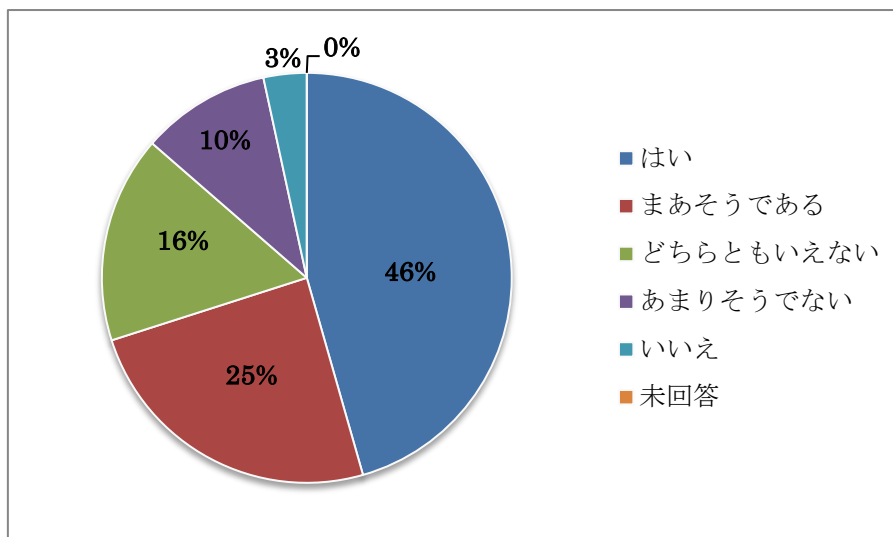
8. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信ができましたか？



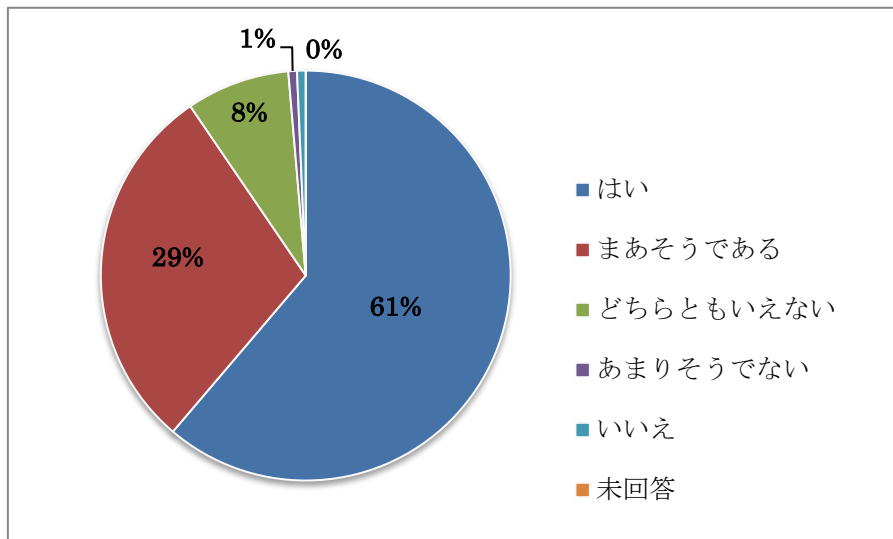
9. 宿題は日本語の勉強の役に立ちましたか？



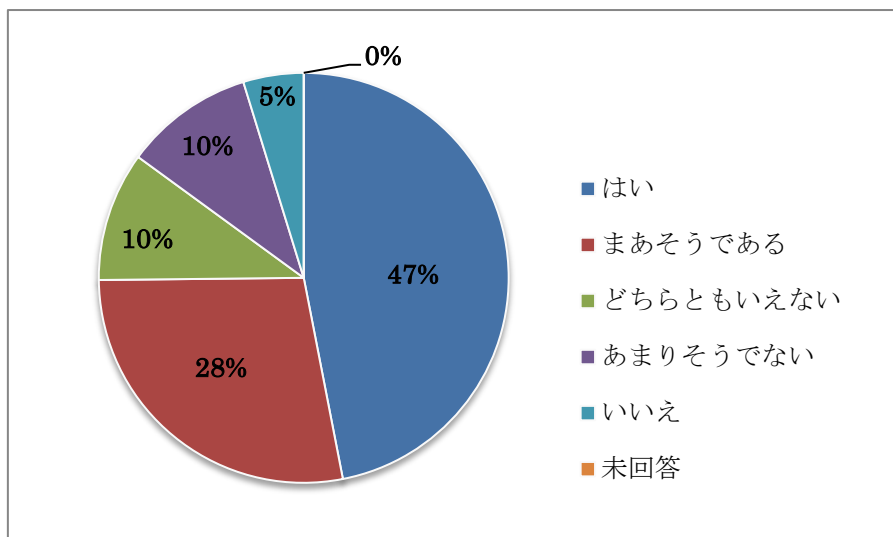
10. 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになりましたか？



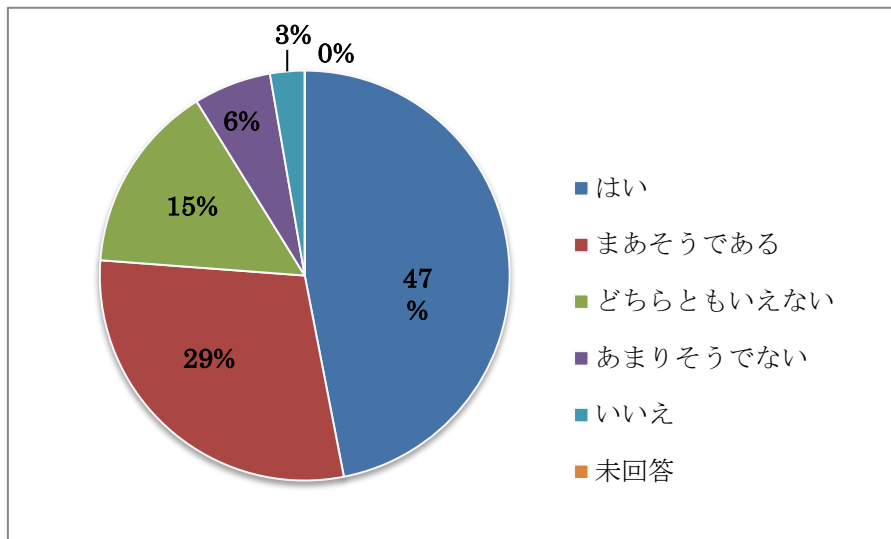
11. 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確でしたか？



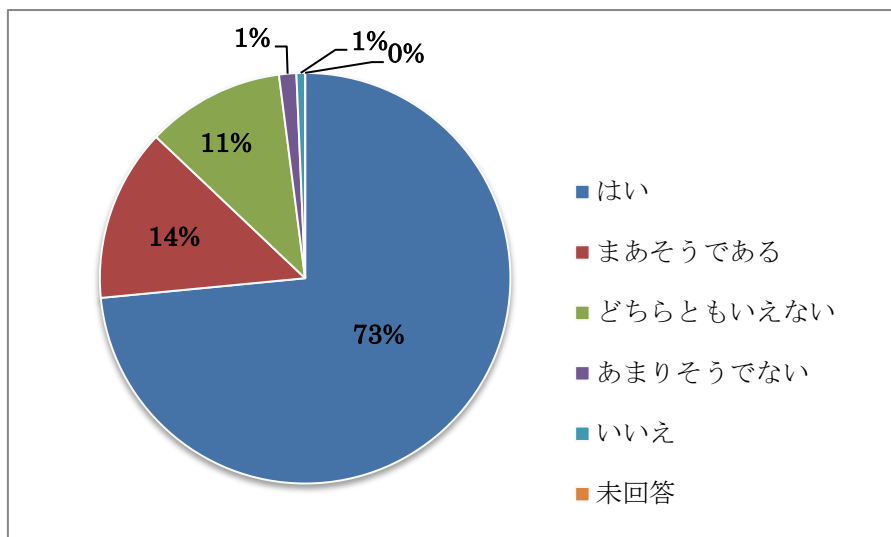
1 2. 日本語で話す機会が十分にありましたか？



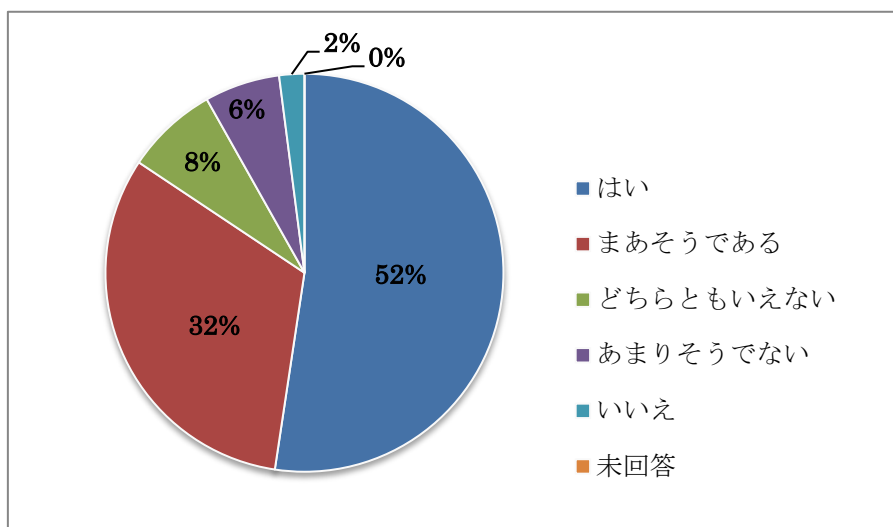
1 3. 立教の日本語科目数に満足していますか？



1 4. 1 クラスの学生の人数は適当ですか？



1 5. 立教の日本語プログラムに満足していますか？



【2019 年度秋学期プログラム修了予定学生アンケートの結果】

集計中

（５）2019 年度の学生による評価アンケート結果（全カリ言語Ｂ、自由科目）

正規留学生が履修する全学共通カリキュラム言語Ｂ 日本語科目「大学生の日本語 A/B」および自由科目（特別外国人学生用 J 8 科目と同時開講）については、各学期末に科目履修者全員を対象に授業評価アンケートを実施した。結果は、担当者連絡会で科目担当者が閲覧できるようにした。分析結果は全学共通カリキュラムの授業評価アンケート報告書に掲載する予定である。これが刊行された後に日本語教育センター部分を転載する。

（６）2020 年度の課題と計画

課題 1：短期日本語プログラムの運営についての検討

短期日本語プログラムは 2019 年度より年 3 回実施することになったが、2020 年度からはシドニー大学の団体受け入れがない回が発生するため、参加者を安定的に確保しながら運営することも課題となる。この課題の達成に不可欠となる他部局との連携も念頭に置きながら、年間を通して短期日本語プログラムを円滑かつ安定的に展開できるよう、プログラム設計、運営について検証を行う。

課題 2：日本語科目のさらなる改善と開発

2020 年度より開設する国際的協働のための国内インターンシップ、2 単位設計の J8 科目（全カリ言語自由科目）の科目運営について検討を行う。また他の日本語科目についてもさらなる改善と開発を行う。

2019 年度 日本語教育センター運営体制

運営会議

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：巖 成男	(経済学部教授)
運営委員	：井川 充雄	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、社会学部教授)
運営委員	：黄 盛彬	(国際センターから、社会学部教授)
運営委員	：韓 志昊	(センター長指名による、観光学部教授)

実務委員会

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：巖 成男	(経済学部教授)
センター員	：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員	：韓 志昊	(観光学部准教授)
センター員	：金庭 久美子	(特任准教授)
センター員	：藤田 恵	(特任准教授)
センター員	：数野 恵理	(教育講師)
センター員	：小林 友美	(教育講師)
センター員	：嶋原 耕一	(教育講師)
事務局	：吉田 友子	
事務局	：山崎 真紀子	
事務局	：関口 資子	
事務局	：森屋 京子	

兼任講師

浅野 有里	佐々木 藍子
李 奎台	沢野 美由紀
泉 大輔	島崎 英香
井上 玲子	高嶋 幸太
小柳津 成訓	武田 聡子
神元 愛美子	谷 啓子
川端 芳子	富倉 教子
小森 由里	長島 明子
斉藤 紀子	長谷川 孝子

布村 猛
東平 福美
開 めぐみ
平山 紫帆
三浦 綾乃
守屋 久美子

山内 薫
森井 あずさ
三浦 綾乃
守屋 久美子
森井 あずさ
山内 薫

2019 年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	12	第 1 回実務委員会
	17	第 1 回運営委員会
5	10	第 2 回実務委員会
	15	第 2 回運営委員会
6	21	第 3 回実務委員会
	26	第 3 回運営委員会
7	19	第 4 回実務委員会
	24	第 4 回運営委員会
9	27	第 5 回実務委員会
10	2	第 5 回運営委員会
	8	第 6 回実務委員会
11	13	第 6 回運営委員会
	6	第 7 回実務委員会
12	11	第 7 回運営委員会
1	31	第 8 回実務委員会
2	21	第 9 回実務委員会
	26	第 9 回運営委員会

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局

運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2019 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2019)

2020 年 3 月発行

編集兼発行者	日本語教育センター
発行責任者	丸山千歌
発行所	立教大学日本語教育センター 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 Tel: 03-3985-4202